

島根大学構内遺跡第5・9次調査
(京田地区1・諸田地区4)

1999年

島根大学埋蔵文化財調査研究センター

序 文

島根大学の敷地内には、かつて薬師山古墳や菅田丘古墳等の存在が知られており、また大学周辺においても著名な遺跡が豊富に残っています。とりわけ、近隣の西川津遺跡やタテチョウ遺跡等は、かつての宍道湖沿岸部に展開した低湿地遺跡として、膨大な量の遺物の存在が明らかにされ、全国的にも注目されています。同様に、敷地の大部分が宍道湖沿岸部にあたる島根大学においてもこうした遺跡の存在が予想されていたことから、平成6年4月に島根大学埋蔵文化財調査研究センターを発足させ、構内遺跡の発掘調査と研究に邁進してまいりました。

本書は、平成9年3月から4月まで実施した構内遺跡第5次発掘調査成果と平成9年9月から平成10年1月まで実施した構内遺跡第9次発掘調査成果の研究報告書です。本書が、今後の埋蔵文化財に対する理解と研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査の開始以来、本書の刊行に至るまで、学内の関係者を始め、島根県教育委員会等各方面から多大な御協力、御支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

島根大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 北川 泉

2 島根大学構内遺跡第5次調査（京田地区1）の花粉分析	
（文化財調査コンサルタント株式会社）	55
3 島根大学構内遺跡第5・9次調査において出土した木材の樹種（能城修一）	63
第6章 まとめ	91

図 目 次

図1 調査区位置図（1/5000）	2
図2 宍道湖・中海周辺の地質（通産省地質調査所「松江地域の地質」1994より転載）	7
図3 島根大学構内遺跡周辺の地質	8
図4 1918（大正7）年の調査地周辺（1/20000）	14
図5 島根大学周辺の遺跡（1/25000）	15
図6 第5・9次調査区配置図（第3層上面、1/600）	20
図7 第5次調査区西壁断面図（1/120）	23
図8 第5次調査区第2a層下位砂層分布図（1/300）	24
図9 第5次調査区遺物分布図（第4c～e層、1/300）	26
図10 第5次調査区遺物分布図（第4b層、1/300）	27
図11 第5次調査区遺物分布図（第4a層、1/300）	28
図12 第5次調査区遺物分布図（第3層・第3層上面、1/300）	29
図13 第5次調査区第4層出土遺物（1/3）	30
図14 第5次調査区第4層出土木製品（その1、1/3・1/6）	31
図15 第5次調査区第4層出土木製品（その2、1/3）	32
図16 第5次調査区第3層・第3層上面出土遺物（1/3）	33
図17 第5次調査区第2a層・第1層下面出土遺物（1/3）	35
図18 第5次調査区第1層・第1層下面出土遺物（1/3）	36
図19 第9次調査区東壁断面図（1/120）	39
図20 第9次調査区第4層出土遺物（1/3）	40
図21 第9次調査区第4層出土木製品（その1、1/3）	42
図22 第9次調査区第4層出土木製品（その2、1/3・1/6）	43
図23 第9次調査区第4層出土木製品（その3、1/6・1/12）	44
図24 調査地点	48
図25 模式総合柱状図	50
図26 有機元素分析結果	52

図27 島根大学構内遺跡の地下地質断面	54
図28 試料採取地点	56
図29 花粉ダイアグラム	57

表 目 次

表 1 ¹⁴ C年代測定値	24
表 2 出土遺物観察表	45
表 3 地域花粉帶の対比	59
表 4 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の樹種	71
表 5 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材一覧	72
表 6 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の写真リスト	75

図 版 目 次

図版 1 遺跡（第5次調査）	1 第1層下面全景（南から） 2 調査区西壁断面（調査区北西部、南西から）
図版 2 遺跡（第5次調査）	1 遺物出土状態（第4a層、図13-1） 2 遺物出土状態（第4b層、図13-2）
図版 3 遺跡（第5次調査）	1 遺物出土状態（第4b層、図13-6） 2 第4b層掘り下げ状況（調査区南東部、東から）
図版 4 遺跡（第5次調査）	1 自然木出土状態（第4b層、SHIM-465、北から） 2 掘り下げ後状況（調査区東半部、南から）
図版 5 遺物（第5次調査）	1 第4層出土土器（1/3） 2 第3層上面出土土器（1/3） 3 第4層・第3層出土遺物（1/3）
図版 6 遺物（第5次調査）	1 第4層出土木製品（1/10） 2 第4層出土木製品（1/3）
図版 7 遺物（第5次調査）	1 第2a層・第1層下面出土土器（外面、1/3） 2 同上（内面、1/3）
図版 8 遺物（第5次調査）	1 第1層・第1層下面出土遺物（外面、1/3） 2 同上（内面、1/3）
図版 9 遺跡（第9次調査）	1 自然流路（U・1～2グリッド、第3層上面、北西から）

- 2 調査区東壁断面（C～Dグリッド、西から）
- 図版10 遺物（第9次調査） 1 第4層出土遺物（1／3）
2 第4層出土木製品（1／3・3は1／4）
- 図版11 遺物（第9次調査） 1 第4層出土木製品（1／3）
2 第4層出土木製品（1／6）

第1章 調査に至る経緯と組織

1 調査に至る経緯

島根大学構内では、1994年度から埋蔵文化財調査研究センターを発足させ、構造物建設工事に伴って発掘調査を継続している。その結果、縄文早期末～近代における一定の諸成果が得られ、既に、周知の低湿地遺跡として認識されるに至っている。

第5次調査は、学部改組によって発足した生物資源科学部の1号館新館に伴って実施されたものである。

調査区は、第1次調査区（橋繩手地区）の南約150m、第2次調査区（諸田地区）の北約150mの沖積地に位置しており（図1）、既往調査区の様相をつなぐ成果が得られることを期待した。こうした課題を認識し、1996年8月から調査を開始した。

第9次調査は、生物資源科学部校舎に供給する電気、ガス、水道等のライフラインを一括して納める共同溝設営に伴って実施されたものである。

調査区は、北側の第5次調査区（京田地区）と南側の第2・4次調査区（諸田地区）の間に挟まれる様に隣接している（図1）。したがって、本次調査では、既往個別調査区で判明していた層位の相互関係を把握し、これによって古環境変遷の平面的な復元が可能になることを期待した。こうした課題を認識し、1998年8月24日から調査を開始した。



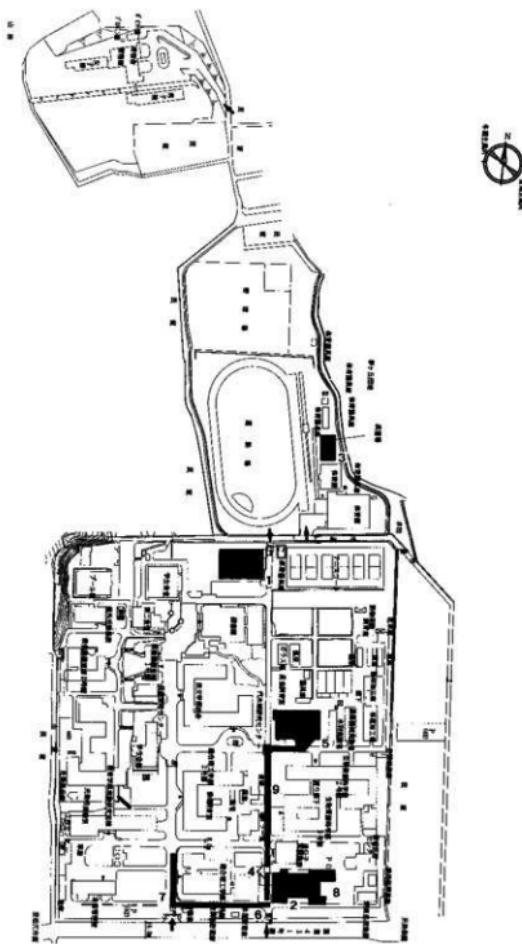


図1 調査区位置図 (1/5000)

1. 第1次調査地：第2体育館
2. 第2次調査地：総合理工学部3号館Ⅰ
3. 第3次調査地：武道場
4. 第4次調査地：共同溝
5. 第5次調査地：生物資源科学部1号館
6. 第6次調査地：共同溝
7. 第7次調査地：共同溝
8. 第8次調査地：総合理工学部3号館Ⅱ
9. 第9次調査地：共同溝

2 島根大学埋蔵文化財管理運営委員会規則

(平成6年島大規則第9号)

[平成6年4月22日制定]

(趣旨)

第1条 島根大学構内の埋蔵文化財（以下「埋蔵文化財」という。）の発掘調査及び修復保存に関する重要な事項を審議するため、島根大学に島根大学埋蔵文化財管理運営委員会（以下「管理運営委員会」という。）を置く。

(審議事項)

第2条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる事項について企画し、審議し、及び決定する。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に係る基本計画に関すること。
- 二 埋蔵文化財の修理保存に係る基本計画に関すること。
- 三 その他埋蔵文化財に関する重要な事項

(組織)

第3条 管理運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 学長
 - 二 各学部長
 - 三 第7条第3項に規定する副センター長及び同条第1項に規定する研究員のうちから1名
 - 四 各学部教官代表 各1名
 - 五 事務局長
- 2 前項第3号に掲げる研究員である委員は、学長が選考する。
 - 3 第1項第4号に掲げる委員は、学部長の推薦に基づき学長が任命する。
 - 4 第1項第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補次の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
 - 5 委員会に委員長を置き、委員長は、学長をもってこれに充てる。

(会議)

第4条 委員会は、委員長が召集し、議長は、委員長をもってこれに充てる。

- 2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。
- 3 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、出席委員の過半数をもって議決する。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員会が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者を出席させ、その意見を聞くことができる。

(調査研究センター)

第6条 管理運営委員会の下に、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たるため、埋蔵文化財調

査研究センター（以下「調査研究センター」という。）を置く。

（調査研究センターの組織）

第7条 調査研究センターに次の各号に掲げる職員を置く。

- 一 研究員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官若干名
 - 二 調査員 埋蔵文化財の専門的知識を有する教官1名
 - 三 調査補助員 必要に応じて採用する非常勤職員
- 2 調査研究センターにセンター長を置き、センター長は学長をもってこれに充てる。
- 3 調査研究センターに副センター長を置き、副センター長は第1項に規定する研究員のうちから学長が任命する。
- 4 センター長は、調査研究センターの管理・運営を総括する。
- 5 副センター長は、センター長を補佐し、埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存の指導・監督を行なう。

（研究員及び調査員）

第8条 研究員及び調査員は、当該教官の所属する学部長等の承諾を得て、学長が任命する。

- 2 研究員は、必要に応じて埋蔵文化財の調査研究を行う。
- 3 調査員は、副センター長の指導の下に専ら埋蔵文化財の発掘調査及び修復保存に当たる。

（報告）

第9条 副センター長は、埋蔵文化財の発掘調査を終了したときは、センター長を経て管理運営委員会に調査結果を報告するものとする。

（事務）

第10条 管理運営委員会の事務は、庶務課が処理し、調査研究センターの事務は、施設課において処理する。

（雑則）

第11条 この規則に定めるもののほか、管理運営委員会に関し必要な事項は、管理運営委員会において定める。

3 調査研究組織

(平成8年8月8日～平成9年1月31日)

管理運営委員会

委 員 長	学 長	北川 泉	
委 員	法文学部長	岡崎 勝彦	教育学部長 中川 政樹
	総合理工学部長	吉川 通彦	生物資源科学部長 本田 雄一
	法文学部助教授	松井 嘉徳	教育学部教授 相良 英輔
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	生物資源科学部教授 仙田久仁男
	副センター長	田中 義昭	研究員 渡邊 貞幸
事 務 局 長	佐竹 良夫		

埋蔵文化財調査研究センター

センターグループ長	学 長	北川 泉	
副センター長	法文学部教授	田中 義昭	
研究員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授 林 正久
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	総合理工学部教授 時枝 克安
	生物資源科学部教授	片桐 成夫	水城研究センター助手 竹廣 文明
事 務 局	施設課長	齋藤 健次	
調査員	助手	手會下 和宏	
調査補助員		埴生 典子	模田 植久

(平成10年8月24日～平成10年10月29日)

管理運営委員会

委 員 長	学 長	北川 泉	
委 員	法文学部長	喜多村 正	教育学部長 中川 政樹
	総合理工学部長	伊藤 隆	生物資源科学部長 本田 雄一
	法文学部教授	松井 嘉徳	教育学部教授 相良 英輔
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	生物資源科学部教授 仙田久仁男
	副センター長	田中 義昭	研究員 渡邊 貞幸
事 務 局 長	伊藤 良昭		

埋蔵文化財調査研究センター

センター長	学 長	北川 泉		
副センター長	法文学部教授	田中 義昭		
研究員	法文学部教授	渡邊 貞幸	教育学部教授	林 正久
	総合理工学部教授	徳岡 隆夫	総合理工学部教授	時枝 克安
	生物資源科学部 教 授	片桐 成夫	汽水城研究 センター助手	竹廣 文明
事務局	施設課長	板野 剛		
調査員	助 手	會下 和宏		
調査補助員		埴生 典子	模田 植久	

第2章 遺跡の環境と既往調査成果

1 地質構成と自然史

本遺跡の所在する出雲地域は、大別的には、日本海に臨む島根半島、宍道湖・中海といった汽水域沿岸部、山陽地方につながる中国山地等によって構成されている。

宍道湖・中海は、後氷期における海水準変動の関与によって、三角州や砂州が内湾を閉塞した海跡湖で、その過程については、時代ごとの具体的な古地形が復元されつつある¹¹⁾。縄文海進期の本地域は、概略的には、現在の宍道湖が大社湾と繋がった古宍道湾（仮称）と中海が美保湾と繋がった古中海湾（仮称）とからなり、その沿岸部は、浅海性砂泥底で樹枝状のおぼれ谷が形成されたいたとみられる。

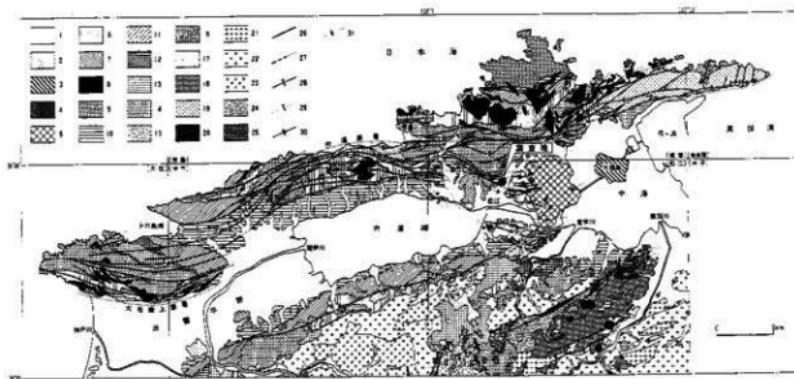


図2 宍道湖・中海周辺の地質（通産省地質調査所「松江地域の地質」1994より転載）

松江及び周辺地域の地質図 鹿野・吉田（1985）鹿野・中野（1985, 1986）、鹿野ほか（1989, 1991）及び本報告の地質図より編集。1-4=第四系、5-19=中新統、20-23=古第三系、24=上部白亜系、25=時代未詳の変成岩類。1=完新世堆積物及び埋立地、2=更新世堆積物、3=大根島玄武岩、4=野呂玄武岩、5=和久羅山安山岩、6=松江層アルカリ玄武岩-粗面安山岩溶岩、同火砕岩及びそれらの再堆積物、7=松江層の砂岩、シルト岩など、8=礁基性-中性質入岩、9=葛溝山層、10=古江層及び布志名層、11=牛切層及び大森層のデイサイト-流紋岩溶岩、12=牛切層及び大森層の安山岩溶岩、13=成相寺層及び川合層、火砕岩、14=成相寺層及び川合層、久利層のデイサイト火砕岩-溶岩とそれらの再堆積物、15=成相寺層及び川合層、久利層の安山岩溶岩、火砕岩、16=成相寺層及び川合層、火砕岩、17=成相寺層及び川合層、久利層の碎屑岩、18=波多層の安山岩溶岩、火砕岩、デイサイト火砕岩及びそれらの再堆積物、19=古湯層、20=石英斑岩及び花崗斑岩の岩層、21=下久野花崗岩、22=鶴花崗岩及び布都花崗岩、23=大東花崗閃綠岩、24=八重山大層及び上島火山岩層、25=上東東変成岩及び鳥屋層変成岩、26=断層、27=推定断層（鉛錆）及び柱状在断層（点線）、28=背斜、29=伏在背斜、30=向斜、31=伏在向斜。

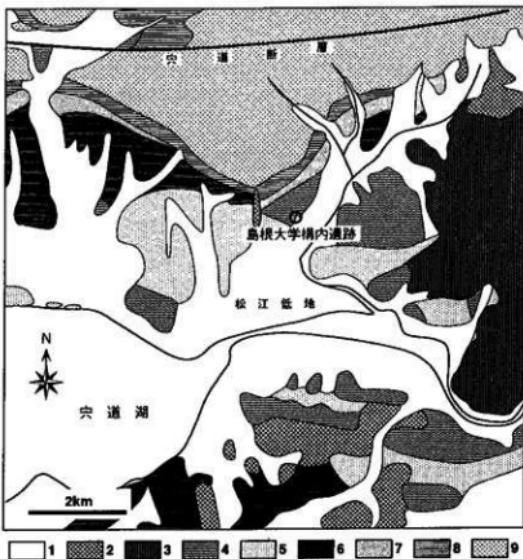


図3 島根大学構内遺跡周辺の地質

- 1 完新統
 - 2 殮丘堆積物
 - 3 和久麗山安山岩
 - 4 松江層玄武岩
 - 5 松江層砂岩
 - 6 布志名層泥岩
 - 7 大島層砂岩・頁岩および礁岩
 - 8 久里・川合層頁岩
 - 9 久里・川合層泥灰岩～石英安山岩溶岩および同質火碎岩
- (島根県地質図編集委員会編、1982をもとに作成)

本遺跡は、宍道湖北東側の松江低地部北縁に位置している。松江低地は、朝酌川の下流に形成された小規模な沖積地で、この地下には、軟弱な完新統中海層泥層が分布し、宍道湖湖底、出雲平野下に連続している²。

中海層泥層中には、内湾性の貝化石や、アカホヤ火山灰（K-A h）層³が挟在しており、古境復元の有力な資料となっている。アカホヤ火山灰層は、島根大学構内遺跡（橋繩手地区）の調査成果によって、纖維土器包含層と轟B式包含層の間に挟在していることが確認されており、その降灰は、概して、縄文早期末と前期初頭の移行期に求められる。ところで、日本海採取の海底コアをもとにした有孔虫殻酸素同位体比の検討によれば、温暖化に伴う縄文海進によって少なくともアカホヤ火山灰降下時までには、日本海に対馬暖流が本格的に流入し、現在の日本海域と同様の海洋・気候環境形成をみていたと推定されている⁴。この仮説を肯定すれば、縄文前期における本地域は、既に温暖湿润な日本海型の気候環境であったことが想定出来よう。

遺跡周辺の植生史については、これまでのボーリング調査や、西川津遺跡、島根大学構内遺跡等の資料によって復元されつつある¹⁵⁾。縄文早期末～前期前半頃の植生を要約的に述べると、古宍道湾水辺には、イネ科の草本が繁茂しており、流入河川沿いには、エノキ、ムクノキ、ケヤキを要素とする河畔林が存在していたと想定されている。また、島根大学構内遺跡周辺の陸域には、暖温帶中の二次林と考えられるコナラ、クマシデを要素とした落葉樹林の存在が推定される。一方、東隣の朝鈴川流域、西川津遺跡周辺では、クロマツを要素とする海岸林、ないしアカマツを要素とする二次林の存在が想定されている。

2 歴史的環境

島根県は、山陰地方の西方に位置し、旧国制では、県東部「出雲」と県西部「石見」、日本海に浮かぶ「隱岐」より成る。日本海に突出した島根半島は、九州地域や北陸地域等との沿岸交流の結節点的役割をなし¹⁶⁾、加えて、山越えルートによる山陽、近畿地域との交流も頻繁であったといえる。こうした周辺地域との文物交流が認められる一方で、青銅器大量埋納¹⁷⁾や弥生後期土器様式、墓制¹⁸⁾に代表される様に、地域性を強く発揮していることも看取される。

以下、本遺跡周辺を中心に、出雲地域の遺跡を、通時のに瞥見する。

旧石器時代 西川津遺跡、タテチョウ遺跡で尖頭器、細石刃核が出土しているが、明確な遺跡は知られていない。

縄文時代 本地域では、現状で、縄文早期木織維土器の時期から、本格的な遺跡形成の開始が認識されている。当該期の遺跡は、森林と汽水域、河川等、異なる環境の遷移帯付近に設営される傾向があり、縄文人の複合的、総合的な資源利用をうかがうことが出来る。こうした資源利用の中核をなすのが、古宍道湾、古中海湾を主要なテリトリーとした「内湾性漁業」の展開で、そのことは、遺跡から出土する魚貝類遺存体¹⁹⁾や漁撈具、丸木舟、石器組成によって端的に示されていよう。

前期初頭段階になると、九州地域や朝鮮地域等で出土する轟B式上器が、山陰地域の遺跡でもみられ、海洋を介した該期の広域的交流がうかがえる。本遺跡から北東約900mに位置する西川津遺跡（海崎地区）²⁰⁾で出土した前期初頭の上器群は、刺突文、押引文、隆蒂文など多用な様相を示しており、九州轟B式の他、近畿地域前期初頭土器との関連も指摘されている。また、宍道湖北側に位置する佐太講武貝塚は、縄文前期に所属する日本海側では希少な貝塚として、早くから著名である²¹⁾。後続する羽島下層II式段階以降は、近畿、中国地域の齊一的な土器圏に包摂されていくが、九州曾畠式土器等も点的に散見出来る。宍道湖、中海沿岸では、中期の遺跡が比較的希薄であるのが特徴的で、該期の遺跡は米子市目久美遺跡²²⁾、陰田遺跡²³⁾、安来市島田黒谷I遺跡²⁴⁾等、中海南岸地域でのみしか認められていない。こうした早期から中期にかけての遺跡の消長については、水域沿岸部生産領域の生態系や植生等、食料資源獲得上の生態諸条件の推移に大きく規定されていたと

予察され⁹、今後の古環境復元成果が問題とされるところである。

後期以降は、古穴道湾の埋積進行による出雲平野形成に馴化して、沖積地にも遺跡が形成される様になり、例えば、湖陵町三部竹崎遺跡¹⁰、出雲市三田谷遺跡¹¹、矢野遺跡¹²、大社町原山遺跡¹³等がある。また、中海北岸には、美保關町サルガ鼻燈台洞窟遺跡¹⁴、崎ヶ鼻洞窟遺跡¹⁵、権現山洞窟遺跡¹⁶、小浜洞窟遺跡¹⁷等の海蝕洞窟遺跡が存在し、後期を中心とした遺物が出土している。近隣の朝酌川流域、西川津遺跡、タテチョウ遺跡¹⁸からも後~晚期諸型式の土器が出土している。

弥生時代 前記した西川津遺跡、タテチョウ遺跡が著名である。

西川津遺跡では、前・中期の掘立柱建物跡、貯蔵穴、木製農耕具保管施設、貝塚等の検出をみており、前~後期における大量の土器、土笛、ヒヨウタン製容器、ゴホウラ製貝輪、結合式釣針、二条突帯鑄造鉄斧片等、特筆される遺物も出土している。こうした成果は、付近に、手工業生産、交易、祭祀等の機能を具備した「拠点的」集落¹⁹の存在を想定させる。当地域における初期農耕の生成、進展過程や拠点的集落の様相、特質を追及する上で、重要な位置を占める。

古墳時代 本遺跡西側の菅田丘陵に、薬師山古墳²⁰、小丸山古墳²¹、菅田丘古墳²²などが存在していたが、いずれも消滅している。

薬師山古墳は、1922（大正11）年の夏、島根大学の前身である旧制松江高等学校の学生寮北方で土取り工事が行われた際に発見され、武田雄三氏の尽力によって出土遺物が保護された。本古墳は、一種の箱式棺を主体としたものと考えられ、倣製四乳鏡、刀、鉄鎌、滑石製有孔円板、須恵器等が出土している。

また、東側の金崎丘陵には、2基の前方後方墳と9基の方墳で構成される金崎古墳群²³が存在していたが、一部は破壊されて、現在は国指定の1~5号墳のみ残存している。このうち、1号墳は、1947（昭和22）年8月、梅原末治氏、山本清氏等によって発掘調査されている。全長約32mの前方後方墳で、竪穴式石室（竪穴系横口式石室とみる説もある）を主体部にもち、副葬品として倣製内行花文鏡1、勾玉（碧玉5、メノウ6）、碧玉管玉4、碧玉彫玉2、ガラス小玉多数、滑石白玉多数、滑石製子持勾玉2、大刀1、須恵器（はそう4、長頸壺1、連管五壺1、高壺7、筒型器台1）等が発見されている。本墳及び薬師山古墳出土の須恵器は、山本清氏によって山陰須恵器編年I期の標式とされた²⁴。

また、朝酌川流域の西川津遺跡、原の前遺跡²⁵、タテチョウ遺跡では該期にも遺物出土が認められ、付近に集落の存続していたことが推定される。その他、提迺遺跡では、低丘陵斜面から、18棟の竪穴住居跡が検出されており、該期集落の実相を知る上で貴重である²⁶。

奈良時代以降 前記した朝酌川流域の遺跡で、大量の遺物出土をみている。このうち、原の前遺跡では、緻密な調査によって古墳前期から平安時代までの朝酌川河道変遷が把握され、平安時代の人形、箸（斎串）状木製品、舟形木製品等、律令祭祀に関わる遺物や長さ4.38mの橋脚等が出土している。

3 島根大学構内遺跡の既往調査成果

島根大学構内遺跡は、松江市市街地の北東郊外、薬師山古墳等が占地する菅田丘陵と金崎古墳群が占地する金崎丘陵の谷部に位置し、丘陵裾部や低湿地一帯にかけての広範囲に形成されている。前記した朝酌川流域の西川津遺跡、原の前遺跡、タテチヨウ遺跡とも隣接している。

縄文海進期には海岸線が遺跡内まで進入しており、古宍道湾・古宍道湖最奥部付近の水辺に展開した遺跡である。特に縄文遺跡においては、局地的な微地形復元や植生復元等が、生業、居住、移動の諸形態を検討する際、有用となる立場にたって³⁰、理化学的な調査研究も同時に進める様、務めている。

第1次調査（橋繩手地区1）³¹ 菅田丘陵の東側裾部と沖積地の変換部にあたる。アカホヤ火山灰層（約6300年前）を挟んで、下位から縄文早期末纖維土器が、上位から縄文前期初頭轟B式土器が、層位的に分離して検出され、縄文前期初頭～前に比定される丸舟舟推定板材が出土した。

第2次調査（諸田地区1）³² 第1次調査地の南約300mに位置する。水域の沿岸流によって、西側から東側へ伸長する縄文晩期の砂州が検出された。また、縄文前期以降の海成層中からは、現地性のシジミ死滅貝が多量に検出されており、当該期の水域が、シジミの再生産される砂泥底の水環境であったことが判明している。

第3次調査（深町地区1）³³ 第1次調査地の北東約120mに位置し、金崎丘陵の西側裾部と沖積地の変換部にあたる。縄文前期に比定される完形の櫂2本・棒状木製品1本が並べて置かれた状態のまま出土した。上位からは、弥生中期初頭の流路状造構が検出され、付近における居住域、生産域の存在が予測される。

第4次調査（諸田地区2） 第2次調査区の西側に隣接する。第2次調査で判明した縄文期の砂洲上面で自然流路が検出され、下底面から縄文晩期突堤文土器が出土した。

第6・7次調査（橋本地区1・2）³⁴ 第2次調査区の西側に隣接する。第2次調査区で判明した縄文期の砂洲上面から自然流路が検出され、主として、弥生～古墳後期の土器、木製品等が出土した。

参考文献

- (1) 德岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三梨昂「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』36 1990年
小畠浩『中国地方の地形』古今書院 1991年
- 徳岡隆夫・中村唯史他「島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡」『汽水域研究』3 島根大学汽水域研究センター 1996年
- 林正久「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』3 島根県古代文化センター 1996年
- 田中義昭「山陰地方における弥生時代の海水準について-遺跡立地からの検討-」『島根大学地域資源環境学研究報告』15 1996年

- (2) 中村唯史「1 地理的環境」「島根大学構内遺跡第1次調査（繩文手地区1）」島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
- (3) 中村唯史・徳岡隆大「宍道湖ボーリングS B 1から発見されたアカキヤ火山灰と完新世の古地理変遷についての再検討」『島根大学地球資源環境学研究報告』15 1996年
- (4) 新井朋夫・大場忠道ほか「後期第四紀における日本海の古環境」「第四紀研究』20-3 1981年
大場忠道「日本海の環境変化」「文明と環境』10 朝倉書店 1995年
- (5) 大西郁夫「中海・宍道湖底表層コアの花粉分析と環境変遷」「山陰地域研究（自然環境）』2 島根大学汽水域研究センター 1986年
大西郁夫・渡辺正巳「松江市西川津町タチヨウ遺跡の花粉分析」「山陰地域研究（自然環境）』3 1987年
大西郁夫・原田吉樹・渡辺正巳「松江市西川津遺跡の花粉分析」「山陰地域研究（自然環境）』5 1989年
大西郁夫・干場秀樹・中谷紀子「宍道湖底下完新統の花粉群」「島根大学地質学研究報告』9 1990年
大西郁夫「中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉帯と植生変化」「地質学論集』39 1993年
渡辺正巳・会下和宏「島根大学構内遺跡第1次発掘調査における花粉分析」「山陰地域研究（自然環境）』13 1997年
- (6) 松本岩雄「荒神谷遺跡出土の遺物と地域間交流」「古代王権と交流』7 名著出版 1995年
渡辺貞幸「『出雲連合』の成立と再編」「同上』1995年
- (7) 松本岩雄・足立克己編「出雲神庭荒神谷遺跡」島根県教育委員会 真陽社 1996年
田中義昭「加茂岩倉遺跡の発見とその意義」「会誌 歴史地名通信』22 1997年
渡辺貞幸「青銅器大量埋納期の出雲」「東アジアの古代文化』93 1997年
- (8) 田中義昭・渡辺貞幸他「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学法文学部考古学研究室 1992年
- (9) 竹広文明「汽水域周辺の生業 -繩文、弥生時代における中海・宍道湖周辺の漁撈活動-」「海跡湖堆積物からみた汽水域の環境変化 -その地域性と一般性- 平成7年度報告・資料集』1996年
- (10) 内田律雄他「朝酰川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書I～V」島根県教育委員会 1980～1989年
中川寧「朝酰川中小河川改修工事区域内発掘調査概報 よみがえるあさくみがわのながれ」島根県教育委員会 1997年
- (11) 山本清「佐太講武貝塚」「講武村史』1955年
赤澤秀則・竹広文明他「佐太講武貝塚発掘調査報告書』2 1994年
- (12) 米子市教育委員会他「加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日久美遺跡」1986年
- (13) 米子市教育委員会他「一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 隆田」1984年
- (14) 島根県教育委員会他「オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV」1994年
- (15) 会下和宏「島根大学構内遺跡にみる『繩文海進』とその社会的影響」「社会システム論集 島根大学法文学部紀要社会システム学科編』1 1996年
- (16) 野坂俊之・角田徳幸他「神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 御領山遺跡・三郎竹崎遺跡」湖陵町教育委員会 1994年
- (17) 島根県教育委員会「出雲・上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書」1980年
- (18) 池田満雄・足立克己「出雲市矢野遺跡出土の繩文土器」「島根考古学会誌』4 1987年
- (19) 村上勇・川原和人「出雲・原山遺跡の再検討 前期弥生土器を中心として-」「島根県立博物館調査報告』第2冊 1979年
- (20) 竹広文明他「島根半島洞窟遺跡の研究 -島根県八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡の試掘調査-」「汽水

域研究』3 1996年

竹広文明他「サルガ鼻燈台洞窟遺跡の第1次発掘調査」「汽水域研究』4 1997年

- ② 佐々木謙・小林行雄「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び椎現山洞窟遺跡－中海沿岸縄文式文化の研究1－」『考古学』8-10 1937年
山本清「美保関町サルガ鼻・椎現山洞窟住居跡について」『島根県文化財調査報告書』第3集 1967年
② 文献②Dに同じ。
③ 山本清「山陰地方の洞穴遺跡」「日本の洞穴遺跡」日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 1967年
④ 柳浦俊一他『朝酰川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書I～IV』島根県教育委員会 1979～1992年
岡崎雄二郎他「タテチヨウ遺跡発掘調査報告書」松江市文化財調査報告書第51集 松江市教育委員会 1992年
⑤ 田中義昭「弥生時代拠点集落の再検討」「考古学と遺跡の保護 甘粕健先生退官記念論集」 1996年
田中義昭「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」「山陰地域研究』12 1996年
⑥ 山本清「島根大学敷地薺飯山古墳遺物について」「島根大学論集(人文科学)』5 1955年
⑦ 穴道正年「島根大学敷地裏丘陵の古墳群について」「菅田考古』11 島根大学考古学研究会 1969年
⑧ 山本清「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」「山陰文化研究紀要』17 1977年
⑨ 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」「山陰古墳文化の研究』 1971年
山本清「遺跡と歩んだ70年 古代出雲の考古学」ハーベスト出版 1995年
岡崎雄二郎他『史跡金崎古墳群 昭和52年度環境整備事業報告書』松江市教育委員会 1978年
⑩ 山本清「山陰の須恵器」「島根大学開学十周年記念論文集』1960年
⑪ 西尾克己他『朝酰川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』島根県教育委員会 1995年
⑫ 萩雅人他『撫遊遺跡』松江市教育委員会 1987年
⑬ 井上智博「縄文時代における遺跡群の動向と生業 早期末～前期前葉の山陰地方を例として」『研究調査報告』第1集 大阪府文化財調査研究センター 1997年
⑭ 会下和宏編『島根大学構内遺跡第1次調査(橋繩手地区1)』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年
会下和宏編『島根大学構内遺跡第2次調査(深町地区1)』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
⑯ 会下和宏編『島根大学構内遺跡第3次調査(諸田地区1)』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1996年
⑰ 会下和宏編『島根大学構内遺跡第4次調査(深町地区2)』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第2冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1998年
⑱ 会下和宏編『島根大学構内遺跡第5・6・7次調査(橋本地区1・2)』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第3冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1999年

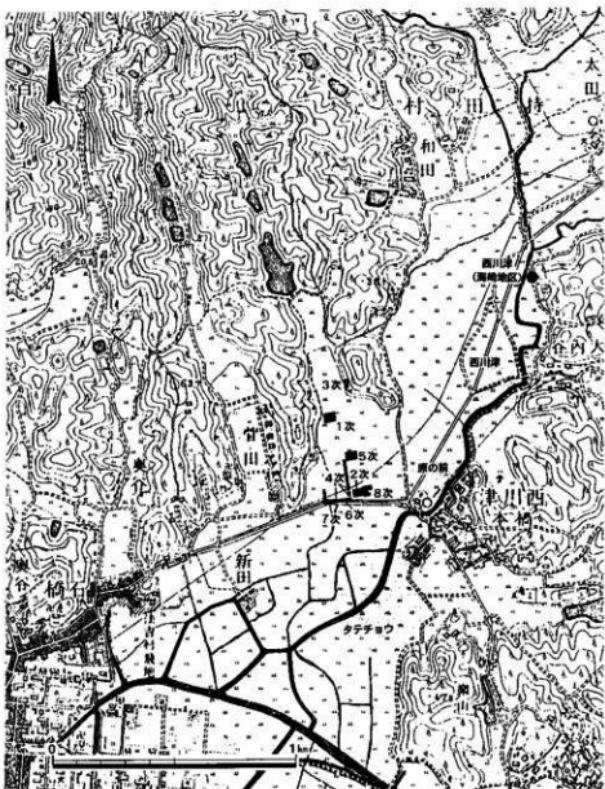


図4 1918(大正7)年の調査地周辺(1/20000)

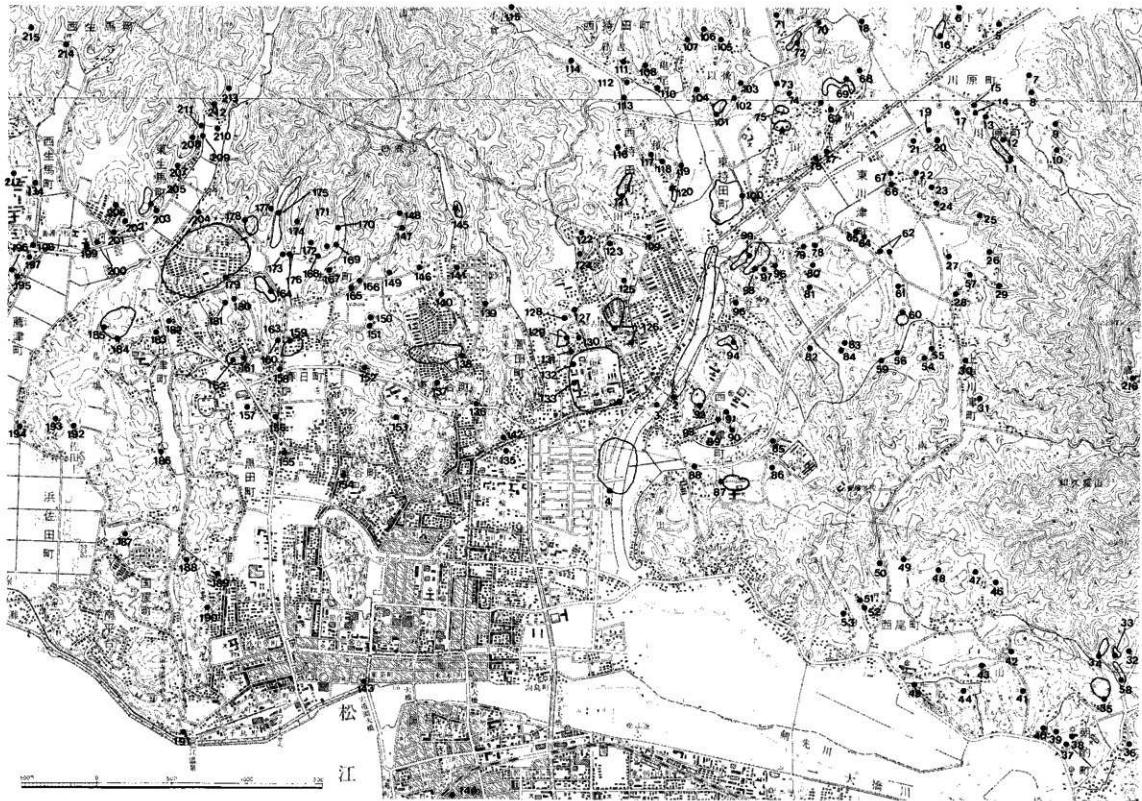


図5 島根大学周辺の遺跡（1/25000）

周辺遺跡（図5）

1. 烏根大学構内遺跡
2. 西川津遺跡
3. 原の前遺跡
4. タテチョウ遺跡
5. 流田遺跡
6. 小林古墳群
7. I 2 4 古墳群
8. I 1 8 古墳群
9. I 2 7 遺跡
10. I 1 9 遺跡
11. 後谷古墳群
12. 荒神古墳
13. I 2 0 遺跡
14. I 2 2 遺跡
15. 川原庄の上横穴群
16. 香々廻古墳群
17. I 2 1 遺跡
18. 常熊古墳
19. 小松谷古墳
20. J 5 7 古墳群
21. J 5 5 古墳
22. J 3 7 古墳
23. J 3 6 古墳
24. J 3 5 遺跡
25. 仁王ヶ谷横穴群
26. 向尾敷横穴群
27. J 1 8 遺跡
28. 西宗寺古墳
29. 山根横穴
30. 嵩山麓遺跡
31. 卷遺跡
32. 九日宮古墳群
33. 邪倉横穴群
34. 藤谷B遺跡
35. 阿原古墳群
36. 朝酌上神社跡古墳
37. 朝酌小学校前古墳
38. 朝酌小学校校庭古墳
39. 新山遺跡
40. 松ヶ鼻窯跡
41. 間谷遺跡
42. 草安切遺跡
43. 廟所古墳
44. 銀音山古墳
45. 南尾横穴
46. 安藏主遺跡
47. 米坂遺跡
48. 米坂古墳群
49. 柴尾遺跡
50. G 2 3 遺跡
51. G 2 8 遺跡
52. G 2 2 遺跡
53. G 2 1 遺跡
54. J 2 6 古墳群
55. J 3 1 遺跡
56. J 2 1 古墳
57. 葉佐馬古墳
58. 藤谷A遺跡
59. J 3 2 遺跡
60. J 2 2 古墳群
61. J 2 7 古墳群
62. 八色谷遺跡
63. 才ノ神遺跡
64. 川津第11号墳
65. 川津第12号墳
66. 中尾古墳
67. J 5 8 遺跡
68. I 4 8 古墳
69. 納佐池遺跡
70. I 4 9 古墳
71. I 4 5 遺跡
72. 石野古墳群
73. 立花横穴
74. 谷田遺跡
75. 太田古墳群
76. 納佐遺跡
77. I 4 6 遺跡
78. 後田古墳
79. 前田古墳
80. 家の上古墳
81. 井上古墳
82. 一の谷古墳
83. 祖子分長池古墳
84. 祖子分胡麻煙遺跡
85. 柴遺跡
86. J 1 6 遺跡
87. 提廻遺跡
88. 橋本遺跡
89. 柴II遺跡
90. 柴古墳群
91. 山崎古墳
92. 馬込山古墳群
93. 旧川津小学校裏古墳
94. 空山古墳群
95. 古屋敷古墳
96. 貝崎遺跡
97. J 4 3 古墳
98. 貝崎古墳群
99. 西川津貝崎遺跡
100. 持田川流域条里制遺跡
101. 小丸山古墳群
102. I 4 4 遺跡
103. 城の越横穴
104. 松の前古墳
105. I 4 3 遺跡
106. 鍛冶屋谷横穴
107. 穴の口横穴群
108. 洞泉寺裏古墳
109. J 5 3 古墳
110. I 4 0 遺跡
111. 坂の内古墳
112. I 3 9 遺跡
113. I 4 2 遺跡
114. I 3 7 遺跡
115. 金刀比利羅谷古墳
116. 国石古墳
117. 尾山横穴群
118. 大源古墳
119. I 4 1 遺跡
120. 和田上遺跡
121. 宮垣古墳群
122. 深町横穴
123. J 5 4 古墳
124. 深町古墳群
125. 福山古墳
126. 金崎古墳群
127. 上浜弓古墳群
128. 浜弓古墳群
129. 菅田ヶ丘古墳群
130. 宮田古墳群
131. 小丸山古墳
132. 背田丘古墳
133. 薬師山古墳
134. 元井出遺跡
135. 赤崎横穴
136. 桜崎横穴
137. ひのさん山横穴群
138. 折廻古墳群
139. 松ヶ峰古墳
140. 間田薬師古墳
141. 二反田古墓
142. 切通横穴
143. 茶町遺跡
144. 人參方跡
145. 白鹿谷遺跡
146. なつめ谷荒神古墳
147. コゴメダカ山遺跡
148. 長谷窯跡（推定地）
149. 長谷歲徳神古墳
150. 栗元古墳
151. 栗元横穴
152. 煙硝倉古墳
153. K 3 4 古墳

154. 赤山横穴群 155. 摩利支天山横穴 156. 法吉小学校裏山横穴群 157. 春日遺跡
158. 中代遺跡 159. 法吉遺跡 160. 石在経塚 161. 久米横穴群 162. 比津が崎横穴群
163. 唐梅古墳群 164. 久米古墳群 165. 山横経塚群 166. 山横古墳群
167. 吉岡兵之助宅前古墳 168. 下り松II遺跡 169. 鶯谷遺跡 170. 下り松I遺跡
171. 伝宇牟迦比姫命御陵古墳 172. 新宮古墳 173. 塚山古墳 174. 松崎金一郎所有山林古墳
175. 田中谷遺跡 176. 下り松遺跡 177. 下り松窯跡 178. 田中谷古墳群 179. 月廻横穴群
180. 久米遺跡 181. 久米第2横穴群 182. ひゃくだ横穴 183. 水酌崎横穴群
184. ゴルフ場内横穴群 185. ゴルフ場内古墳群 186. 小丸山古墳 187. K38古墳
188. K33古墳 189. とねり坂横穴群 190. K32古墳 191. 天倫寺前遺跡
192. 小池谷横穴群 193. 岩山横穴群 194. 東前横穴群 195. L36古墳 196. 大北古墳
197. 名尾荒神古墳 198. 名尾丘古墳 199. かいつき山古墳群 200. 井原古墳
201. 山玉神社跡 202. 山王古墳 203. 桜本古墳 204. 大門遺跡 205. 桜本古墳群
206. 名尾遺跡 207. 平遺跡 208. 法恩寺遺跡 209. 法恩寺瓦窯跡 210. 宮ノ下遺跡
211. 東生馬遺跡 212. 辺田横穴群 213. 生馬神社旧社地 214. 大岩遺跡 215. 郷戸横穴群
216. 布自枳見烽跡 217. 高専敷地内古墳群

第3章 第5次調査

第1節 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は、現地表から約1.5m前後下までの現代盛土を重機によって排除した後、下位の遺物包含層を人力によって掘り下げた。包含層は、第1層から第7層までに大別され、層厚約4m以上である。

遺物の取り上げにあたっては、調査区の西端ライン、南端ラインを基準として4m四方のグリッドで区分し、出土したグリッド名を記録した。グリッド名は、東西ラインを北からA～J、南北ラインを西から1～11とし、たとえば東西ラインのA、南北ラインの2に位置するグリッドは「A 2」グリッドと呼称した(図6)。また、縄文～弥生時代の遺物に関しては、グリッド名に加え、出土地点とレベルを全て記録した。流木や倒木といった自然遺物は、1/20面図に図示し、レベルを記録した後、全て取り上げ、樹種鑑定を行った。

また、適時、研究員による調査指導会を行い、調査方法、留意点を再検討しながら作業を進めた。その他、花粉・珪藻分析、有機元素分析といった自然科学的調査も行い、考古学以外の情報についても総合的に得られるよう務めた。

2 調査の経過

調査面積は約1500m²、調査期間は、1996年8月8日～1997年1月31日である。現代盛土を重機で排除した後、下位の遺物包含層、生活面について、層位的掘り下げと精査を開始した。

第1層(近代水田耕土)を掘り下げた段階で、調査区のほぼ全域において北東から南西に向かう河川性の砂礫層(第2a層下位砂層)が検出され、上面から古墳後期～奈良時代の遺物が出土した。9月19日、この面で、南から全景写真を撮影した(図版1-1)。

その後、下層の掘り下げを進め、第3層上面から弥生土器、第4a～e層(古穴道湾の海成層)中から、土器片、石器、自然礫、流木等の出土をみた。最終的に、重機を使用する等して、E 8グリッドのみ、最下位で標高-5.0mまで掘り下げた結果、直下の-5.3m付近で基盤層と目される、しまった硬い粘土層を確認した。この間、理化学的解析によるアカホヤ火山ガラスの検出を試みたが不明であったことから、本調査区内においては良好な堆積環境になかったものと判断した。

掘り下げ後の写真撮影(図版4-2)、実測や花粉分析用の土壤試料採取等を終えた後、1997年1月31日に全ての作業を終了した。

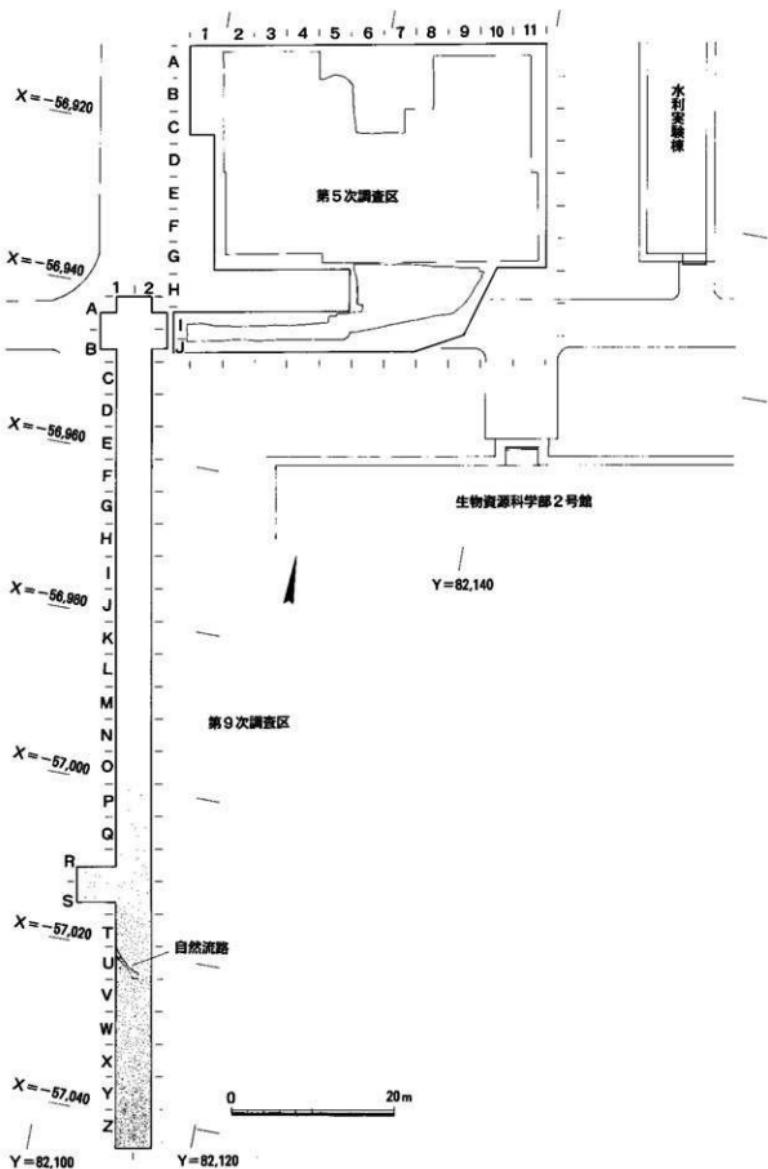


図6 第5・9次調査区配置図(第3層上面、1/600)

第2節 基本層序

1 層序（図7、図版1-2）

図7は、第5次調査区西壁断面図である。

現地表から約1.3~1.5m前後までが、1951（昭和26）年の大学敷地拡張の買収に伴い1952（昭和27）年に造成された盛土、その下位が、近代以前の堆積層で、堆積順序とは逆に、上位層から1~4層に大別した。

堆積層の区分は、現場での観察をもとに決定し、加えて、年代や要因・供給源（陸成、海成、河川性等）等も考慮にいれてある。層名は、基本的に、当該調査区内でのみ通用、完結するものであり、第9次調査区層名とは、完全には整合しない。

第1層 人為的に盛られた、しまった暗灰黄色粘土（近代水田耕土）。主として近世末～近代の陶磁器を包含する。第1層下面（すなわち「第2a～c層・第2a下位砂層」上面）から、古墳後期・奈良時代須恵器や中世陶磁器等が出土しており、当該期の生活面を形成していたとみられる。

第2a層 灰黄褐色粘土。調査区南西部のみ堆積。断面観察から、第2a₁～a₃層に細分される。
第2a₁層上部に古墳後期須恵器を包含する。

第2a₂層下位砂層（図8） にぶい黄褐色粗砂（河川性）。北東から南西方向に傾斜した成層構造がみられる。古墳後期の須恵器片や炭化した板材を包含する。

第2b層 黒色粘土。調査区北西部のみ堆積。

第2c層 灰黄褐色粘土。北西部のみ堆積。

第3層 陸成のにぶい黄褐色シルト層。上面は、標高+0.8~0.9mを測る。上面で弥生前期甕が出土している。

隣接調査区の成果から、概ね、縄文晚期頃に堆積したものと推定される。第9次調査区の第3b層に連続する。

第4層 海成層。便宜的に、色調や土質からa～eに細分した。

第4a層 オリーブ黒色シルト。上位第3層との境界は、標高+0.6~0.8m。最上部に包含されていた材を¹⁴C年代測定した結果、2870±270y.B.P.の年代を得た。標高+0.21mから中期後半ないし後期頃の無文粗製土器底部が出土している。出土土器、¹⁴C年代等より、概ね、縄文中期後半ないし後期頃から晩期前半頃までの堆積と推定。第9次調査区の第4a層上部に一部で対応する。

第4b層 オリーブ黒色シルト中に灰色細砂のラミナが互層状に挟在する。下部は、ラミナが少ない。上位第4a層との境界は、標高-0.1~+0.2m。標高-0.39mから縄文中期後

半「里木Ⅱ式」土器、標高-1.6mから縄文前期「北白川下層式」系土器が出土している。出土土器より、概ね、縄文前期頃から中期後半頃までの堆積と推定。第9次調査区の第4 b層にほぼ連続する。

第4 c層 灰色シルト。上位第4 b層との境界は、標高-1.7~-1.6m。縄文前期頃。第9次調査区の第4 c層と同一層。

第4 d層 オリーブ黒色シルト。上位第4 c層との境界は標高-1.9~-1.8m。縄文前期頃。

第4 e層 第4 c層と同様の灰色シルト。上位第4 d層との境界は、標高-2.1~-1.9m。標高-2.2~-2.1mに厚さ約2cm程度の白色シルト層が帯状に挟在する。縄文前期頃ないしそれ以前。

第9次調査区では、白色シルト層下の標高-2.9~-3.0m付近でアカホヤ火山灰を確認しており、これを参考にすれば、当該調査区でも本層位中に存在することが推定出来る。

上記の層相を再整理して、調査区内の環境変遷を概述すると以下の様になろう。

すなわち、縄文早期から晩期前半頃まで古穴道湾ないし古穴道湖最奥部の泥底水域内であった調査区は、海成層（第4層）堆積と相対水面低下・砂洲の伸長等が関与して、縄文晩期頃には湿地化（第3層）する。古墳後期に到ると、河川洪水によって砂礫層（第2 a層下位砂層）が堆積する等を経て、第1層下面（「第2 a~b層・第2 a層下位砂層」上面）が古墳後期・奈良時代～中世の生活面をなす。遺構は残されていないし、出土遺物も散在的であることから集落外の空間であったのだろう。近代には、盛土（第1層）され水田化されるが、1951（昭和26）年から島根大学構内に吸収され、さらに盛上されて現在に到る。

2 ^{14}C 年代測定

本遺跡から出土した材を試料として、 ^{14}C （放射性炭素）年代測定を島根大学汽水域研究センターに依頼した。

^{14}C 年代測定は、いずれもベンゼン液体シンチレーション法による。前処理として、試料の木片は、水洗いの後、水酸化ナトリウム溶液中で煮沸しフミン酸を抽出、水洗い乾燥後、400°Cで2時間蒸焼きにしてある。スタンダードにはNBS硝酸（SRM4990C）、測定は低レベル液体シンチレーションカウンター（Wallac社、1220QuantalusTM）を使用し、 ^{14}C の半減期を5568年として年代を求めている。測定値は、y.B.P.（Years Before Presentの略号）で表示してあり、西暦1950年を基準に起算してある。

試料S U J-221は、埋没していた自然木材片（図11）で、帰属層準は第4 a層最上部である。

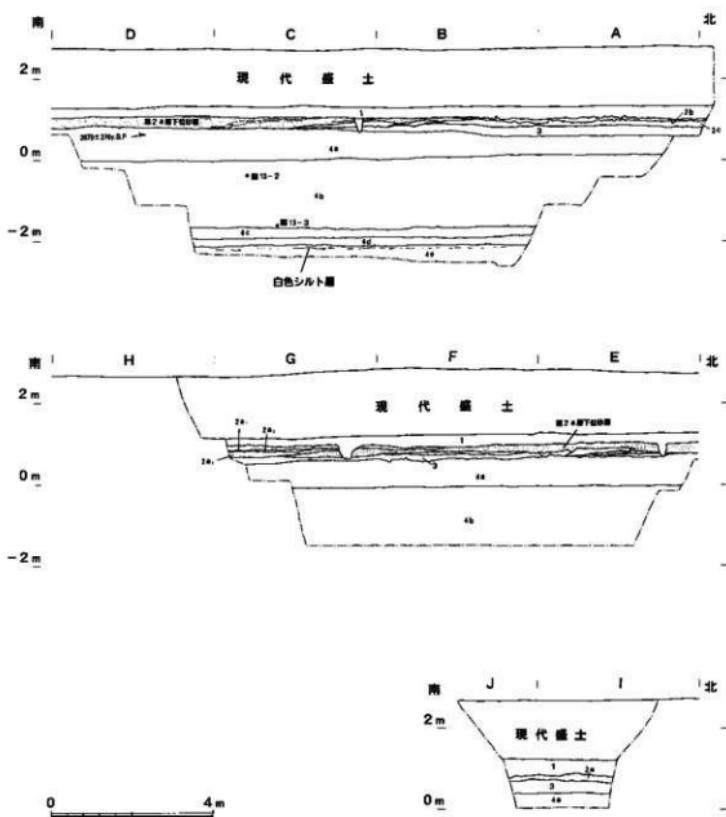


図7 第5次調査区西壁断面図 (1/120)

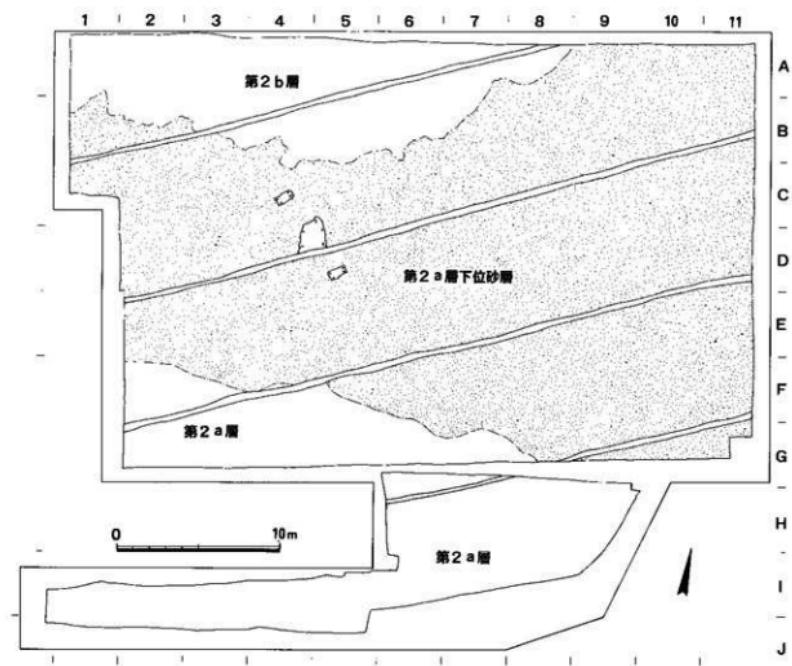


図8 第5次調査区第2a層下位砂層分布図(1/300)

表1 ¹⁴C年代測定値

コード番号	試料出土地区	出土層位	試料	年 代
S U J - 221	F 10	第4a層最上部	木 材	2870±270y.B.P.

第3節 遺物

第2層、第2層上面から古墳時代後期～奈良時代の須恵器坏、拳大の自然礫等が出土している。また、第2a層下位砂層からは、炭化した板材片、棒材片等が顯著に出土している。

第3層上面からは、弥生前期の甕片が（図12）、第4a～e層（海成層）からは、水底に遺棄されたと考えられる縄文土器片、石器、礫や漂着した木製品、自然木等が出土している（図9～11、図版2・3-1・4-1）。

1 第4層の遺物（図13-1～6）

縄文土器（図13-1～3、図版5-1・3）

1は、第4a層出土の無文粗製土器。底径8.0cmを測る深鉢平底。輪積み成形で、調整は、条痕の後ナデを施す。色調は黒褐色、焼成は良好、胎土は長石・黒ウンモを含む。中期後半ないし後期頃か。

2は、第4b層出土の「里木II式」土器の口縁部である。キャリバー型で緩やかな波状口縁を有している。外面は撚糸文を地文とし、竹管状工具によって直線文、弧状文がつけられる。内面は、無文、ナデ調整である。色調は黒褐色、焼成は良好、胎土は長石・石英を含む。重量は64g。

3は、第4b層から出土した内外面条痕調整の土器片である。破片資料で、文様がないため、型式は明確でないが、形状から推定して、前期前半「羽鳥下層式」、「北白川下層式」系統のものである可能性がある。色調は黒褐色、焼成は良好、胎土は精良。重量は98g。

2、3とも、海成層中から、土器片のみが単独で出土していることから（図版2-2）、土器片錠として転用されていた可能性をもつ。

石器（図13-4～6、図版5-3）

4は、第4b層出土、5は、第4c層出土の石錠。いずれも、扁平で不定形な椭円礫の長軸両端を両面から打ち欠いて、抉りを作っている。重量は、4が583g、5が64g。

6は、第4b層出土の多孔性円礫を使用した石皿片。片側表面の凹み部分は、平滑に摩滅している。玄武岩製。重量は2.5kg。

木製品（図14-1～4・図15-5～7、図版6）

人為的加工痕が認識出来るものを示した。1～4が第4a層出土、5～7が第4b層出土。第4層は海成層であるので、いずれも水域を漂流していたものが沈没し埋没したと想定できる。

1は、長さ127.0cm、最大径3.0cmの棒状木製品。上下端とも斜方向に削られ、派出する枝は切断されている。

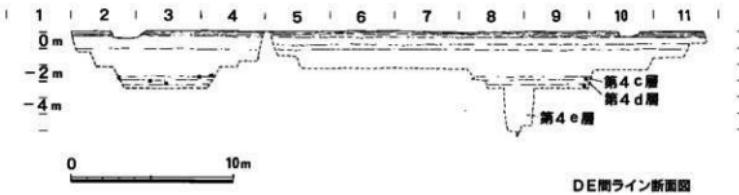
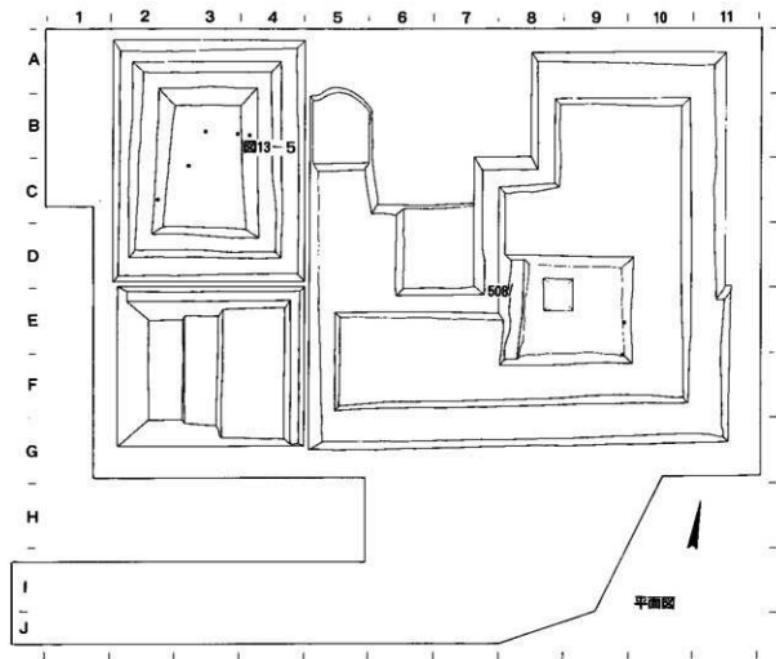


図9 第5次調査区遺物分布図（第4c～e層、1/300）

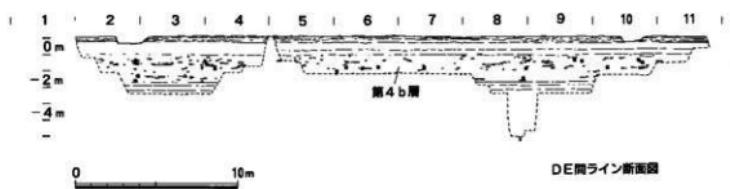
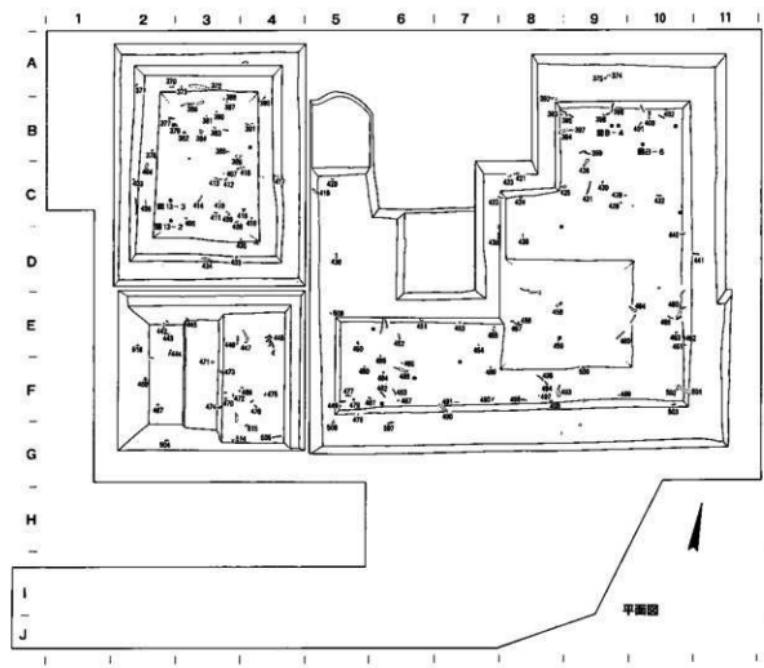


図10 第5次調査区遺物分布図（第4 b層、1/300）

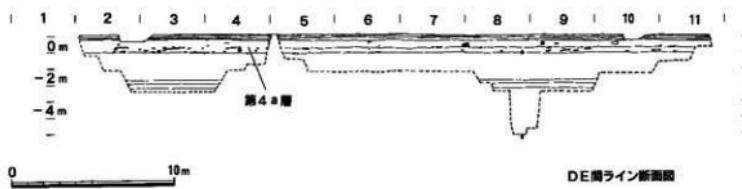
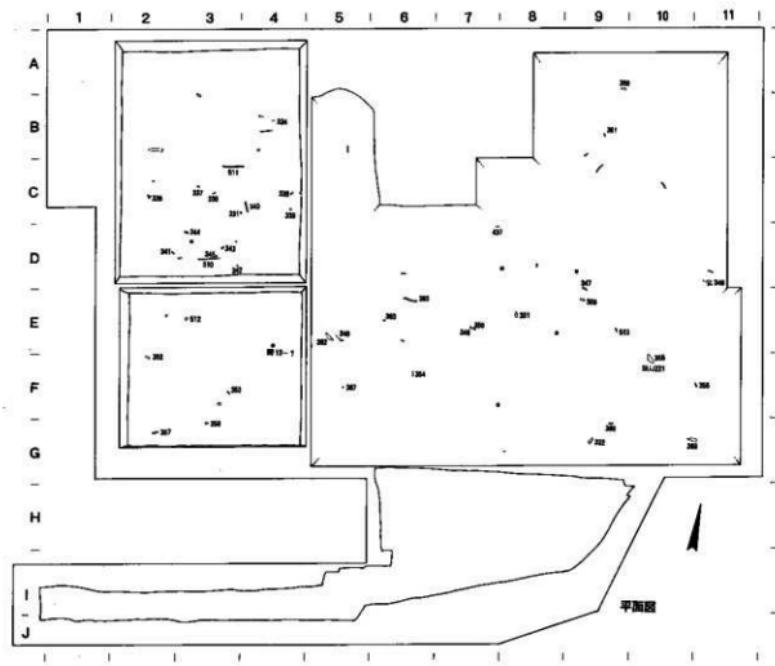


図 11 第5次調査区遺物分布図（第4a層、1/300）

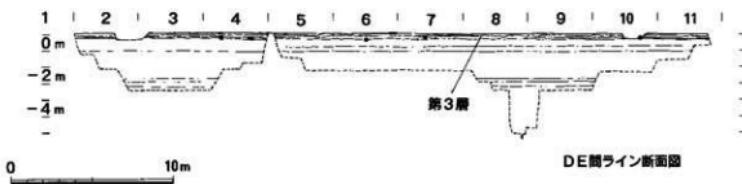
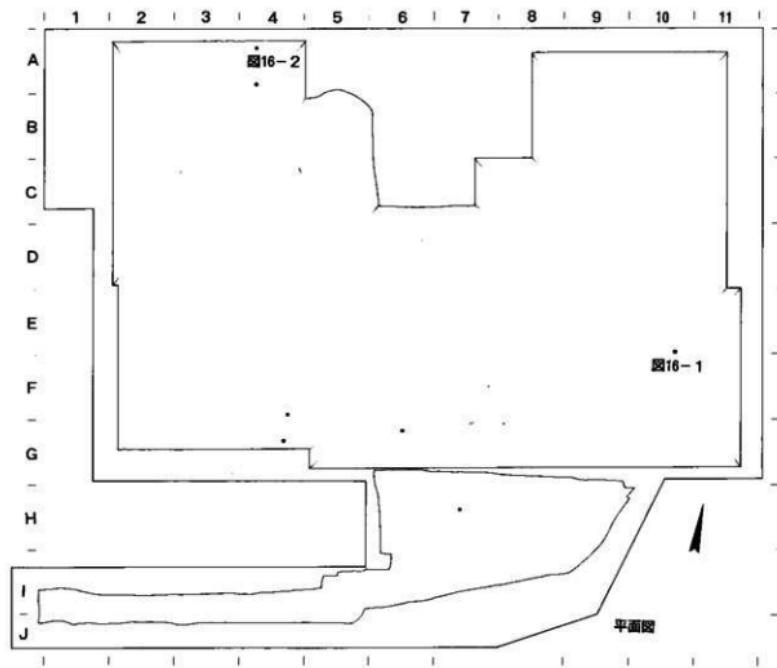


図 12 第5次調査区遺物分布図（第3層・第3層上面、1/300）

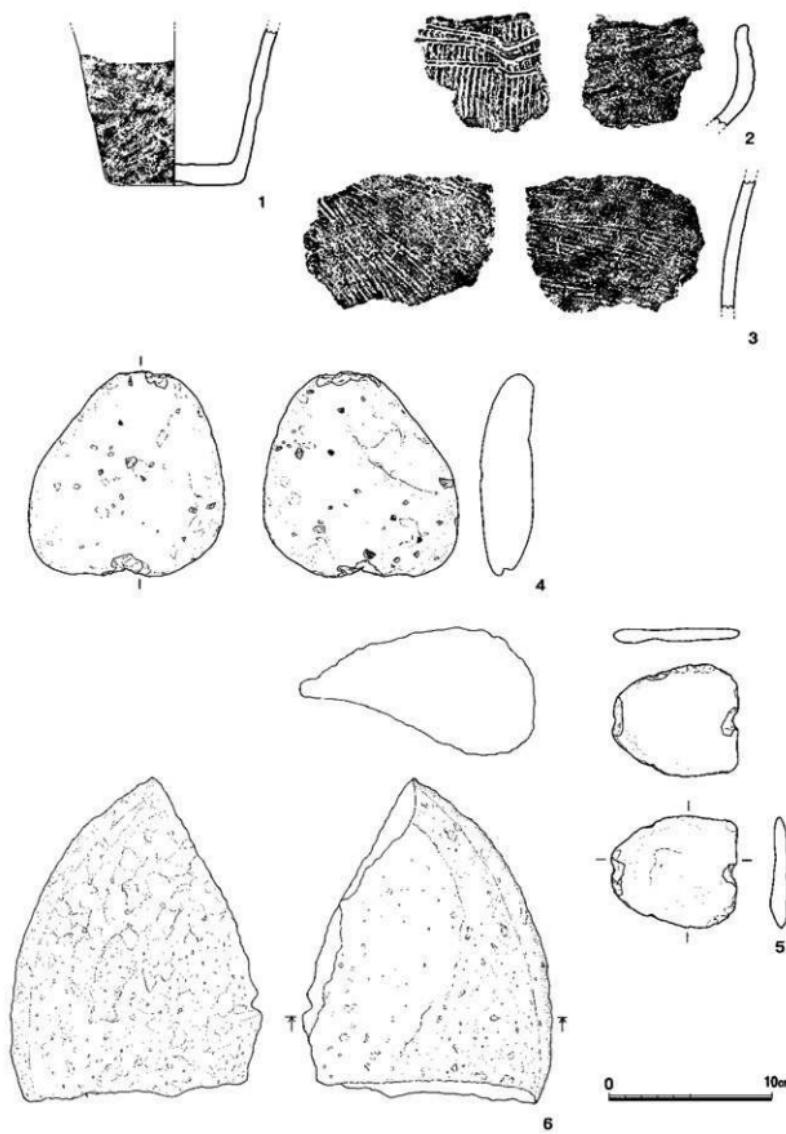


図13 第5次調査区第4層出土遺物（1／3）

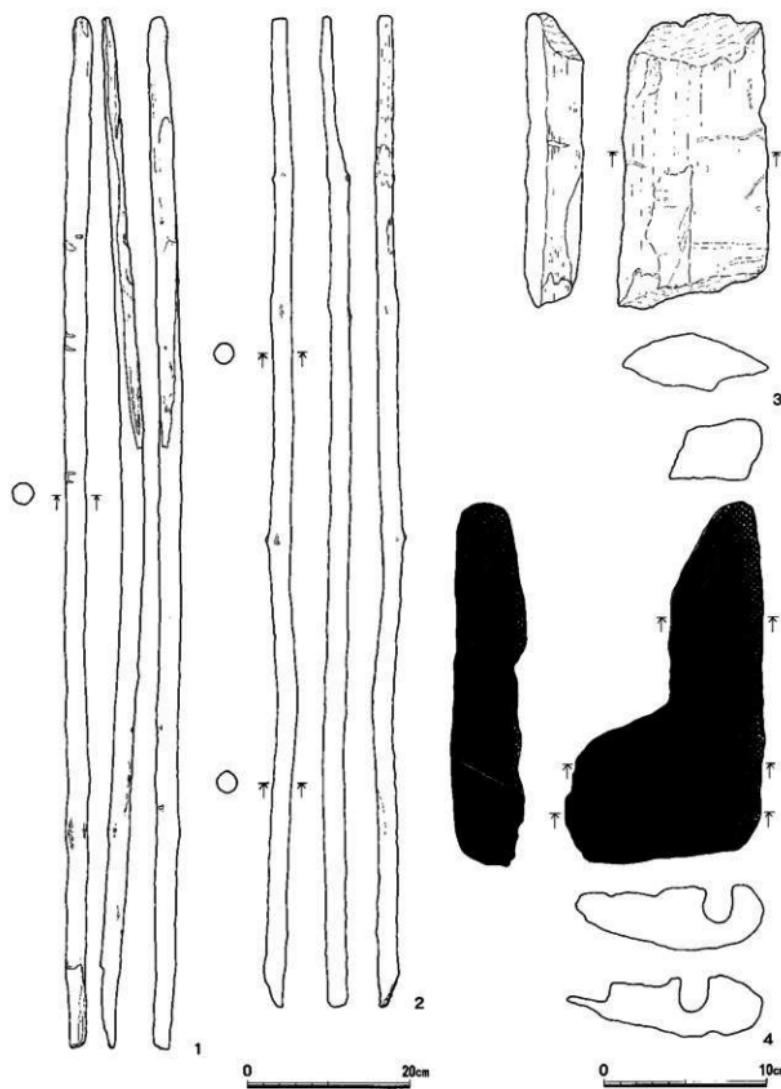


図14 第5次調査区第4層出土木製品（その1、1／6・1／3）

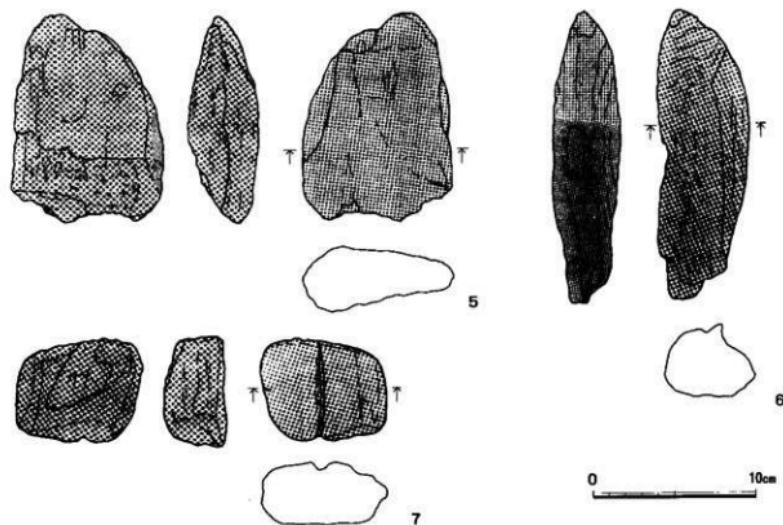


図15 第5次調査区第4層出土木製品（その2、1／3）

2は、長さ121.5cm、最大径2.4cmの棒状木製品。上端は斜方向に削られる。下端は発掘調査掘削時に破損。派出する枝は切断されている。

3は、長さ18.0cm、幅9.0cmの角材。上面面、側面は、平滑に切断ないし切削される。

4は、長さ22.2cm、幅12.0cmの平面L字状を呈した角材。平面下部に2箇所の人为的な孔が穿つてある。全体に平滑で、焦痕がある。

5は、長さ12.2cm、幅9.2cmの加工材。下端は切断、全体に摩滅しており、焦痕がある。

6は、長さ17.9cm、幅5.5cmの加工材。全体に摩滅しており、焦痕がある。

7は、縦6.2cm、横7.6cmの直方体状の角材。各面とも平滑に切断ないし切削されており、全体に焦痕がある。角部は摩滅する。

自然礫（図9～11）

特に加工痕の認められない、拳大から人頭大の自然礫が、ランダムに分布して出土している。平面分布に特に規則性はなく、垂直分布も特定のレベルに集中する傾向はない。

内訳は、第4a層（玄武岩3、泥岩1）、第4b層（玄武岩11）、第4c層（玄武岩3）、第4d層（玄武岩1）、第4e層（玄武岩2）と、大半が玄武岩で占められており、周辺一帯の地質構成から

みて、付近から調達されたものと推定される。

第4層（海成層）出土自然礫の来歴は、舟上から人為的に遺棄された結果であると推定出来るが、故意であった場合、用途、目的は不明である。碇石や石錘として使用した、あるいは、漁撈活動の一過程で投棄した等が想像出来よう。

自然木（図9～11）

第4層は海成層であるので、いずれも水域を漂流していたものが沈没し埋没したと想定できる（図版4-1）。調査面積、層厚も反映するが、第4a～b層中に比較的多く包含される一方、第4c～e層中は希薄である。埋没方向は不定で、特に配列性はない。ナクイムシの生痕を有したものも数点認められる。

樹種は、第5章3で、詳述してあるので参照されたい。

2 第3層・第3層上面の遺物（図16-1～2、図版5-2・3）

弥生土器（図16-1、図版5-2）

1は、弥生土器壺の底部。径約6.5cmで、やや上げ底気味。摩滅が激しく、内面の一部にハケメを留める。色調は、外面が黄灰色、内面が黄褐色で、胎土は、石英、長石を多く含む。前期頃か。

石器（図16-2、図版5-3）

2は、石錘。周縁を打ち欠いて平面方形状にした礫の3方に抉りを作る。重量は271g。泥岩製。

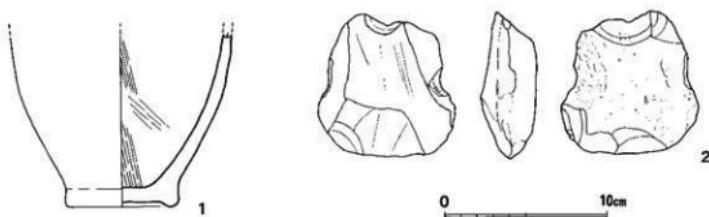


図16 第5次調査区第3層・第3層上面出土遺物（1／3）

自然礫（図12）

特に加工痕の認められない、拳大の自然礫が、ランダムに分布して出土している。内訳は、玄武岩2、凝灰岩1、安山岩1、不明1である。

3 第2a層・第1層下面（「第2a～b層・第2a層下位砂層」上面）の遺物（図17-1～図

18-30、図版7・図版8)

古墳~奈良時代の須恵器(図17-1~26、図版7)

1、8、9、21は第2a層出土、それ以外は第2a~c層上面(第1層下面)出土。

1~7は、須恵器杯身。いずれも、立ち上がりは短く内傾、口縁端部は尖り気味に丸く収まる。

焼成は良好。古墳後期、山本編年Ⅲ期に相当する。

8~17は、無高台の奈良時代須恵器杯身。9~12は、内湾気味の胴部で、口縁端部は丸く収まる。

13の口縁部は、一旦内側にくびれた後、外方に屈曲し、やや尖り気味に収まる。

18~20は、高台を有する奈良時代須恵器杯身の底部。

21~26は、須恵器壺の体部。外面は平行タタキメ、内面は同心円状當て具痕が残る。

中・近世の須恵器、陶磁器(図18-27~30、図版8)

27は、東播系須恵器のこね鉢。

28、29は、備前すり鉢で15世紀に比定。

30は、すり鉢。

4 第1層の遺物(図18-31~39、図版8)

第1層は、近代水田の耕土で、近代陶磁器類を主に包含している。近世以前の遺物も若干含んでいたので、図示した。

31は、須恵器壺の体部。外面は平行タタキメ、内面は同心円状の當て具痕が残る。

32は、備前すり鉢。

33は、いわゆる朝鮮陶磁器皿の削り出し高台が付く底部。16世紀頃か。

34は、須恵質の灯明皿。

35~39は、管状土錐。

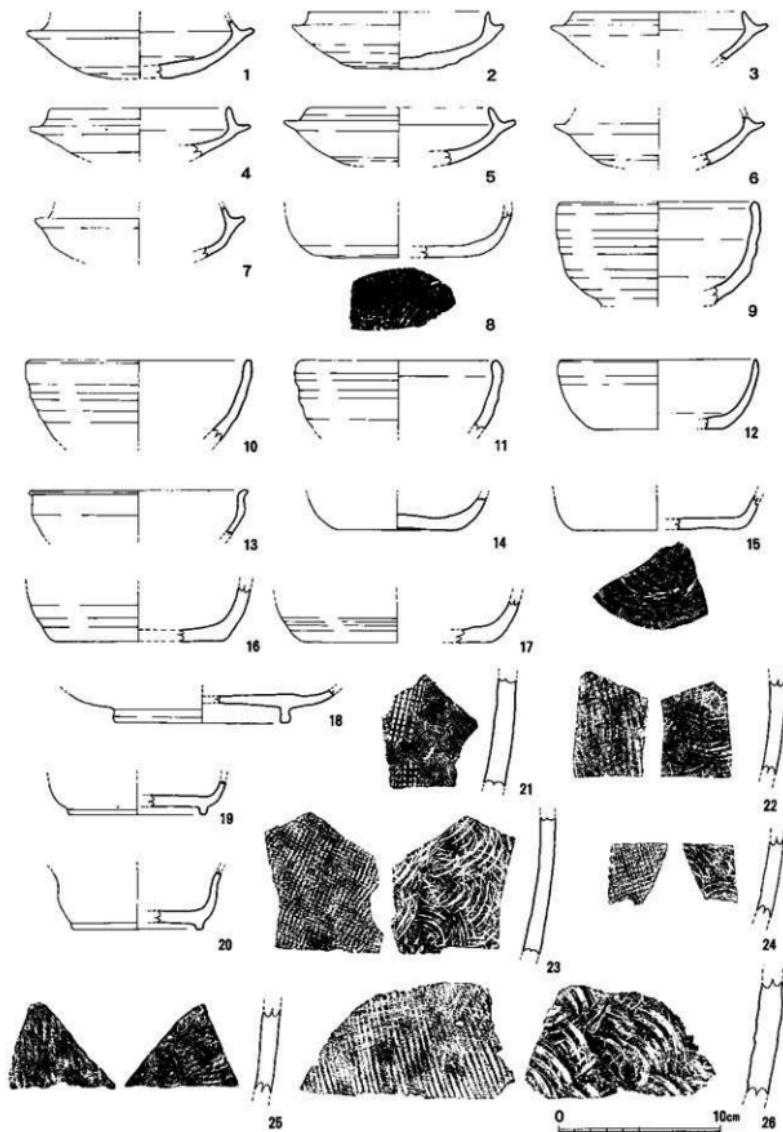
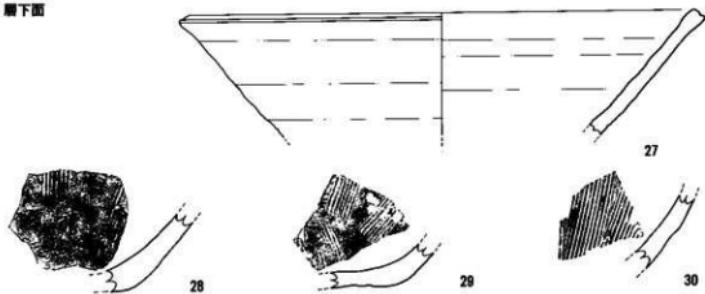
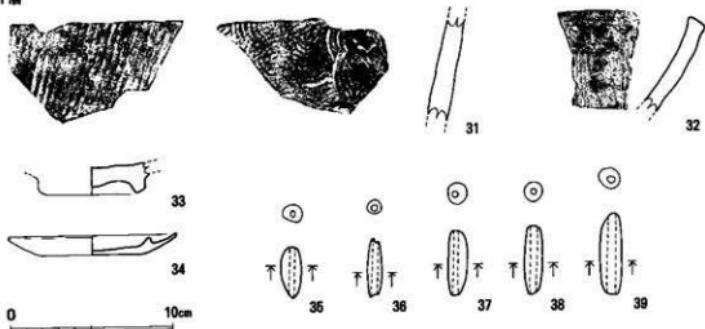


図 17 第5次調査区第2a層・第1層下面出土遺物 (1/3)

第1層下面



第1層



0 10cm

図18 第5次調査区第1層・第1層下面出土遺物（1／3）

第4章 第9次調査

第1節 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は、現地表から約1.4m前後下までの現代盛土を重機によって排除した後、下位の遺物包含層を人力によって掘り下げた。包含層は、第1層から第4層までに大別され、層厚約4m以上である。

遺物の取り上げにあたっては、調査区の北端ライン、南北中央主軸ラインを基準として4m四方のグリッドで区分し、出土したグリッド名を記録した。グリッド名は、東西ラインを北からA～Z、南北ラインを西から1～2とし、たとえば東西ラインのA、南北ラインの2に位置するグリッドは「A 2」グリッドと呼称した(図6)。また、縄文～弥生時代の遺物に関しては、グリッド名に加え、出土地点とレベルを全て記録した。流木や倒木といった自然遺物は、1/20面に図示し、レベルを記録した後、全て取り上げ、樹種鑑定を行った。

2 調査の経過

調査面積は約470m²(4.7m×100m)、調査期間は1998年8月24日～10月29日である。現代盛土を重機で排除した後、下位の遺物包含層、生活面について、層位的掘り下げと精査を開始した。

調査区周辺は、ちょうど、大学構内の側溝が交差する集水域に位置していた様で、ひとたび降雨があると、調査区内は簡単に浸水し、作業は難航した。特に、9月中旬から下旬にかけては、台風が連続して到来したため、作業を度々中断せざるを得なかった。

南隣における第2、4次調査の成果から、第3層上面で生活面の存在を予測していたが、非常に貧弱な自然流路を検出したのみで、遺構等は皆無であった。さらに掘り下げ、第4層(古穴道湾の海成層)中からは土器片、石錘、自然礫、流木等が出土、最終的に、最下位で標高-2.9mまで掘り下げを行った。

東壁断面の写真撮影、実測、アカホヤ火山ガラス検出用の土壤試料採取等を終えた後、1998年10月29日に全ての作業を終了した。

第2節 基本層序（図19、図版9-2）

図19は、第9次調査区東壁断面図である。第3～4層は、北から南へ緩やかに下降する堆積を示す。

現地表から約1.4m前後までが旧制松江高校設立時の造成盛土、その下位が、近代以前の堆積層で、堆積順序とは逆に、上位層から1～4層に大別した。

堆積層の区分は、現場での観察をもとに決定し、加えて、年代や要因・供給源（陸成、海成、河川性等）等も考慮にいれてある。層名は、基本的に、当該調査区内でのみ通用、完結するものだが、なるべく周辺調査区（第2・5次調査区等）の層名とも整合する様に勘案した。

第1層 しまった暗灰黄色粘土（近代水田耕土）。主として近世末～近代の陶磁器を包含する。

第2a層 灰色粘土。部分的に、下位の第2b層や第2c層との層理面が不明瞭。

第2b層 灰色ないし黒色粘土。部分的に、上位の第2a層、下位の第2c層との層理面が不明瞭。

第2c層 黄灰色粘土。

第3a層 B～Cグリッドは、にぶい黄褐色シルト。Dグリッド以南は、漸移的に黒褐色ないし暗オリーブ褐色シルトになり、下位第3b層との分離が明瞭になる。第5次調査区の第3層に連続する。

第3b層 調査区北半は、にぶい黄褐色シルト。調査区の南半程、漸移的に黄褐色細砂になる。
縄文晚期と推定。第5次調査区の第3層に連続する。

第4層 海成層。便宜的に、色調や土質からa～cに細分した。

第4a層 灰色細砂。最上部は、部分的にオリーブ黑色シルトないし黒褐色シルトを含む。上位第3層との境界は、標高約0～+0.5m。最上部で晚期に推定される粗製土器片が出上。晚期までの堆積と推定。第5次調査区の第4a層に一部で対応する。

第4b層 オリーブ黑色シルト。上位第4a層との境界は、標高約-0.7～0m。縄文上器片、自然礫、材等を包含する。縄文前～中期の堆積と推定。第5次調査区の第4b層に概ね対応する。

第4c層 灰色シルト。上位第4b層との境界は、標高約-2.1～-1.7m。縄文前期ないしそれ以前の堆積。第5次調査区の第4c層と同一層。標高-2.35～-2.2mに、厚さ約1～2cmの灰白色シルト層が帶状に挟在しており、第5次調査区で検出したものと同一であると想定される。

掘削面下位の土壤をピートサンプラーによって採取し分析した結果、アカホヤ火山灰（K-A h）が、標高-2.9～3.0m付近に挟在することが判明している。

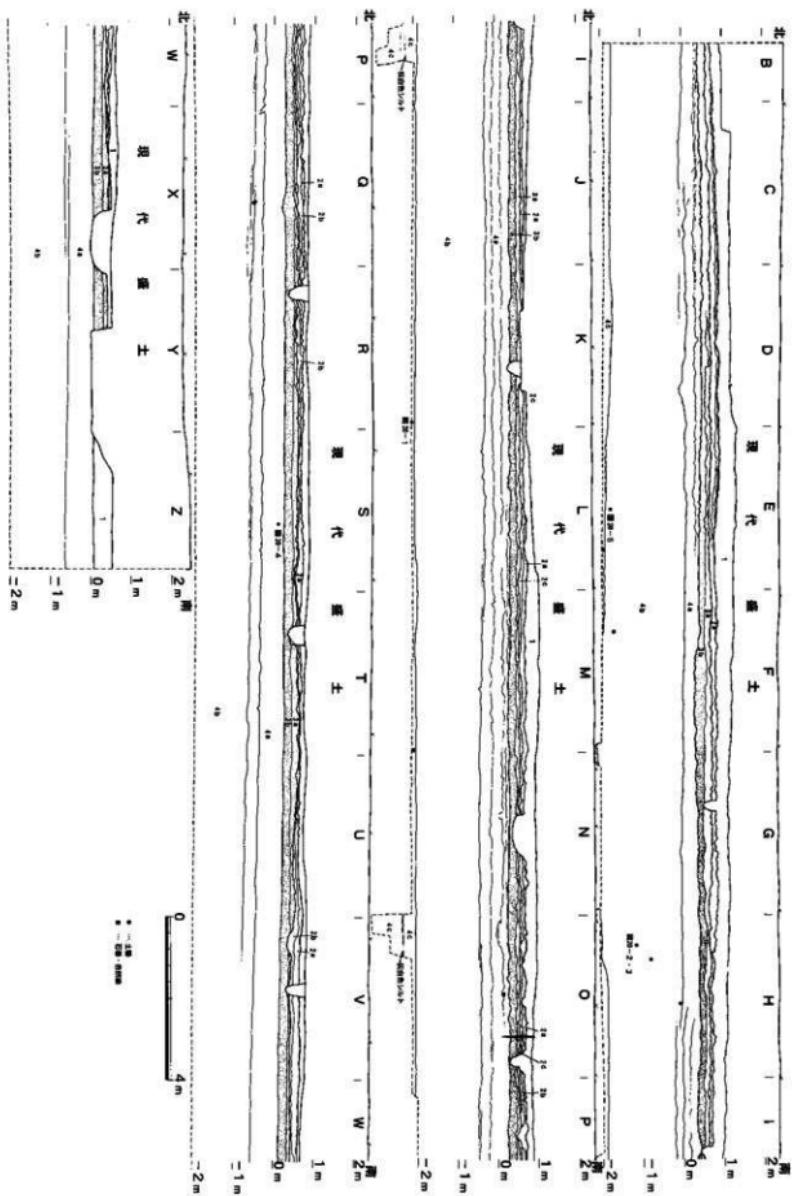


図19 第9次調査区東壁断面図 (1/120)

第3節 自然流路と遺物

1 第3層上面の自然流路（図6、図版9-1）

U 1～2グリッドで検出。幅約0.3～0.5m、深さ約0.1m程度と、非常に貧弱で、北西から南東方向へ流れる。埋土は、黒色粘土。出土遺物は皆無で、所属時期は不明だが、層位関係から奈良時代頃までには埋没していたと想定される。

2 第4層出土の遺物

縄文土器（図20-1～4、図版10-1）

第4層（海成層）中の出土土器、石器、自然礫は、水中へ人為的に遺棄されたものである。

1は、第4c層出土の土器片錐。楕円形に整形してあり、長軸の一端には、人為的に打ち欠いて形成した抉りがある。内外面とも貝殻条痕、断面は、やや外反する。色調は黒褐色、焼成は良好、胎土は長石を含む。重量は、91g。

2、3は、第4b層出土の縄文土器片。両者は接合しないが、同一箇所からまとめて出土しており、同一個体であった可能性が高い。外面は、単節LRの縄文、内面は、ナデ調整。内面に煤が付着する。色調は黒褐色、焼成は良好、胎土は長石を含む。

4は、第4a層出土の上器片。内外面とも条痕調整。出土層位から縄文晩期に比定される。色調は黄褐色、焼成は良好、胎土は黒色微砂粒を少し含む。

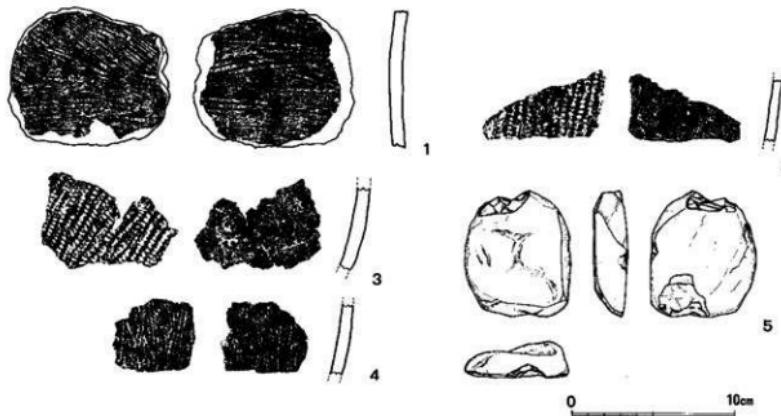


図20 第9次調査区第4層出土遺物（1／3）

石器（図20-5、図版10-1）

5は、第4b層出土の石鏟。平面やや長方形状の長軸両端を打ち欠く。重量は、138g。

木製品（図21-1～5・図22-6～9・図23-10～12、図版10-2・図版1）

人為的加工痕が認識出来るものを示した。いずれも、水域漂流後、沈没したものと想定してよい。1は、長さ38.6cm、最大幅7.2cmの割材。原材を4分割程度に打ち割ったもの。上下端は尖り気味に破損する。全体に硬質で、焦痕がある。

2は、長さ46.2cm、最大幅3.5cmの板材。上下端とも銳利に切削しており、全体に平滑。

3は、長さ52.0cm、最大幅5.0cmの板材。上下端とも折損する。

4は、長さ15.3cm、最大幅8.6cmの加工材。下端、側面は、切断ないし切削によって平滑に整形してある。上端は、発掘調査掘削時の破損。

5は、長さ8.8cm、最大幅5.0cmの板材。上下端とも折損。平面は、平滑。

6は、長さ24.0cm、最大幅5.3cmの加工材。硬質で、焦痕を留める。

7は、長さ25.0cm、最大幅5.2cmの加工材。全体に焦痕がある。

8は、長さ19.0cm、最大幅7.5cmの加工材。上端は、焦痕があり摩滅する。下端は切断、側面は切削してある。

9は、長さ52.2cm、最大幅11.2cmの板材。原材の周縁部を打ち割ったもの。木製品加工時の廃材か。

10は、長さ62.4cm、最大径7.6cmの円材。上下端とも折損する。一部にフナクイムシの生痕がある。

11は、長さ64.0cm、最大幅7.6cmの円材。原材を打ち割って半截したもの。上端は切断、派出する枝は切断してある。下端は、発掘調査掘削時の破損。

12は、長さ128.8cm、最大幅11.6cmの割材。上下端とも折損する。

自然礫

特に加工痕の認められない、拳大の自然礫が、ランダムに分布して出土している。平面分布に特に規則性はなく、垂直分布も特定のレベルに集中する傾向はない。内訳は、第4a層1点、第4b層3点、第4c層1点。玄武岩で占められており、周辺一帯の地質構成からみて、付近から調達されたものと推定される。

第4層（海成層）出土自然礫の来歴は、舟上から人為的に遺棄された結果であると推定出来るが、故意であった場合、用途、目的は不明である。碇石や石鏟として使用した、あるいは、漁撈活動の一過程で投棄した等が想像出来よう。

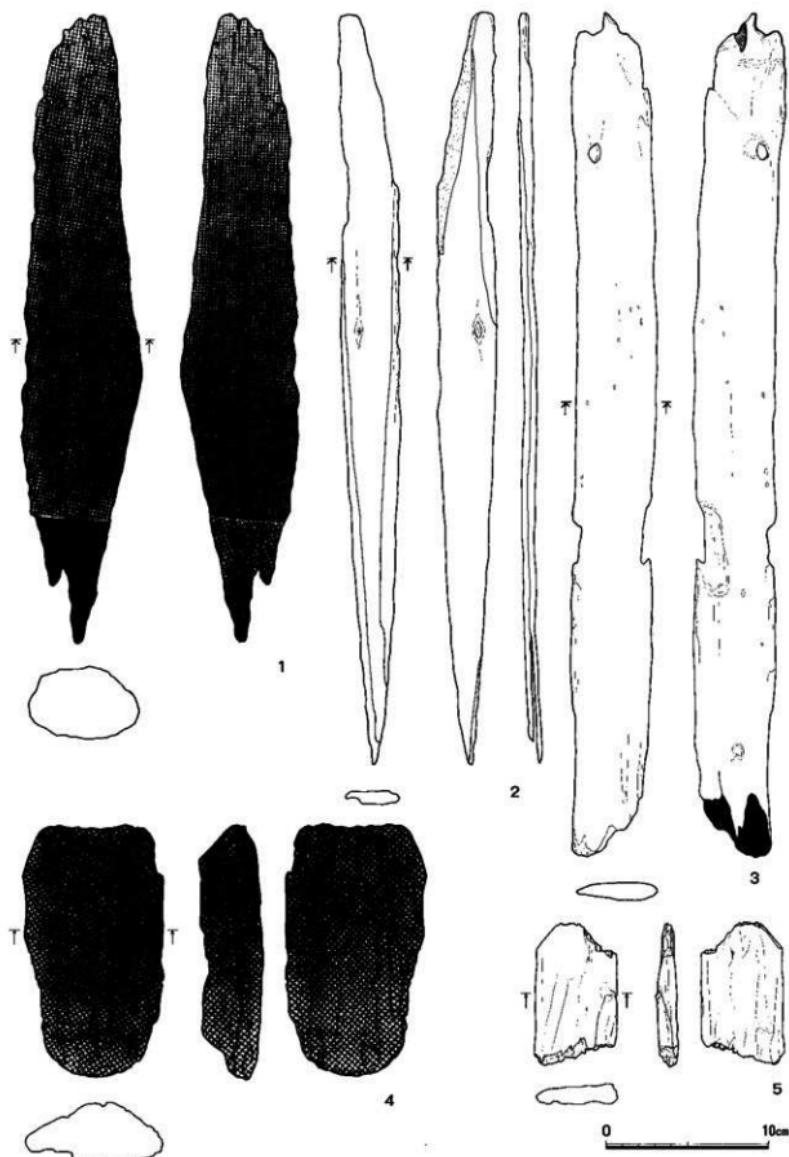


図21 第9次調査区第4層出土木製品（その1、1／3）



図22 第9次調査区第4層出土木製品（その2、1/3・1/6）

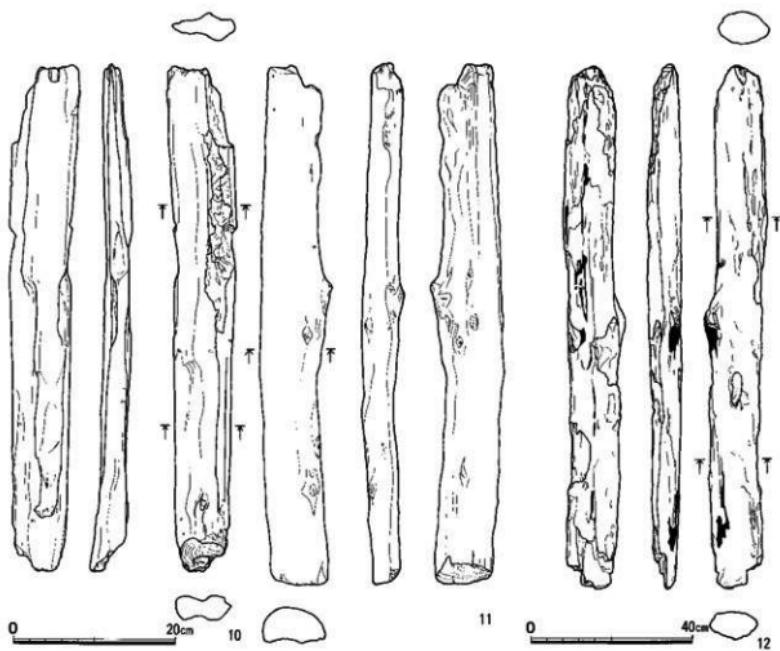


図23 第9次調査区第4層出土木製品（その3、1／6・1／12）

自然木

大半が、第4 b層からの出土。第4層は海成層であるので、いずれも水域を漂流していたものが沈没し埋没したと想定できる。埋没方向は不定で、特に配列性はない。

樹種は、第5章3で、詳述してあるので参照されたい。

表2 出土遺物観察表

1. 土器・陶磁器

図 No.	次数 Grid	層位	器種他	文様・形態・手法の特徴	色調	①胎土 ②焼成	備考
13-1	5-E4	第4a層	縄文土器 (深鉢)	平底 外: 条痕後ナデ、無文 内: ナデ、輪縁成形痕	外: 黒褐色 内: 黒褐色	①1mm以下長石・黒ウンモ 含む ②良好	中期後半 ～後期
13-2	5-C2	第4b層	縄文土器 (深鉢)	キャリバー型、ゆるやか な波状口縁 外: 擦拭文上に竹管状工具 による直線文・弧状文 内: ナデ、無文	外: 黒褐色 内: 黒褐色	①1～2mm長石・石英含む ②良好	里木II式
13-3	5-C2	第4b層	縄文土器 (深鉢)	外: 条痕 内: 条痕	外: 黒褐色 内: 黒褐色	①精良 ②良好	前期?
16-1	5-E10	第3層上面	弥生上器 (壺)	上げ底気味 外: 不明 内: ハケメ	外: 黄灰色 内: 黄褐色	①1mm前後石英・長石多く 含む ②普通	摩滅
17-1	5-G7	第2a層	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ、底部ヘラ ケズリ 内: 回転ナデ	外: 灰白色 内: 灰白色	①0.5mm以下黒色砂粒・5mm 石英少し含む ②良好	
17-2	5-B1	第2層上面	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ、底部ヘラ ケズリ 内: 回転ナデ	外: 灰白色 内: 灰白色	①0.5mm以下黒色砂粒少し含 む ②良好	
17-3	5-G7	第2層上面	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰白色 内: 灰白色	①1mm以下黒色砂粒・石英 少し含む ②良好	
17-4	5-E11	第2層上面	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ、底部ヘラ ケズリ 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①0.5mm前後長石含む ②良好	
17-5	5-A5	第2層上面	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ、底部ヘラ ケズリ 内: 回転ナデ	外: 灰白色 内: 灰白色	①0.5mm前後長石・石英含む ②良好	
17-6	5-A11	第2層上面	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ、底部ヘラ ケズリ 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: ぶい黄褐色	①0.5mm前後長石含む ②普通	摩滅
17-7	5-B3	第2層上面	須恵器 (蓋杯身)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰白色	①0.5mm以下長石・石英含む ②良好	
17-8	5-G4	第2a層	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ、底部静止 系切り痕 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①0.5～1mm長石含む ②良好	
17-9	5-F4	第2a層	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ、底部静止 系切り痕 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①0.5～6mm長石含む ②良好	
17-10	5-E5	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: オリーブ灰色 内: オリーブ灰色	①0.5～1mm長石含む ②良好	
17-11	5-C3	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①1mm以下長石含む ②良好	
17-12	5-G4	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰白色	①0.5mm以下長石含む ②良好	
17-13	5-C6	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①0.5mm以下長石含む ②良好	
17-14	5-G4	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰白色 内: 灰白色	①1mm以下長石・石英含む ②普通	摩滅
17-15	5-G8	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ、底部回転 系切り痕 内: 回転ナデ	外: 灰白色 内: 灰白色	①0.5mm以下長石・石英含む ②普通	摩滅
17-16	5-A1	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ、底部回転 系切り痕 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①0.5～2mm長石多く含む ②良好	
17-17	5-C3	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰色 内: 灰色	①0.5mm以下長石多く含む ②良好	
17-18	5-B1	第2層上面	須恵器 (杯)	外: 回転ナデ、底部回転系 切り痕、貼付け高台 内: 回転ナデ	外: 灰～にぼい褐色 内: 灰～にぼい褐色	①1mm以下長石含む ②良好	

17-19	5-D2	第2層上面	須恵器 (杯)	外:回転ナデ、底部回転糸 切り縫、貼付け高台 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①1mm以下長石・石英含む ②良好	
17-20	5-G1	第2a層	須恵器 (杯)	外:回転ナデ、底部回転糸 切り縫、貼付け高台 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①1mm以下長石多量・石英 含む ②良好	
17-21	5-I2	第2a層	須恵器 (甕)	外:平行タクキメ 内:同心円状当て具縫	外:灰色 内:灰白色	①1mm以下長石含む ②良好	
17-22	5-C5	第2層上面	須恵器 (甕)	外:平行タクキメ 内:同心円状当て具縫	外:灰白色 内:灰白色	①0.5mm以下長石少量・石英 含む ②良好	
17-23	5-F3	第2層上面	須恵器 (甕)	外:平行タクキメ 内:同心円状当て具縫	外:灰色 内:灰色	①精良 ②良好	
17-24	5-A5	第2層上面	須恵器 (甕)	外:平行タクキメ 内:同心円状当て具縫	外:にぼい褐色 内:灰色	①0.5mm以下長石含む ②良好	
17-25	5-G11	第2層上面	須恵器 (甕)	外:平行タクキメ 内:同心円状当て具縫	外:灰白色 内:灰白色	①0.5mm以下長石・石英含む ②良好	
17-26	5-G3	第2層上面	須恵器 (こね鉢)	外:平行タクキメ 内:同心円状当て具縫	外:灰色 内:灰白色	①0.5mm以下長石・石英含む ②良好	
18-27	5-E10	第2層上面	須恵器 (こね鉢)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰～灰褐色 内:灰色	①1mm以下長石多く含む ②良好	束縛系
18-28	5-A10	第2層上面	陶器 (端鉢)	外:ナデ 内:割り目	外:灰色 内:灰～灰褐色	①1mm以下長石多量・石英 含む ②良好	備前
18-29	5-C9	第2層上面	陶器 (端鉢)	外:ナデ 内:割り目	外:灰色 内:灰色	①1mm以下長石含む ②良好	備前
18-30	5-B8	第2層上面	陶器 (端鉢)	外:ナデ 内:割り目	外:にぼい褐色 内:にぼい黄褐色	①1mm以下長石含む ②良好	
18-31	5-C11	第1層	須恵器 (甕)	外:平行タクキメ 内:同心円状当て具縫	外:灰色 内:灰白色	①精良 ②良好	
18-32	5-西半	第1層	陶器 (端鉢)	外:ナデ 内:割り目	外:灰色 内:灰～灰白色	①0.5～1mm長石多く含む ②良好	備前
18-33	5-D9	第1層	陶器 (甕)	外:削り出し高台	外:灰白色 内:灰白色	①精良 ②良好	朝鮮系
18-34	5-B10	第1層	陶器 (甕)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:灰色 内:灰色	①精良 ②良好	
18-35	5-C10	第1層	管状土錐		にぼい赤褐色	①精良 ②良好	
18-36	5-D10	第1層	管状土錐		にぼい橙色	①0.5mm以下長石・石英含む ②良好	
18-37	5-C10	第1層	管状土錐		にぼい赤褐色	①0.5mm以下黒色砂粒少し含む ②良好	
18-38	5-G5	第1層	管状土錐		にぼい橙色	①0.5mm以下長石・石英含む ②良好	
18-39	5-E6	第1層	管状土錐		にぼい黄～赤褐色	①1mm以下長石・石英含む ②良好	
20-2	9-H2	第4b層	繩文土器 (深鉢)	外:繩文(單節LR) 内:ナデ	外:黒褐色 内:黒褐色	①1mm以下長石含む ②良好	内面煤付 若
20-3	9-H2	第4b層	繩文土器 (深鉢)	外:繩文(單節LR) 内:ナデ	外:黒褐色 内:黒褐色	①1mm以下長石含む ②良好	内面煤付 若
20-4	9-S2	第4a層	繩文土器	外:条縫 内:条痕	外:黄褐色 内:黄褐色	①0.5～1mm黒色砂粒少し含む ②良好	

2. 石器・土製品

回 No.	次数 Grid	層位	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備 考
13-4	5-B9	第4b層	石錐	12.3	11.9	3.2	583	含隕岩	不定形円錐の長軸両端に挟り
13-5	5-B4	第4c層	石錐	7.7	6.9	1.0	64	泥岩	不定形円錐の長軸両端に挟り
13-6	5-B10	第4b層	石皿	19.2	15.4	7.8	2500	玄武岩	凹み部分平滑に摩滅
16-2	5-A4	第3層	石錐	8.8	8.4	3.4	271	泥岩	平面方形状の3方に抉り
20-1	9-K1	第4c層	土器片錐	10.0	8.4	0.8	91	-	内外貝殻条痕、胎土長石含む、焼成良好
20-5	9-E1	第4b層	石錐	7.7	6.5	2.1	138	-	平面や長方形状の長軸両端に抉り

第5章 島根大学構内遺跡（京田・諸田地区）の古環境復元

1 地質学的検討からみた京田・諸田地区の古環境

様田祐久

はじめに

本章では、京田・諸田地区（第5・9次調査区=以下5区・9区と略称）堆積層の層序・層相の観察および有機元素（炭素・窒素・イオウ）分析について記載し、この調査区の古環境を検討する。

なお、有機元素分析は島根大学総合理工学部の三瓶良和先生に測定していただいた。また、周辺地域の古環境と小稿作成について島根大学汽水域研究センター客員研究員の中村唯史氏にご助言いただいた。

本調査範囲の層序

5区および9区は標高2.5mの平坦地に位置する。5区では標高-2.2m、9区では標高-2.0mまで掘り下げ、精査をおこなった。地層確認のため、5区では一部範囲で標高-5.4m、9区では標高-3.4mまでの深堀りを行い、9区で行われたボーリングコアについても観察した。

なお、以下に示す層名は、個別調査区内部の層相観察に基づいて調査時に便宜的に命名しているため、5区と9区の同一名層が必ずしも、同一の層相・堆積時期を示すものではない。したがって、やや煩雑さを否めないが、層名の頭に調査区名を冠して述べていく。

本調査範囲では大学施設建設に伴う盛土の下に、旧水田耕作土（5・9区1層）、灰～黃灰色粘土層（5・9区2層）、細粒砂層（9区南部3層）、オリーブ黒色シルト層（5区4a層）、オリーブ黒色砂質シルト層（5区4b層）、灰色シルト層（5・9区4c層）、オリーブ黒色シルト層（5区4d層）、灰色シルト層（5区4e層）が分布することが明らかになった。このうち、2層以下が完新統自然堆積層である。これらの下位には、更新統の灰色粘土層が分布する（図25）。

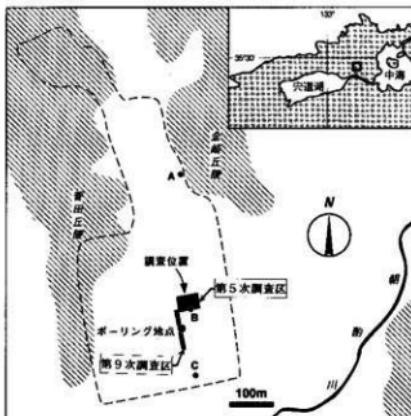


図24 調査地点 破線内が島根大学構内遺跡の範囲。斜線部は丘陵

各層の層相

灰～黄灰色粘土層（5・9区2層）

本層は粘性が強い粘土を主体とし、細礫～中粒砂を含むやや淘汰の悪い地層である。本層は調査範囲の北側に分布し、南へ向かって層厚を減じ、消滅する。レンズ状に粗粒砂層や泥炭層を挟むことがある。レンズ状に挟まれる粗粒砂層は調査区の北東へ層厚を増し、低角度の斜交葉理が発達する。腐植物からなる葉層を挟むこともある。河川堆積層とみられる。

細粒砂層（9区南部3層）

本層は9区南部に分布し、塊状で淘汰の良い細粒砂からなる。本層中には ϕ 1～2cmの棲管状の生痕化石が認められる。9区北部では、漸移的に泥分と有機質に富むようになる。

オリーブ黒色シルト層（5区4a層）

本層は有機質に富んだ均質な粘土からなり、自然流木が多く含む。自然流木の中にはフナクイムシの生痕が認められるものもある。

オリーブ黒色砂質シルト層（5区4b層）

本層は上方へ粗粒化する傾向を示す。下部では均質な粘土からなり、上方へ向かって砂分に富むようになり、上部では泥葉層と砂葉層が斜交葉理を示す。本層の下部にはヤマトシジミの化石が若干含まれる。ヤマトシジミは石灰質の殻は溶脱して失われ、キチン質の表膜のみが残存している。多くは離弁であるが、合弁で層理面に対して立った状態のものも認められる。

灰色シルト層他（5区4c～e層・9区4c層）

5区4c～e層・9区4c層は、塊状で均質なシルト層で、層相がほぼ同じ特徴を示すことから同一層であるとみられる。5区4d層は、層厚約20cmの塊状均質なオリーブ黒色シルト層で、5区4c・4e層間に挟在し、5区のみに分布する。

本層には後述のようにアカホヤ火山灰層が挟まれる。アカホヤの下位には貝化石片が含まれる。貝化石はボーリングコアから得られた小片で種は判別できないが、複数の種からなることは明らかで、ヤマトシジミのみを産する4b層とは構成種が異なる。本層の基底部は有機質に富み、更新統の灰色粘土層に由来するブロックを包有している。



写真1 京田地区の堆積層
調査区東西セクションを南側より撮影

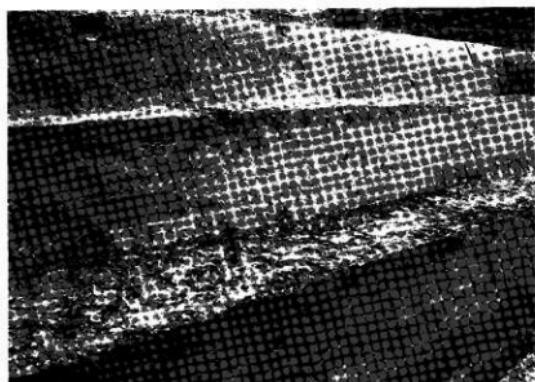


写真2 第4b層の砂泥互層
京田地区南北断面を東側より撮影

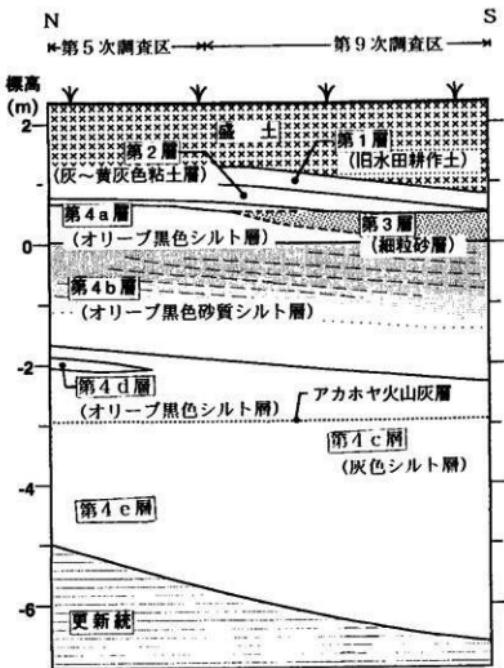


図25 模式総合柱状図

アカホヤ火山灰層について

アカホヤ火山灰層（町田・新井, 1978）は九州南方の海中に存在する鬼界カルデラに由来する火山灰層で、西日本を中心にはぼ日本全国に分布する広域火山灰層で降灰時期は6300年前である。

本火山灰層は9区で行われたボーリングコアでは、標高-2.7mに層厚0.3cmの地層として9区4c層に挟まれている。

トレンチでは肉眼的には確認できなかったが、複数の地点で鉛直方向に泥試料を採取し、中村ほか（1997）に基づいて泥試料中に含まれる火山ガラス量を観察した。その結果、標高-2.9～-3.0mに火山ガラス含有量のピークが認められた。火山ガラス含有量がピークを示す深度はボーリングコアでアカホヤが認められた深度とほぼ一致しており、この層準がアカホヤの降灰層準と判断できる。

有機元素分析

(1) 分析方法と結果

本調査区の古環境を検討する目的で、泥質堆積物の炭素濃度、窒素濃度、イオウ濃度の分析を行った。

試料採取地点は、5区のトレンチ壁面、花粉分析試料採取地点と同一である（「第5章2」図28参照）1地点で全層準の試料を採取することはできなかったが、試料採取層準が連続的になるよう試料採取している。

分析は試料を乾燥後、シルトサイズ以下までメノウ乳鉢で粉碎した。これに1Nの塩酸を加えて炭酸塩を分解した後、FISONS EA1108を用いて分析し、全有機炭素（TOC）、全窒素（TN）、全イオウ（TS）の重量%を求めた。

結果を図26に示し、以下にそれぞれの傾向を述べる。

TOC

TOCは標高0m付近を境に、上下で傾向が大きく異なっている。

標高0m以下では概ね1%以上を示し、上方へ高くなる傾向がある。標高0m以上では0.5%未満の低い値を示す。

TOCの傾向が異なる層準は、5区4a層と4b層の境界にあたる。

TN

TNは多くの層準で0.13~0.2%を示し、標高-0.3m、-2.0m、-3.3mの3層準でスパイク的に高い値を、標高0.7mで0.1%未満の低い値を示す。

標高-2.0m付近のピークは地層に色調の変化が認められる層準に一致している。他のピークでは肉眼的には変化が認められない。低い値を示す標高0.7mは、5区4a層最上部である。

TS

TSは標高0.7mではほとんど含まれないが、それ以下では1%を越える値を示す。全体として上方へ向かって低くなる傾向があり、特に標高0m付近で変化が大きい。

(2) 解釈

TOCは標高0m付近を境に傾向が大きく変化し、TSも同層準で変化している。この層準は層相が大きく変化する層準と一致する。

標高0m以深には連続性がよい一連の地層が分布している。層相からこの地層は静かな水域に堆積したものと判断できる。標高0m以深ではTSが高い値を示すことから、この水域は海水が流入していたと考えられ、内湾～汽水湖の環境が推定される。TOCの上方への増加は、陸源有機物供給量が相対的に増加したことを示し、水域の縮小（=三角州の接近）を反映していると考えられる。

TOCの上方への増加に対し、TNはスパイク的な変化を除いてあまり変化していない。そのため、

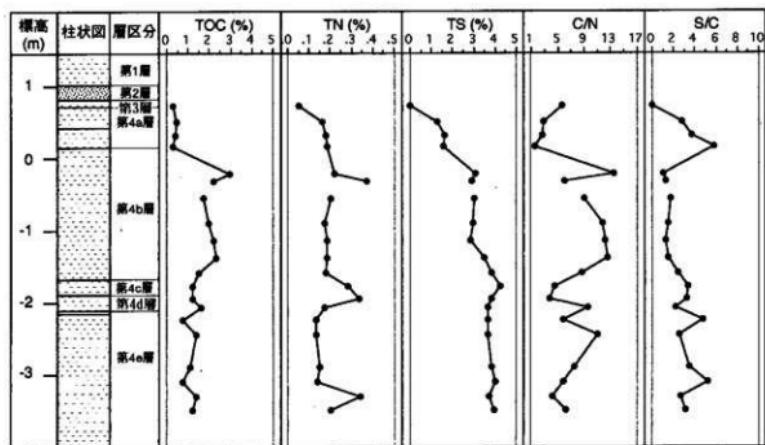


図26 有機元素分析結果 分析試料は第5次調査区で採取した

C/N比は上方へ大きくなる傾向があり、陸源有機物供給量の増加に対して水中での基礎生産量（プランクトンによる有機物生産）はあまり変化しなかったと考えられる。TNがスパイク的にピークを示す層準では基礎生産量が一時的に増大したことが考えられ、たとえば、しばしば赤潮が発生するような状況が予想できる。

TSとTOCの関係についてみると、TOCの上方への増加に対して、TSは減少している。一般に水域の条件が同じときは底質中の有機物濃度が高くなるとイオウが固定される量が増す。しかし、ここでは両者が逆の傾向を示しており、堆積物中に固定されるイオウの起源となる硫酸イオン濃度の減少（=海水流入量の減少）が考えられる。

標高0m以浅の地層は一部で削り面で境して重なり、連続性が余りよくないことから、基本的には陸上の堆積物と判断できる。

ここではTOCは大変低い値を示す。初生的に陸源有機物供給量が少なかったか、堆積後に有機物が酸化分解を受けたという2つのことが考えられるが、TNは標高0.7mを除く他の層準とあまり変わらない。陸源有機物供給量のみ著しく減少し、基礎生産量があまり変化しないという状況は考えにくいので、酸化分解によってTOCが減少したと考えるのが妥当と思われる。TNには粘土鉱物の結晶構造に取り込まれている無機の窒素も含んでいるため、その分の影響で酸化分解による減少が見掛け上少ないのか、土壤化を受ける過程で供給されることがあるかもしれない。

TSは標高0.7mより下では1%以上を示すことから、海水が流入する環境で堆積したと考えられる。標高0.7mはTSからは淡水環境が考えられるが、土壤化を受ける過程でイオウが流出した可能

性もある。

これら各要素から、標高0m以浅は乾湿を繰り返す湿地で、高潮や波浪によって海水が流入する環境に堆積したと考えられる。

層序対比と古環境

島根大学構内遺跡とその周辺の古環境変遷は、本遺跡のこれまでの調査の成果（島根大学埋蔵文化財調査研究センター編、1997など）や本遺跡の東に位置する朝酌川遺跡群（西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡）の調査（島根県教育委員会編、1994など）、周辺地域の完新統層序の研究（中村・徳岡、1997など）によって検討されている。ここでは、それを踏まえながら今回の調査区の古環境変遷を検討する。

1万年前から6000年前頃にかけての縄文海進によって、大社湾から出雲平野、宍道湖、松江低地まで続く内湾（古宍道湾）が形成され、島根大学構内遺跡付近はその湾奥部にあった。今回の調査区で標高0m以深に分布する泥層はイオウ濃度から内湾～汽水湖に堆積した地層と考えられ、古宍道湾の堆積層といえる。

古宍道湾が最も外海的要素の強い環境になるのは7000～8000年前頃と見積もられている。諸田地区1（2次調査区）のボーリング（図24のC地点）ではこの時期の層準で貝化石が多産し、カキやウニの化石が含まれている（島根大学埋蔵文化財調査研究センター編、1996）。今回の調査では貝化石の多産層準は認められないが、殻が残った貝化石が点在しているのはアカホヤより下位に限られ、この層準の堆積時が最も外海的要素の強い環境と考えられる。なお、古宍道湾の水域が最も拡大した時期（縄文海進の極頂期）はアカホヤ降灰（6300年前頃）とみられていて（中村ほか、1996），外海的要素が強い環境の出現時期とは一致していない。

斜交葉理が発達した5区4b層やこれと概ね同時期の9区4a層下部堆積後、9区南部ではその上に淘汰のよい細粒砂層（9区南部3層）が重なる。これは水域が浅くなり、陸化していく過程での一連の堆積物と考えられ、斜交葉理発達層準は浅い水域、細粒砂層は離水した砂州の堆積物と考えられる。9区北部、5区には細粒砂層は分布せず、湿地堆積層と考えられるオリーブ黒色シルト層（5区4a層など）が分布している。両者は指交する同時異相である。砂州堆積層は9区南側の諸田地区1（2次調査区）と南西側橋本地区1・2（6・7次調査区）でも確認されていて（島根大学埋蔵文化財調査研究センター編、1999）、諸田地区1では砂州堆積層から縄文時代晚期（3000～2400年前頃）の遺物が出土している。また、5区4a層上部からは 2870 ± 270 yr.BPの¹⁴C年代が得られており、縄文時代晚期は9区付近を境にして、南側に砂州があり、北側は後背湿地になっていたと考えられる。なお、斜交葉理発達層準（5区4b層）からは縄文時代中期（5000～4000年前）の遺物が出土しており、これが再堆積でないならば、5区一帯が浅い水域となったのは縄文時代中期で、その後、縄文時代晚期までに陸化したということになる。

5区では古墳時代後期の遺物を含む河川性の粗粒砂屑（5区第2a層下位砂屑、「第3章第2節基本層序」参照）が分布していることから、古墳時代かそれ以降に本調査区の東を流れていた小河川が氾濫し、5区に粗粒砂屑が堆積したことがわかる。しかし、陸化後の堆積物は薄く、不連続であるため、陸化後の環境を示す証拠はほとんど得られない。標高が低いことから推定すると、河川の氾濫の影響を受けやすく、土地利用には適さない場所だったかもしれない。

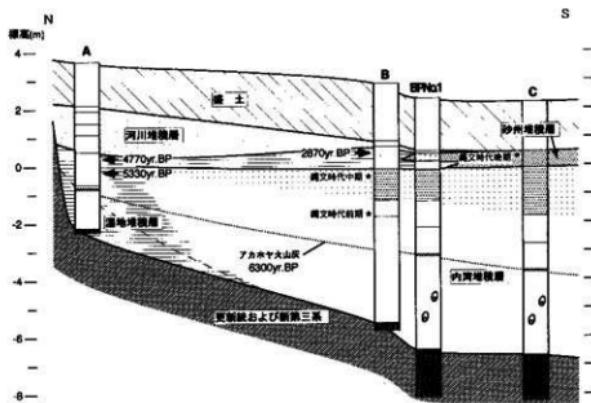


図27 島根大学構内遺跡の地下地質断面
数字は“C年代値。星印は遺物の示す時代。A～Cの位置は図25を参照

文 献

- 町田 洋・新井房夫, 1978 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, 143-163.
 中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克己・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳, 1996 島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡, LUGNA, 3, 9-11.
 中村唯史・徳岡隆夫, 1996 宍道湖ボーリングSB1から発見されたアカホヤ火山灰と完新世の古環境変遷についての再検討, 島根大学地球資源環境学研究報告, 15, 35-40.
 中村唯史・徳岡隆夫・赤沢秀則, 1997 鹿島町佐太講武日塚の遺物包含層とボーリング調査による地層対比, 山陰地域研究, 13, 1-9.
 島根大学埋蔵文化財調査研究センター編, 1996 島根大学構内遺跡発掘調査概報II(諸田地区I), 38p.
 島根大学埋蔵文化財調査研究センター編, 1997 島根大学構内遺跡第1次調査(橋綱手地区I), 138p.
 島根大学埋蔵文化財調査研究センター編, 1998 島根大学構内遺跡第3次調査(深町地区I), 96p.
 島根大学埋蔵文化財調査研究センター編, 1999 島根大学構内遺跡第6, 7次調査(橋本地区I), p.
 島根県教育委員会編, 1995 朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告「原の前遺跡」, 198p.

2 島根大学構内遺跡第5次調査（京田地区1）の花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

島根大学構内遺跡は、松江市西川津町の島根大学構内に分布する。今回の調査は生物資源科学部新館の建設に伴うものであり、調査区（京田地区）は構内中央・東部に位置する。

今回の報告は、島根大学埋蔵文化財調査研究センターが、遺跡周辺の古植生、堆積環境などの古環境復元を行うために文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した、分析報告書の概報である。

分析試料について

分析した試料は島根大学埋蔵文化財調査研究センターと川崎地質株式会社が協議の上、川崎地質株式会社が採取したものである。図28に示す3地点で試料を採取した。図29の花粉ダイアグラムは、3地点の柱状図および分析結果を総合したものである。柱状図右側の採取層準に試料番号を（No.1 地点試料No.1を“1-1”と示す。）柱状図左側に層名を示した。

分析方法および分析結果

(1) 分析方法

分析処理は、渡辺（1995）に従った。顕微鏡観察は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。しかし、1-1では花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数で200を越えることができなかった。

(2) 分析結果

花粉分析結果を図2の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基數にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。花粉含有量の少ない1-1については、検出できた試料を*で示した。

考 察

(1) 花粉分帯

花粉分析結果をもとに、地域花粉帶の設定（花粉分帯）を行った。花粉組成の変遷を見るために、下位から上位に向かって記載する。

1) SKP-IV带（3-15～5）

特に高率を示す種類はなく、マツ属（複維管束亞属）、クマシデ属—アサダ属、アカガシ亞属、

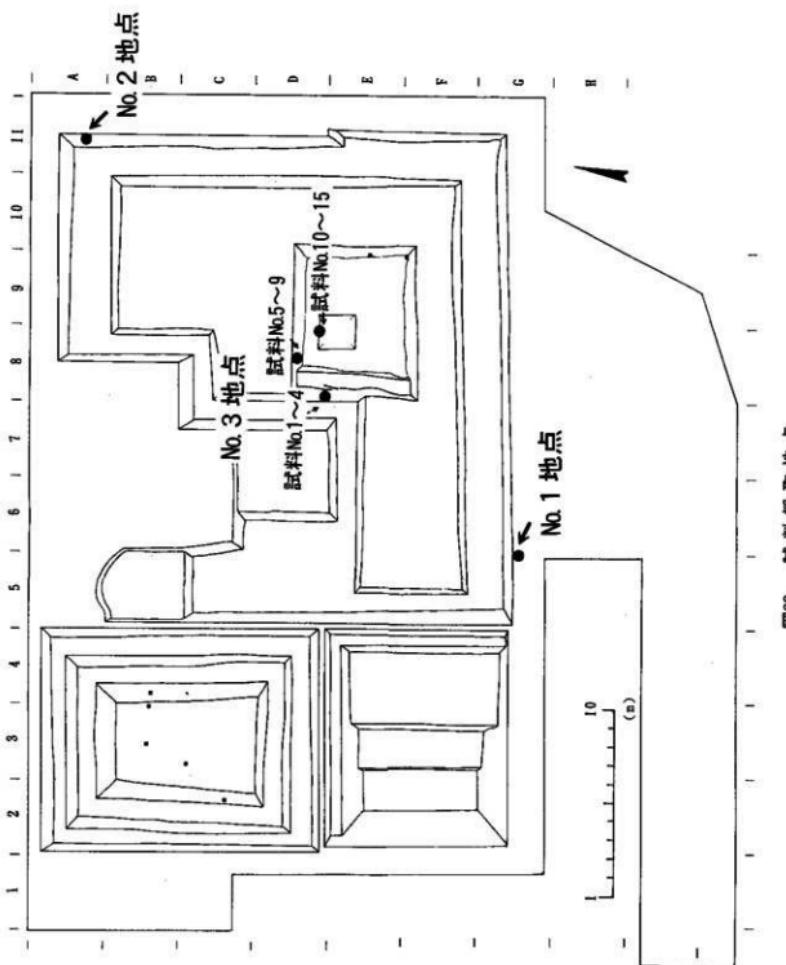


図28 試料採取地点

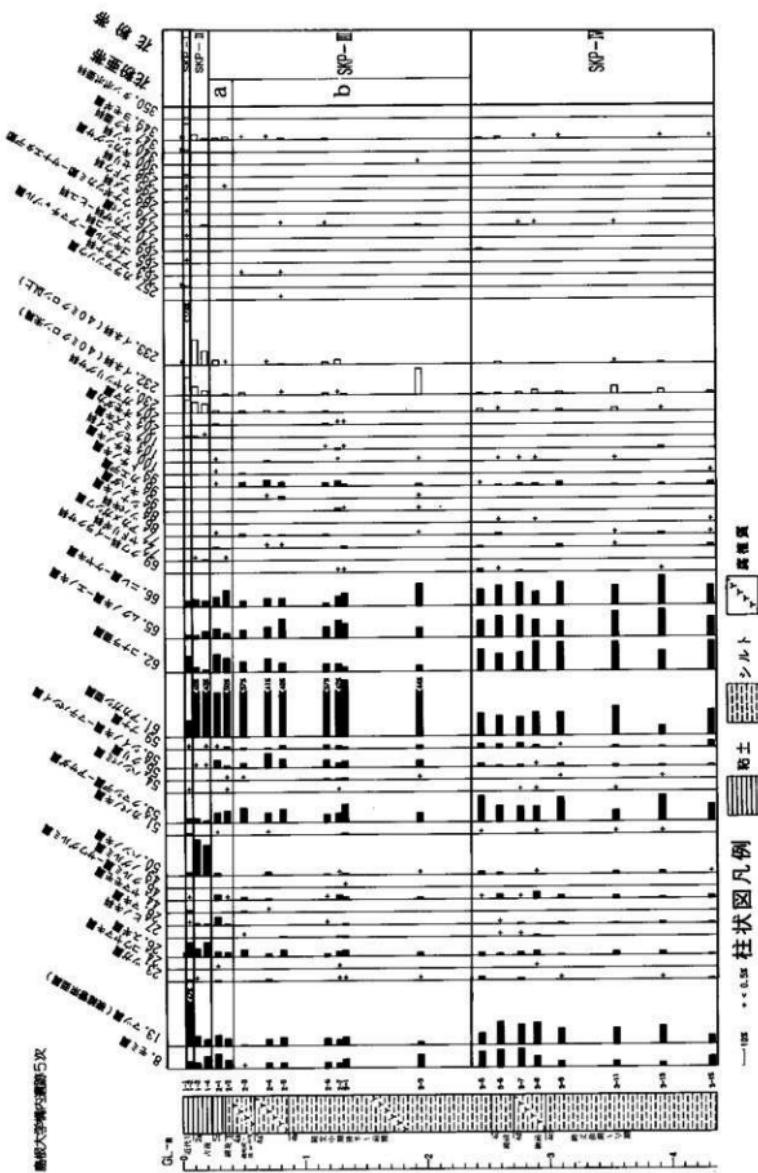


図29 花粉ダイアグラム

コナラ亜属、ムクノキ属—エノキ属、ニレ属—ケヤキ属が、そのほかの種類に比べ高い出現率を示す。また、草本花粉はほとんど検出されない。

2) SKP-Ⅲ带 (3-3~2-1)

アカガシ亜属が特に高い出現率を示すほか、高率を示す種類はない。一方でトチノキ属が2-2、1ではほとんど検出されないが、3-3~2-3では安定して数%の出現率を示す。このことから、3-3~2-3をb亜帶、2-2、1をa亜帶とした。また草本花粉はほとんど検出されない。

3) SKP-Ⅱ带 (1-4~3)

アカガシ亜属が特に高い出現率を示すほか、ハンノキ属が特徴的に出現する。草本花粉では、イネ科(40ミクロン以上)がやや高い出現率を示し、増加傾向を示す。

4) SKP-Ⅰ带 (1-2)

マツ属(複維管束亜属)が特に高い出現率を示すほか、高率を示す種類は無い。草本花粉では、イネ科(40ミクロン以上)が高率を示す。

(3) 既知の結果との比較

島根大学構内遺跡では橋繩手地区、深町地区においても花粉分析が行われている(川崎地質(株), 1997, 1998)ほか、近隣の西川津遺跡、タテチョウ遺跡でも花粉分析が行われてきている(例えば大西, 1979)。他地点と花粉組成(地域花粉帯)を比較・検討することにより、今回の分析の特異性、共通性が明らかになることから、各地点間の対比を行った。表3に、島根大学構内遺跡内3地点と、西川津遺跡海崎地区(大西ほか, 1983)の地域花粉帯の対比結果を示す。

SFP-Ⅱ带、SHP-Ⅲ带、区分jにはK-Ah火山灰層が狭在され、これらの地域花粉帯が同時期の植生を表すことが示唆される。花粉組成では、SFP-Ⅱ带ではマツ属(複維管束亜属)が卓越し、コナラ亜属、モミ属を伴うなど、SHP-Ⅲ带と区分jの中間的な様相を示す。SFP-Ⅰ带では前帯に比べマツ属(複維管束亜属)が減少し、コナラ亜属が卓越するようになる。区分iでは前区分に比べマツ属(複維管束亜属)が減少し、アカガシ亜属、クマシデ、クリ属—シノキ属、コナラ亜属が高率になる。種構成に違いがあるもののマツ属(複維管束亜属)の減少という共通点がある。一方SHP-Ⅲ、Ⅱ带ではマツ属(複維管束亜属)の出現率が低く、他の2地点で認められたマツ属(複維管束亜属)の出現率の低下が認められなかった。また、SHP-Ⅱ带はスギ属がやや増加することでSHP-Ⅲ带と区分されていたが、他の2地点ではこの変化が認められなかった。

今回の京田地区では、K-Ah火山灰層が発見されなかった。しかし出土遺物などから、SKP-IV带は縄文時代早期末~前期の植生を示していると考えられている。一方花粉組成では、マツ属(複維管束亜属)、コナラ亜属とともにさほど高い出現率を示さず、他の3地点と異なる様相を示す。これらのことから、SKP-IV带、SHP-Ⅲ、Ⅱ带はSFP-Ⅱ、Ⅰ带、区分j、iに対応し、各調査地点での地域的な植生を反映した(あるいは、周辺地域の植生を集約した)花粉組成であると考えら

表3 地域花粉帯の対比

局 権 大 学 構 内 遺 跡						西川津遺跡		花粉組成の特徴	
京田地区(今回)		深 町 地 区		橋 繩 手 地 区		海 鮎 地 区			
花粉帯	年 代	花粉帯	年 代	花粉帯	年 代	花粉帯	年 代		
SKP- I	現代盛土					a		Diplo.>>	
SKP- II	古墳後期			SHP- I	奈良頃	c ~ f	中世 ~ 弥・繩晩	Cyclo.>Crypto.	
SKP- III	a	繩晚期 ~				g		Cyclo.>> +Podocarpus	
	b	繩文前期				h		Cyclo.>> (+Aesculus)	
SKP- IV	繩文前期 ~	SFP- I	5329 ±190	SHP- II III	繩文前期 ~	i	繩文前期 ~ 繩文早期	Diplo., Crypto., Cyclo., Quercus	
	繩文早期	SFP- II	K-Ah		繩文早期	j	K-Ah	Diplo.> Abies, Quercus	

Abies:モミ属、Diplo.:マツ属(複維管束亞属)、Crypto.:スギ属、Podocarpus:マキ属、
Cyclo.:アカガシ亞属、Quercus:コナラ亞属、Aesculus:トチノキ属

れる。

SKP- III带 b、a 亜带はアカガシ亞属が卓越すること、マキ属の出現傾向から、区分 h、g に対応する。

SKP- II带はアカガシ亞属が卓越する。また、古墳時代後期頃に堆積したと考えられることから SHP- I带、区分 f ~ c に対応する可能性がある。SKP- II带ではハシノキ属、SHP- I带ではス

ギ属が高率になるなどの相違点があるが、各調査地点での地域的な植生を反映した（あるいは、周辺地域の植生を集約した）花粉組成であると考えられる。

SKP-I帯はマツ属（複維管束亜属）が卓越することから、区分aに対応する。ただし、試料を採取した1層は現代の盛土と考えられており、区分aに相当する時期の上を用いたことになる。

(4) 古環境復元

ここでは、京田地区的地域花粉帯に対応する時期毎に、花粉分析結果から推定できる遺跡周辺の古環境について述べる。

1) SKP-IV帯期（縄文時代早期末～前期）

発掘成果から試料採取地点は古宍道湾内の入り江出口付近に位置していたと考えられている。

橋繩手地区、海崎地区との関連から、遺跡の立地する入り江の東側（西川津遺跡）ではクロマツを要素とする海岸林が、西側（島根大学構内遺跡）にはコナラ類を要素とする落葉樹林が広がっていたと考えられる。また、島根大学構内遺跡周辺でコナラ類を要素とする落葉樹林が分布していたことは、橋繩手地区、および深町地区における同時代の出土自然木の樹種鑑定結果（能代、1998）とも調和的である。

深町地区は両地点の中間に位置し入り江奥に位置することから両地点の中間的な花粉組成を示し、今回の京田地区はさらに広い範囲の植生を反映した花粉組成を示していると考えられる。したがって遺跡周辺ではコナラ林やクロマツ林が分布していたのに対し、遺跡から離れた北山山地では、カシ類を要素とする照葉樹林が分布し、河川沿いではエノキ、ケヤキなどのニレ科の樹木が河畔林を形成していたと考えられる。

2) SKP-III帯期（縄文時代前期～晩期）

京田地区は、引き続き古宍道湾内の入り江出口付近に位置していたと考えられる。一方、京田地区的花粉組成と朝駒川の河川内であったと考えられる海崎地区での花粉組成とがよく一致することから、遺跡周辺から広く北山山地まで、カシ類を要素とする照葉樹林で覆われていたと考えられる。

また、b亜帯期にはトチノキ属が安定して数%の出現率を示す。しかしトチノキは冷温帶の渓谷沿いに主に分布することから、b亜帯で得られた他の種類に対し異質である。今後、トチノキの生態についての再考、あるいは他の要因によるトチノキ生育の可能性の究明などが必要になってくる。

3) SKP-II帯期（古墳時代後期）

海退あるいは埋積により、京田地区は湿原へと変化したと考えられる。京田地区南の橋本地区では同時期の自然流路内の堆積物を対象とした花粉分析が行われており、近辺での稲作の可能性を示唆した（渡辺、1999）。しかし今回の結果では、イネ科（40ミクロン以上）がやや高率になり増加傾向を示すものの積極的に稲作を指示する要因は無く、逆にハンノキ属が高率になるなど湿原の存在が示唆された。周辺地域での水田耕作の開始時期など、今後の調査により再考する必要があろう。

今回得られた結果では、湿原内に局所的にハンノキ湿地林が分布し、カヤツリグサ科やイネ科の草本が繁茂していたと考えられる。

また、橋綱手地区ではやや後の時期にスギ属が高率を示し、ハンノキ属の出現率は低い。橋綱手地区背後の丘陵や、北山山地の谷沿いにスギ林が広がっていたと考えられる。

4) SKP-I 帯期（現代）

1層は現代の盛土と考えられ、1-1からは花粉化石がほとんど検出されず造成などに伴う「盛土」の特徴を示す。一方花粉帯を設定した1-2については、層序から推定される堆積時期での周辺地域の花粉組成と矛盾せず、調和的である。1層内の、上下の試料で花粉化石の含有量に著しい差があることから、次のケースが考えられる。

①盛土した時期が2期に分かれる。下位の層準から得られた花粉化石はすべて母材に含まれていた。

②盛上した時期が2期に分かれる。下位の層準から得られた花粉化石は、母材にもともと含まれていた花粉化石と耕作時に付加された花粉化石である。

③上位のみ盛土であり、下位は自然堆積物である。

下位の層準が自然堆積物であるとすると、周辺の植生は以下の様に推定される。

京田地区では水田耕作が行われ、畦や休耕田ではソバの栽培も行われていたと考えられる。遺跡背後の丘陵から北山山地ではアカマツ二次林が広く分布する一方で、カシ類を要素とする照葉樹林やコナラ類を要素とする「雜木林」も分布していたと考えられる。

(4) まとめ

花粉分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

1) 花粉分析結果から、SKP-IV～I帯の地域花粉帯を設定した。さらにSKP-III帯をb、a亜帯に細分した。

2) 既知の花粉帯との比較対比を行った。堆積環境が既知の調査地点と大きく異なったことから、対比ができない花粉帯もあった。しかし、おおむね対比することができた。

3) 遺跡周辺での縄文時代早期から近代にかけての断続的な古環境が推定できた。これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。

①今回の調査地点は縄文時代を通じ既知の調査地点に比べ湾央に近く、沿岸の植生の影響を受けにくい地点である。

②K-Ah火山灰降灰時期には、構内遺跡西側ではコナラ類、東側ではニヨウマツ類を要素とする森が広がっていたと考えられる。しかし背後の北山山地では、カシ類を要素とする照葉樹林が広がっていたと考えられる。

③縄文時代前期～晩期の時期にトチノキの分布拡大が推定されるが、現在の生態からは理解でき

ない部分があり、今後、解析の際に注意すべき点である。

④京田地区では古墳時代後期でも、水田耕作が行われていなかったと考えられる。島根大学構内遺跡周辺での水田耕作開始時期などの結論は、今後の調査にゆだねることにする。

引用文献

- 川崎地質株式会社（1997）橋繩手地区における花粉・珪藻分析（概報）。島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1冊 島根大学構内遺跡第1次調査（橋繩手地区1），116–121。島根大学埋蔵文化財調査研究センター、島根。
- 川崎地質株式会社（1998）深町地区的花粉・珪藻分析（概報）。島根大学埋蔵文化財調査研究報告第2冊 島根大学構内遺跡第3次調査（深町地区1），56–63。島根大学埋蔵文化財調査研究センター、島根。
- 能城修一（1998）島根大学構内遺跡第1次調査（橋繩手地区）・第3次調査（深町地区）出土木材の樹種。島根大学埋蔵文化財調査研究報告第2冊 島根大学構内遺跡第3次調査（深町地区1），64–85。島根大学埋蔵文化財調査研究センター、島根。
- 大西郁夫（1979）花粉の分析、朝酌川改修工事に伴うタチヨウ遺跡発掘調査報告書I，188–193。島根県教育委員会、島根。
- 大西郁夫・原田吉樹・渡辺正巳（1989）松江市、西川津遺跡の花粉分析、山陰地域研究（自然環境），5，45–54。
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法、考古資料分析法，84, 85。ニューサイエンス社
- 渡辺正巳（1999）島根大学構内遺跡（橋本地区2）における花粉分析。島根大学埋蔵文化財調査研究報告第3冊 島根大学構内遺跡第6, 7（橋本地区1, 2），56–63。島根大学埋蔵文化財調査研究センター、島根。

3 島根大学構内遺跡第5・9次調査において出土した木材の樹種

森林総合研究所木材利用部 能城 修一

島根大学構内遺跡第5次調査（京田地区1）および第9次調査（諸田地区4）から出土した木材の樹種を報告する。対象とした木材は自然木、板、杭、削材、角材など217点である。出土層準は海成層とされる4c層から4a層および砂州を構成する3層で、4c層は縄文時代前期に、4b層は縄文時代前期～晚期前半に、4a層は縄文時代中期後半～晚期前半に、3層は縄文時代晚期に比定されている。出土点数は4c層が1点、4b層が163点、4a層が44点、3層が2点、層準不明が7点であった。樹種同定用のプレパラート作製は島根大学埋蔵文化財調査研究センターの手で行われた。これらのプレパラートは同センターに保存されている。以下には分類群の簡単な記載をおこない、代表的な標本の顕微鏡写真を示して同定の根拠を明らかにする。

1. カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科 図1：1a-1c (枝・幹材, SHIM-468)

水平・垂直のいずれの樹脂道もかく針葉樹材。晩材は量すくなく、早材からの移行は緩やか。木部柔組織はない。仮道管の内壁には2-3本ずつまとまって走るらせん肥厚がある。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はやや小型のヒノキ型で1分野に2個。

2. モミ属 *Abies* マツ科 図1：2a-2c (枝・幹材, SHIM-469)、3a-3c (根材, SHIM-439)

枝・幹材 水平・垂直のいずれの樹脂道もかく針葉樹材。晩材は量多く明瞭で、早材からの移行はやや急。木部柔組織はふつう見られない。放射組織は柔細胞のみからなり、垂直壁は多数の単壁孔をもち結節状を呈する。分野壁孔は小型のスギ型で1分野に2-4個。

根材 晩材の仮道管はやや薄壁で大きく、早材からの移行は緩やかである。それ以外の特徴は枝・幹材に同じ。

3. マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図2：4a-4c (枝・幹材, SHIM-537)、5a-5c (根材, SHIM-343)

枝・幹材 垂直および水平の樹脂道をもつ針葉樹材。晩材は量多く、早材からの移行はやや急。樹脂道の分泌細胞は薄壁で大型で、保存されていないことも多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管とからなり、放射仮道管の水平壁には鋸歯状の突起が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1分野にふつう1個。

根材 早材の仮道管も壁が厚く、晩材との移行は緩やか。それ以外の特徴は枝・幹材に同じ。

4. オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitam. クルミ科 図2:6a-6c (枝・幹材, SHIM-453)

大型-中型でまるい管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合して、年輪内で徐々に径を減じながら、ややまばらに散在する散孔材。木部柔組織は接線状および周囲状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で1-3細胞幅くらい。

5. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図3:7a-7c (枝・幹材, SHIM-408)

小型の管孔が単独あるいは2-5個放射方向に複合して、放射方向にのびる帯をなして集合する放射性散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性にちかい異性で1-3細胞幅くらい、しばしば大型の集合状となる。

6. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図3:8a-8c (枝・幹材, SHIM-459)

ごく大型でまるい管孔が年輪のはじめに2-3列集合し、晩材ではやや急に径を減じた薄壁の小管孔が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は單一。放射組織は単列同性。

7. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ex Yamazaki et Mashiba ブナ科 図3:9a-9c (枝・幹材, SHIM-332)

やや大型でまるい管孔が年輪のはじめに放射方向にのびる塊をなして点在し、晩材ではやや急に径を減じた薄壁の小管孔が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は單一。放射組織は単列同性。

8. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図4:10a-10c (枝・幹材, SHIM-456)

大型-中型でまるい厚壁の単独管孔が放射方向に1-3列ほどの帶をなして配列する放射孔材。木部柔組織は幅のせまい、いびつな帶状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で、単列の小型のもと大型の複合状のものとからなる。

9. ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図4:11a-11c (枝・幹材, SHIM-349)

大型でまるい厚壁の管孔が単独あるいは2-3個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材。管孔の直径はの終わりでやや減少する。木部柔組織は周囲状および晩材で翼状・連合翼状。道管の穿孔は单一。放射組織は上下端の1-3細胞が直立細胞からなる異性で1-5細胞幅。

10. エノキ属 *Celtis* ニレ科 図4:12a-12c (枝・幹材, SHIM-446)

大型でまるい管孔が年輪のはじめに1-2列ほど集合し、晩材ではやや急に径を減じた薄壁の小管孔がななめに断続的に連なる塊をなして配列する環孔材。道管の穿孔は单一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1-3細胞が直立細胞からなる異性で1-6細胞幅、多列部には不完全は鞘細胞をもつ。

11. ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図5:13a-13c (枝・幹材, SHIM-539)

大型でまるい管孔が年輪のはじめに1列にならび、晩材では急に径を減じた薄壁の小管孔が斜め～接線方向に連なる帯をなして配列する環孔材。道管の穿孔は单一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で1-5細胞幅。木部柔組織にはしばしば大型の結晶をもつ。

12. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図5:14a-14c (枝・幹材, SHIM-355)

ごく大型でまるい管孔が年輪のはじめに1列にならび、晩材では急に径を減じた薄壁の小管孔が斜め～接線方向に断続する帯をなして配列する環孔材。道管の穿孔は单一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1細胞が直立する異性で1-10細胞幅、直立細胞にはしばしば大型の結晶をもつ。

13. ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 図5:15a-15c (枝・幹材, SHIM-368)

やや大型でまるい管孔が単独あるいは2-3個複合して年輪のはじめに2-3列集合し、晩材では徐々に径を減じた小管孔が2-数個複合して外形のまるい塊をなして、ななめに断続的につらなる傾向をみて散在する半環孔材。道管の穿孔は单一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1-4細胞が直立する異性で1-5細胞幅。

14. タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クヌキ科 図6:16a-16c (枝・幹材, S HIM-450)

中型で厚壁のやや角張った管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合してまばらに散在する散孔材。木部柔組織は周囲状でときに油細胞をもつ。道管の穿孔は单一、ときに十数本の横棒からなる階段状。放射組織は小型の異性で1-3細胞幅。

15. クロモジ属 *Lindera* クスノキ科 図6:17a-17c (枝・幹材, SHIM-443)

小型で厚壁の管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合してまばらに散在する散孔材。木部柔組織は周囲状。道管の穿孔は單一、ときに階段状。放射組織は小型の異性で1-3細胞幅。木部柔組織および放射組織にはときに油細胞をもつ。

16. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図6:18a-18c (枝・幹材, SHIM-425)

ごく小型の単独管孔が年輪内で徐々に径を減じながら均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状-短接線状。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は小型の異性で1-3細胞幅、単列部にはしばしば大型の結晶をもつ。

17. ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 図7:19a-19c (枝・幹材, SHIM-356)

小型の単独管孔が年輪内に均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状-短接線状。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で1-3細胞幅。

18. モッコク *Ternstroemia gymnanthera* (Wright et Arn.) Beddome ツバキ科 図7:20a-20c (根株材, SHIM-517)

やや小型で角張った単独管孔が年輪内に均一に散在する散孔材。木部柔組織は短接線状。道管の穿孔は20-30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で大型で、1-4細胞幅くらい。

19. サクラ属 *Prunus* バラ科 図7:21a-21c (枝・幹材, SHIM-426)

中型でまるい管孔が単独あるいは2-数個複合して、徐々に径を減じながら、ななめ方向につらなる傾向をみて密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は單一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性にちかい異性で1-5細胞幅。

20. ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 図8:22a-22c (枝・幹材, SHIM-491)

やや大型でまるい管孔が年輪のはじめに単独あるいは2個複合して2列ほど配列し、晚材ではやや急に径を減じた小管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合して散在する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晚材で翼状-連合翼状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で、1-2細胞幅。

21. フジ属 *Wisteria* マメ科 図8:23a-23c (枝・幹材, SHIM-364)

ごく大型でまるい単独管孔が年輪のはじめに1-2列配列し、晚材ではごく小型で薄壁の管孔が接線方向にのびた塊をなし、木繊維の塊と交互に配列する環孔材。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で1-4細胞。小道管と木部柔細胞ストランドは層階

状に配列する。

22. アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell.Arg. トウダイグサ科 図8: 24a-24c
(枝・幹材, SHIM-494)

大型であるいは厚壁の管孔が放射方向に1列に配列する傾向をみて、徐々に径を減じながら散在する半環孔材。木部柔組織は周囲状、およびいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は單列異性。

23. センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. センダン科 図9: 25a-25c (枝・幹材, SHIM-442)

大型であるいは管孔が年輪のはじめに1-2列配列し、小道管が早材道管のあいだや晩材に不規則に散在する環孔材。木部柔組織は早材では帯状で、晩材で周囲状。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で1-4細胞幅。木部柔組織にはしばしば小型の結晶が連なる。

24. ヌルデ *Rhus javanica* L. var. *roxburghii* (DC.) Rehd. ウルシ科 図9: 26a-26c (枝・幹材, SHIM-538)

大型であるいは管孔が単独あるいは2-3個複合して年輪のはじめに2-3列集合し、そこから徐々に径を減じた管孔が、年輪の終わりではごく小型で薄壁となって斜めへ接線方向に断続的につらなる塊をなして配列する半環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1-3細胞が直立する異性で1-3細胞幅。

25. チドリノキ カエデ科 図9: 27a-27c (枝・幹材, SHIM-460)

中型であるいは管孔が単独あるいは2-3個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材。基本組織である木繊維の壁厚の変化により雲紋状を呈する。道管の穿孔は単一、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で1-5細胞幅の小型のものと10細胞幅以上でいびつな外形をもつ大型のものとからなる。木部柔組織は年輪界付近に散在し、しばしば多数の結晶をもつ。

26. カエデ属 *Acer* カエデ科 図10: 28a-28c (枝・幹材, SHIM-381)

チドリノキに似た散孔材。放射組織は同性で1-5細胞幅の小型のもののみからなり、大型のものはない。

27. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図10: 29a-29c (枝・幹材, SHIM-

大型でまるい管孔が単独あるいは2個複合して年輪のはじめに1-2列ならび、晩材ではやや急に径を減じた小管孔が数個-10数個あつまって放射方向にのびる塊をなして散在する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状-連合翼状。道管の穿孔は单一。放射組織は同性で、1-3細胞幅。

28. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図10: 30a-30c (枝・幹材, SHIM-478)

小型でまるい管孔が単独あるいは2~数個放射方向に複合して密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は單一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は小型の単列同性で、層階状に配列する。

29. ヨコグラノキ クロウメモドキ科 図11: 31a-31c (枝・幹材, SHIM-454)

大型でまるいや厚壁の管孔が年輪のはじめに1-2列ならび、晩材では徐々に径を減じた厚壁の管孔が2-数個ずつおもに放射方向にのびた塊をなして、かならずしも複合することなく散在する環孔材。木部柔組織は周囲状で、晩材では小管孔の塊をつつむ。道管の穿孔は單一。放射組織は上下端の1-3細胞が直立する異性で1-5細胞幅、直立細胞はしばしば結晶をもつ。

30. グミ属 *Elaeagnus* グミ科 図11: 32a-32c (枝・幹材, SHIM-350)

中型でまるい管孔が年輪のはじめに1列に並び、晩材では小型の単独管孔が密に均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状-短接線状。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で1-10細胞幅。

31. クマノミズキ類 *Swida* cf. *macrophylla* (Wall.) Soják ミズキ科 図11: 33a-33c (枝・幹材, SHIM-498)

中型でまるい単独管孔が均一にややまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は上下端の1-5細胞が直立する異性で1-4細胞幅。

32. キツタ ウコギ科 図12: 34a-34c (枝・幹材, SHIM-384)

中-小型でまるい単独管孔が年輪内で徐々に径を減じながら密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は同性で1-5細胞幅、ときにひょうに大型となり、また水平樹脂道をもつ。

33. タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann ウコギ科 図12: 35a-35c (枝・幹材, SHIM-385)

やや大型でまるい管孔が年輪のはじめに3列ほどならび、晩材では徐々に径を減じた小管孔が2～数個複合して、斜め～接線方向につらなる傾向をみて散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1細胞が直立する異性で1～6細胞幅。

34. シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科 図12: 36a～36c (枝・幹材, SHIM-M-440)

ごく小型で角張った管孔がほぼ均一にややまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は単一あるいは10本ほどの横棒からなる階段状で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は背のたかい異性で1～5細胞幅、不完全な鞘細胞をもつ。

35. エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図13: 37a～37c (枝・幹材, SHIM-427)

小型～ごく小型でまるい管孔が単独あるいは放射方向に2～4個複合して均一に散在する散孔材、管孔の径は年輪内で徐々に減少し、年輪の終わりでは木繊維と同じくらいとなる。木部柔組織は晩材で接線状。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で1～2細胞幅。

36. トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 図13: 38a～38c (枝・幹材, SHIM-486)

大型でまるい管孔が年輪のはじめに2～3列配列し、晩材ではやや急に径を減じた厚壁の小管孔が単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する環孔材。木部柔組織は早材で周囲状、晩材で翼状～連合翼状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で2～3細胞幅。

37. イボタノキ属 *Ligustrum* モクセイ科 図13: 39a～39c (枝・幹材, SHIM-360)

小型でやや角張った管孔が単独あるいは放射方向に2～3個複合して、年輪内で徐々に径を減じながら均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1～3細胞が直立する異性で1～2細胞幅。

38. ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara スイカズラ科 図14: 40a～40c (枝・幹材, SHIM-361)

小型で薄壁の管孔が単独あるいは2～3個複合して斜め～接線方向に断続的につらなる散孔材。年輪の終わりでは小管孔が帯状につらなる。道管の穿孔は単一。放射組織はふつう上下端の1細胞が直立する異性で1～5細胞幅、明瞭な鞘細胞をもつ。

39. 根材 rootwood 図14: 41a～41c (SHIM-342)

大型で厚壁のまるい管孔が単独あるいは放射方向に2～3個複合して密に散在する散孔材。木部

柔組織は周囲状。道管の穿孔は單一。放射組織は上下端の1-3細胞が直立する異性で1-4細胞幅。

以上の形質よりクロウメモドキ科の根材である可能性が高いと考えられるが、保存状態がわるく道管の配列を確認できること、および現生の対照標本がないことより、同定には至らなかった。

総数217点の木材中には幹あるいは枝の材だけでなく、根材や根株の材も含まれており、39の分類群が見いだされた（表1）。このうち点数がある程度まとまっていたのは4b層および4a層の自然木である。4b層は縄文時代前期～晩期前半という広い時代幅をもっており、縄文時代中期後半～晩期前半とされる4a層と明瞭に区別されるもののかは不明である。根材や根株材の出土はふつう現地に樹木が生育していた可能性を示唆するが、いずれの層準とも海成層であって、根材や根株材は一旦、別の場所で掘り出されたあと流されてきて堆積したものと思われる。分類群中ではモミ属、アカガシ亜属、ムクノキ、エノキ属、センダン、カエデ属、トチノキが比較的多いが、点数の多い4b層でもいずれも10%以下であって優占種は認められない。この点は第1次、第3次調査で見いだされたモミ属、クヌギ節、コナラ節の優先した化石群とは対照的である（能城、1998）。こうした優占種の欠如なども、対象とした化石群が現地性の群集というよりは異地性のものであって、堆積するまでにいくつかの群集組成が混合してしまったことを示唆してと考えられる。

引用文献

能城修一、1998、島根大学構内遺跡第1次調査（橋繩手地区）・第3次調査（深町地区）出土木材の樹種、島根大学埋蔵文化財調査研究センター編「島根大学構内遺跡第3次調査（深町地区1）」、64-85。

表4 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の樹種

樹種名	周辺												不明	合計		
	4c 自然木			4b 板 円材 削材 角材 加工材			4a 板 削材 角材 棒材			3 自然木						
	S	S	SR	R	S	SR	R	S	SR	R	S	SR	R			
1 カヤ	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3		
2 モミ属	-	8	1	1	-	-	-	-	-	1	1	1	-	12		
5 マツ属複数管束亞属	1	2	-	1	-	-	1	1	-	1	-	-	-	8		
7 オニグルミ	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2		
8 クマシデ属イヌシデ節	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3		
10 クリ	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
11 スダジイ	-	3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	5		
12 コナラ属アカガシ亜属	-	8	3	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	14		
15 ムクノキ	-	6	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	9		
17 エノキ属	-	6	-	-	-	-	-	5	-	1	-	-	-	12		
19 ニレ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
20 ケヤキ	-	2	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	5		
23 ヤマグワ	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3		
24 タブノキ	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	3		
25 クロモジ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1		
26 シバキ属	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	5		
27 ヒサカキ	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2		
29 サクラ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3		
30 ネムノキ	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3		
31 フジ属	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	3		
32 アカメガシワ	-	2	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	4		
33 センダン	-	9	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	12		
35 ヌルデ	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
36 チドリノキ	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
37 カエデ属	-	11	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	13		
39 ムクロジ	-	5	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	7		
41 トチノキ	-	10	1	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	15		
44 ヨコグラノキ	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2		
45 グミ属	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1		
46 クマノミズキ類	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
47 キヅタ	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
48 タラノキ	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
49 シャシャンボ	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
50 エゴノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
51 トネリコ属	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2		
52 イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1		
53 ニワトコ	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1		
54 樹材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
55 固定不能 (SR不明)	-	35	-	1	1	-	1	5	-	-	-	1	2	-	7	53
合計	1	135	12	3	3	2	1	1	6	32	1	5	1	2	2	217

S:枝・幹材、SR:根株材、R:根材

表5 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材一覧

SHIM-No.	Photo	樹種名	SR	品目名	製品備考	Grid	採集日	累計層序	時代	次数／地区
SHIM-324	X	欠番								-
SHIM-325	X	欠番								-
SHIM-326	X	欠番								-
SHIM-327	X	欠番								-
SHIM-328	X	欠番								-
SHIM-329	X	欠番								-
SHIM-330	X	欠番								-
SHIM-331	ツバキ属	S	自然木	C3	861106 3	第3層	縄文後期	5次 (京田)		
SHIM-332 #	ダズンイ	S	自然木	G3	861121 3	第3層	縄文後期	5次 (京田)		
SHIM-333	トチノキ	S	自然木	北西部	861031 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-334	セイダン	S	自然木	B4	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-335	エノキ属	S	自然木	C2	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-336	センダン	S	自然木	C3	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-337	エノキ属	R	自然木	C4	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-338	トチノキ	S	自然木	C4	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-339	タブノキ	S	自然木	C4	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-340	ツバキ属	S	自然木	C4	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-341	ムクノキ	S	自然木	D2	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-342 #	根材	R	自然木	D3	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-343 #	マツ属根茎葉束亞属	R	自然木	D3	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-344	ヤヤコ	R	自然木	D3	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-345	エノキ属	S	自然木	D3	861106 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-346	タブノキ	S	自然木	D11	861212 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-347	ツバキ属	S	自然木	D9	861212 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-348	アカマツガシワ	S	自然木	E5	861121 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-349 #	ムクノキ	S	自然木	E7	861122 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-350 #	ムクニ属	S	自然木	E7	861122 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-351	トチノキ	S	自然木	E8	861121 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-352	エノキ属	S	自然木	F2	861018 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-353	エノキ属	R	自然木	F3	861018 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-354	アクロジ	S	自然木	F6	861121 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-355 #	ヤヤコ	S	自然木	F10	861122 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-356 #	ヒザカキ	S	自然木	F11	861121 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-357	トチノキ	S	自然木	G2	861018 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-358 #	クマシデ属イヌシテ節	S	自然木	G3	861018 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-359	マツ属根茎葉束亞属	S	自然木	北西部	861051 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-360 #	イボタノキ属	S	自然木	A9	861212 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-361 #	ニホンコトニー	S	自然木	B9	861212 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-362 #	コナラ属アカガシ亞属	S	自然木	E5	861125 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-363	サクラ属	S	自然木	E5	861125 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-364 #	ブナ属	S	自然木	E5	861125 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-365	アカマツガシワ	S	自然木	E5	861125 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-366	カエデ属	S	自然木	E9	861125 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-367	スダジイ	S	自然木	F5	861125 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-368 #	ヤマグワ	S	自然木	G9	861122 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-369	エノキ属	S	自然木	G10	861122 4a	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-370	ヤマグワ	S	自然木	A2	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-371	エノキ属	S	自然木	A2	861108 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-372 #	ゼンダン	S	自然木	A3	861108 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-373	クマシデ属イヌシテ節	SR	自然木	A3	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-374	ムクニ属	S	自然木	A9	861217 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-375	コナラ属アカガシ亞属	S	自然木	A9	861217 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-376	アクロジ	S	自然木	A9	861217 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-377	X	S	自然木	B2	861108 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-378	ココラ属アカガシ亞属	S	自然木	B2	861108 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-379 #	ムクノキ	S	自然木	B2	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-380 #	カヤ	S	自然木	B3	861106 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-381 #	カエデ属	S	自然木	B3	861106 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-382	X	S	自然木	B3	861106 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-383 #	アクロジ	S	自然木	B3	861108 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-384 #	ギツヅラ	S	自然木	B3	861108 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-385 #	タラノキ	S	自然木	B3	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-386	X	S	自然木	B3	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-387	サルノコシカケ	S	自然木	B3	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-388 #	コナラ属アカガシ亞属	S	自然木	B3	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-389	X	S	自然木	B3	861113 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-390	コナラ属アカガシ亞属	R	自然木	B4	861108 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-391	X	S	自然木	B4	861112 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-392	カエデ属	S	自然木	B8	861217 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-393	X	S	自然木	B8	861217 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-394	X	S	自然木	B8	861217 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-395	X	S	自然木	B9	861213 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-396	X	S	自然木	B9	861216 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-397	X	S	自然木	B9	861220 4b	第4層	縄文中期後半～晚原前半	5次 (京田)		
SHIM-398	スダジイ	S	自然木	B9	861224 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		
SHIM-399 #	トチノキ	S	自然木	B9	861220 4b	第4層	縄文前～中期後半	5次 (京田)		

SHIM- 400	コナラ属アカガシ亜属	S	自然木	B 10	961216 4b	第45層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 401 *	ゼンダン	S	自然木	B 10	961220 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 402	トネリコ属	S	自然木	B 10	961224 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 403	カエデ属	S	自然木	C 2	961106 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 404	X		自然木	C 2	961108 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 405	ネムノキ	S	自然木	C 2	961113 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 406	ムクロジ	S	自然木	C 3	961106 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 407	センダン	SR	自然木	C 3	961106 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 408 **	クマシテ属イヌシテ節	S	自然木	C 3	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 409	スダジイ	S	自然木	C 3	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 410	X		自然木	C 3	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 411	コナラ属アカガシ亜属	SR	自然木	C 1	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 412	X		自然木	C 1	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 413	モミ属	S	自然木	C 1	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 414	エノキ属	S	自然木	C 1	961113 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 415	X		自然木	C 4	961106 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 416	フジ属	S	自然木	C 4	961108 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 417	カエデ属	S	自然木	C 4	961108 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 418	X		自然木	C 4	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 419	ケヤキ	S	自然木	C 5	970130 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 420	コナラ属アカガシ亜属	R	自然木	C 5	970130 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 421 *	トチノキ	S	自然木	C 5	961213 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 422	トチノキ	S	自然木	C 8	961213 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 423	ムクロジ	S	自然木	C 8	961216 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 424	X		自然木	C 8	961220 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 425 *	ツバキ属	S	自然木	C 8	961224 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 426 *	サクラ属	S	自然木	C 9	961226 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 427 *	エゴノキ属	S	自然木	C 9	961226 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 428	ツバキ属	S	自然木	C 9	961226 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 429	トチノキ	S	自然木	C 9	961224 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 430	エノキ属	S	自然木	C 9	961224 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 431	X		自然木	C 9	961224 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 432	モミ属	S	自然木	C 10	961216 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 433 *	ムクノキ	S	自然木	D 3	961112 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 434 *	X		自然木	D 3	961113 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 435	X		自然木	D 4	961108 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 436 *	ムクノキ	S	自然木	D 5	970130 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 437	トチノキ	SR	自然木	D 7	961217 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 438	センダン	S	自然木	D 7	961216 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 439 *	モミ属	R	自然木	D 8	961224 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 440 *	シャンシャンボ	S	自然木	D 10	961213 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 441	X		自然木	D 11	961217 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 442 **	ゼンダン	S	自然木	E 2	961022 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 443 *	クロモジ属	S	自然木	E 2	961023 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 444	カエデ属	S	自然木	E 2	961024 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 445	トチノキ	S	自然木	E 3	961023 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 446 *	エノキ属	S	自然木	E 3	961024 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 447	センダン	S	自然木	E 4	961024 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 448	カエデ属	SR	自然木	E 4	961025 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 449	マツ属	SR	自然木	F 5	961128 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 450 *	タブノキ	S	自然木	E 5	961127 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 451	トチノキ	S	自然木	E 5	961127 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 452	カエデ属	S	自然木	E 5	961203 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 453 ***	オニグルミ	S	自然木	E 7	961203 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 454 **	ヨコグラノキ	S	自然木	E 7	961203 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 455	X		自然木	E 7	961203 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 456 **	コナラ属アカガシ亜属	S	自然木	E 8	961204 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 457	アカメガシ属	S	自然木	E 8	961227 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 458	カエデ属	S	自然木	E 8	961227 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 459 *	クリ	S	自然木	E 8	961227 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 460 *	チドリノキ	S	自然木	E 9	961227 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 461	ケヤキ	SR	自然木	E 10	961128 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 462	コナラ属アカガシ亜属	S	自然木	E 10	961128 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 463	エノキ属	S	自然木	E 10	961128 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 464	X		自然木	E 10	961224 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 465	ネムノキ	S	自然木	E 10	970131 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 466	エノキ属	S	自然木	E 10	970131 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 467	ムクロジ	SR	自然木	F 2	961023 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 468 ***	カヤ	S	自然木	F 2	961023 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 469 **	モミ属	S	自然木	F 3	961022 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 470	カエデ属	S	自然木	F 3	961022 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 471	モミ属	S	自然木	F 3	961022 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 472	トチノキ	S	自然木	F 3	961023 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 473	ムクロギ	SR	自然木	F 3	961220 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 474	X		自然木	F 3	961022 4b	第46層	雑文中期後半～中期後半 5次 (京田)
SHIM- 475	ムクロギ	S	自然木	F 4	961022 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)
SHIM- 476	センダン	S	自然木	F 4	961022 4b	第46層	雑文中期後半～晚期前半 5次 (京田)

SHIM-477	×		自然木	F 5	961125 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-478 **	トチノキ	S	自然木	F 5	961125 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-479	×		自然木	F 5	961127 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-480	ムクノキ	S	自然木	F 5	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-481 *	オニグルミ	S	自然木	F 5	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-482	カエデ属	S	自然木	F 6	961127 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-483	ムクノキ	S	自然木 刀削目	F 6	961127 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-484	×		自然木	F 6	961127 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-485	カエデ属	S	自然木 カライシ	F 6	961127 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-486 *	トネリコ属	S	自然木	F 6	961127 4b	第45層	縄文中期後半	5次(京田)
SHIM-487 *	モミ属	S	自然木	F 6	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-488	×		自然木	F 6	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-489	スダジイ	S	自然木	F 7	961126 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-490	モミ属	S	自然木	F 7	961125 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-491 *	タムノキ	S	自然木	F 7	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-492	コナラ属アカガシ亞属	S	自然木 刀削目	F 8	961125 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-493	トチノキ	S	自然木	F 8	961126 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-494 *	アカメガシワ	S	自然木	F 8	961126 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-495	ムクロジ	S	自然木	F 8	961126 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-496	×		自然木	F 8	961126 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-497	×		自然木	F 8	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-498 *	クマノミズキ類	S	自然木	F 8	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-499 *	モミ属	S	自然木	F 9	961125 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-500 *	グミ属	S	自然木	F 9	961126 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-501	×		自然木 刀削目	F 10	961125 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-502 *	カヤ	S	自然木	F 10	961125 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-503	×		自然木	F 10	961203 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-504	ブジ属	S	自然木	G 2	961022 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-505	×		自然木	G 4	961023 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-506	コナラ属アカガシ亞属	SR	自然木	G 5	961128 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-507	センダン	S	自然木	G 6	961128 4b	第45層	縄文前～中期後半	5次(京田)
SHIM-508	マツ属複葉交疊属	S	自然木	E 8	961127 4b	第45層	縄文前	5次(京田)
SHIM-509	コナラ属アカガシ亞属	S	自然木	E 5	961127 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-510	×		棒材	D 3	961106 4a	第44層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-511	×		棒材	C 3	961107 4a	第44層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-512	モミ属	S	角材	E 3	961018 4a	第44層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-513	モミ属	S	角材	E 9	961122 4a	第44層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-514	×		加工材	G 3	961022 4b	第45層	縄文中期後半	5次(京田)
SHIM-515	×		加工材	G 4	961023 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-516	モミ属	S	角材	E 7	961022 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	5次(京田)
SHIM-517 *	モッコク	SR	自然木	M 2	961005 4a	第44層	縄文中期後半～晚期前半	5次(諸田)
SHIM-518	カエデ属	S	自然木	J 1	961007 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-519	トチノキ	S	自然木	J 1	961007 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-520	×		自然木	J 1	961007 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-521	モミ属	S	自然木	K 1	961007 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-522	モミ属	S	自然木	M 1	961007 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-523	センダン	S	自然木	O 1~2	961122 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-524	センダン	S	自然木	P 1	961023 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-525	モッコク	SR	自然木	Q 1	961022 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-526	マツ属複葉交疊属	S	自然木	Q 2	961007 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-527	ケヤキ	S	自然木	S 1	960930 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-528	コナラ属アカガシ亞属	SR	自然木	T 2	961008 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-529	マツ属複葉交疊属	S	板材	O 1	960930 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	9次(諸田)
SHIM-530	モミ属	S	板材	Q 1~2	960930 4b	第45層	縄文中期後半～晚期前半	9次(諸田)
SHIM-531	モミ属	S	板材	K 2	961020 4a	第45層	縄文中期後半～晚期前半	9次(諸田)
SHIM-532	×		加工材	G 1	961023 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-533	ヤマグサ	S	板材	J 1	961005 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-534	マツ属複葉交疊属	S	加工材	O 2	961014 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-535	×		加工材	O 1	961027 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-536	×		加工材	C 1	961023 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-537 *	マツ属複葉交疊属	S	板材	G 2	961028 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-538 *	ヌルデ	S	円材	P 2	961014 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-539 *	ニレ属	S	板材	Q 1~2	961014 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)
SHIM-540	×		円材	P 1	961022 4b	第45層	縄文前～中期後半	9次(諸田)

表 6 島根大學構内遺跡第5・9次調査出土木材の写真リスト

1. カヤ 桟・幹材 <i>Torreya nudiflora</i> (L.) Sieb. et Zucc.	イチイ科	2 : 1a-1c (枝・幹材, SHIN-668)
2. モミ属 桟・幹材 <i>Abies</i> マツ科		2 : 1 : 1a-2c (枝・幹材, SHIN-439)
3. モミ属 桟・幹材 <i>Abies</i> マツ科		2 : 1 : 3a-3c (枝・幹材, SHIN-537)
4. マツ属 桟・幹材 <i>Pinus subae</i> , <i>Pinus sylvestris</i> , マツ科		2 : 2 : 4a-4c (枝・幹材, SHIN-143)
5. マツ属 桟・幹材 <i>Pinus subae</i> , <i>Pinus sylvestris</i> , マツ科		2 : 2 : 5a-5c (枝・幹材, SHIN-143)
6. オニシクルミ 桟・幹材 <i>Juglans mandshurica</i> Maxim. var. <i>sachalinensis</i> (Wuyts et Kudo) Kitam.	クルミ科	2 : 2 : 6a-6c (枝・幹材, SHIN-151)
7. オニシクルミ 桟・幹材 <i>Juglans mandshurica</i> Maxim. var. <i>sachalinensis</i> (Wuyts et Kudo) Kitam.	クルミ科	2 : 3 : 1a-7c (枝・幹材, SHIN-408)
8. クリサイ 桟・幹材 <i>Eucarpinus carpos</i> Sieb. et Zucc.	アブロホメ科	2 : 3 : 8a-8c (枝・幹材, SHIN-155)
9. クリサイ 桟・幹材 <i>Castanopsis crenata</i> (Makino) Hayata ex Yamazaki et Masthida	ブナ科	2 : 3 : 9a-9c (枝・幹材, SHIN-332)
10. コナラ属カガシ属 桟・幹材 <i>Castanopsis crenata</i> (Makino) Hayata ex Yamazaki et Masthida	ブナ科	2 : 4 : 10a-10c (枝・幹材, SHIN-456)
11. ムクノキ 桟・幹材 <i>Abies koreana</i> (Thunb.) Planch.	二列科	2 : 4 : 11a-11c (枝・幹材, SHIN-349)
12. ムクノキ 桟・幹材 <i>Cellistis</i> 二列科		2 : 4 : 12a-12c (枝・幹材, SHIN-446)
13. ニニニ属 桟・幹材 <i>Ulmus</i> 二列科		2 : 5 : 1a-13c (枝・幹材, SHIN-539)
14. イノコヅチ 桟・幹材 <i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino	ニレ科	2 : 5 : 14a-14c (枝・幹材, SHIN-365)
15. ダクワキ 桟・幹材 <i>Mitchella alata</i> (Burm.) Oliv.	クワ科	2 : 5 : 15a-15c (枝・幹材, SHIN-368)
16. ダクワキ 桟・幹材 <i>Mitchella thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	クヌキ科	2 : 6 : 16a-16c (枝・幹材, SHIN-450)
17. クロモジ属 桟・幹材 <i>Lindera</i> クヌキ科		2 : 6 : 17a-17c (枝・幹材, SHIN-442)
18. ツバキ属 桟・幹材 <i>Camellia</i> ツバキ科		2 : 6 : 18a-18c (枝・幹材, SHIN-425)
19. ヒサカツ 桟・幹材 <i>Eurya japonica</i> Thunb.	ツバキ科	2 : 7 : 19a-19c (枝・幹材, SHIN-356)
20. ソクカラ属 桟・幹材 <i>Termitomyces gynnantha</i> (Bright et Arn.) Beddome	ツバキ科	2 : 7 : 20a-20c (枝・幹材, SHIN-517)
21. ソクカラ属 桟・幹材 <i>Prunus</i> バイ科		2 : 7 : 21a-21c (枝・幹材, SHIN-426)
22. ネムノキ 桟・幹材 <i>Ailanthus</i> イヌマキ		2 : 8 : 22a-22c (枝・幹材, SHIN-491)
23. フジ属 桟・幹材 <i>Wistaria</i> マメ科		2 : 8 : 23a-23c (枝・幹材, SHIN-364)
24. アカマツ属 桟・幹材 <i>Matotius japonicus</i> (Thunb.) Muell. Arg.	トウダンダクサ科	2 : 8 : 24a-24c (枝・幹材, SHIN-494)
25. センダン属 桟・幹材 <i>Melia azederach</i> L. var. <i>subcordata</i> Miq.	ウルシ科	2 : 9 : 25a-25c (枝・幹材, SHIN-442)
26. センダン 桟・幹材 <i>Melia azederach</i> L. var. <i>rossburghii</i> (DC.) Rehd.	ウルシ科	2 : 9 : 26a-26c (枝・幹材, SHIN-538)
27. チドリノキ 桟・幹材 <i>Prunus</i> バイ科		2 : 10 : 27a-27c (枝・幹材, SHIN-460)
28. カエデ属 桟・幹材 <i>Acer</i> カエデ科		2 : 10 : 28a-28c (枝・幹材, SHIN-381)
29. ムクロジ属 桟・幹材 <i>Sapindus mukorossi</i> Garcin.	ムクロジ科	2 : 10 : 29a-29c (枝・幹材, SHIN-383)
30. ドチノキ 桟・幹材 <i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ科	2 : 10 : 30a-30c (枝・幹材, SHIN-478)
31. ヨコグロノキ 桟・幹材 <i>Elaeagnus</i> グミ科		2 : 11 : 31a-31c (枝・幹材, SHIN-454)
32. クマミ属 桟・幹材 <i>Swida</i> cf. <i>macrophylla</i> (Wall.) Soják	ミズキ科	2 : 11 : 32a-32c (枝・幹材, SHIN-359)
33. クマミ属 桟・幹材 <i>Swida</i> cf. <i>macrophylla</i> (Wall.) Soják	ミズキ科	2 : 11 : 33a-33c (枝・幹材, SHIN-498)
34. タラノキ 桟・幹材 <i>Quercus</i> ウコ科		2 : 11 : 34a-34c (枝・幹材, SHIN-384)
35. タラノキ 桟・幹材 <i>Aralia elata</i> (Miq.) Seemann	ウコギ科	2 : 12 : 35a-35c (枝・幹材, SHIN-385)
36. シャンノン木 桟・幹材 <i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	ツツジ科	2 : 12 : 36a-36c (枝・幹材, SHIN-440)
37. エゴノキ属 桟・幹材 <i>Styrax</i> エゴノキ科		2 : 12 : 37a-37c (枝・幹材, SHIN-427)
38. トネリコ属 桟・幹材 <i>Fraxinus</i> モクセイ科		2 : 13 : 38a-38c (枝・幹材, SHIN-486)
39. イボタノキ属 桟・幹材 <i>Ligustrum</i> モクセイ科		2 : 13 : 39a-39c (枝・幹材, SHIN-380)
40. リココ属 桟・幹材 <i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. <i>sieboldiana</i> (Miq.) Hara	スイカラズ科	2 : 14 : 40a-40c (枝・幹材, SHIN-361)
41. 横材 (not wood)		2 : 14 : 41a-41c (枝・幹材, SHIN-342)

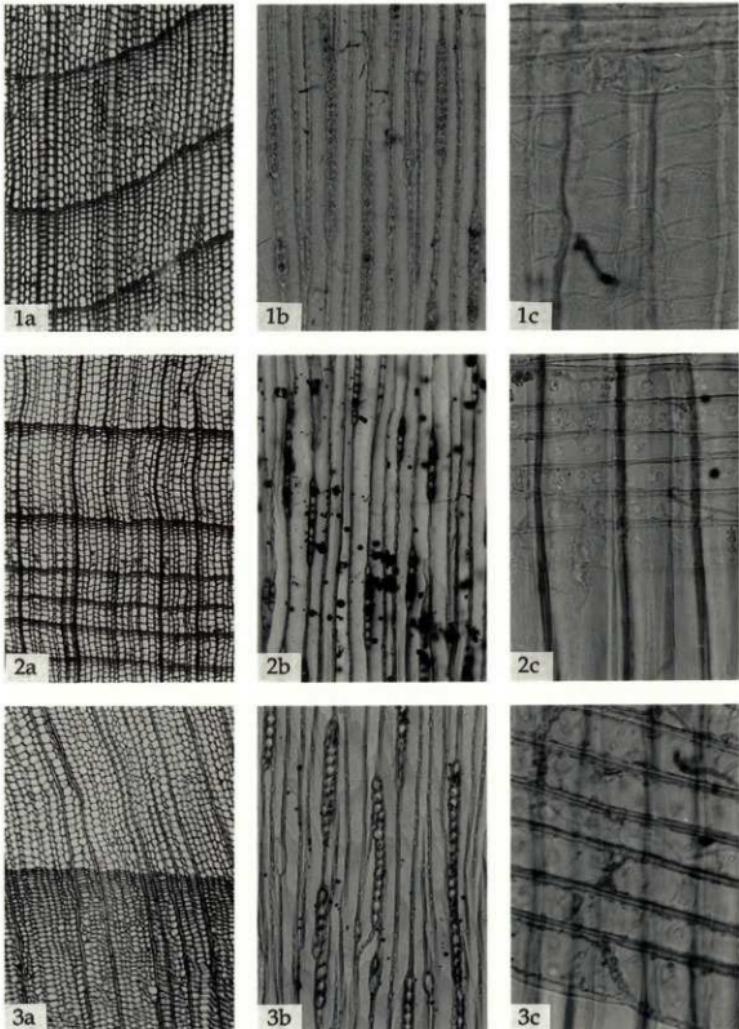


図1. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(1)

1 a - 1 c : カヤ 枝・幹材 (SHIM-468), 2 a - 2 c : モミ属 枝・幹材 (SHIM-469),
3 a - 3 c : モミ属 根材 (SHIM-439). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×400.

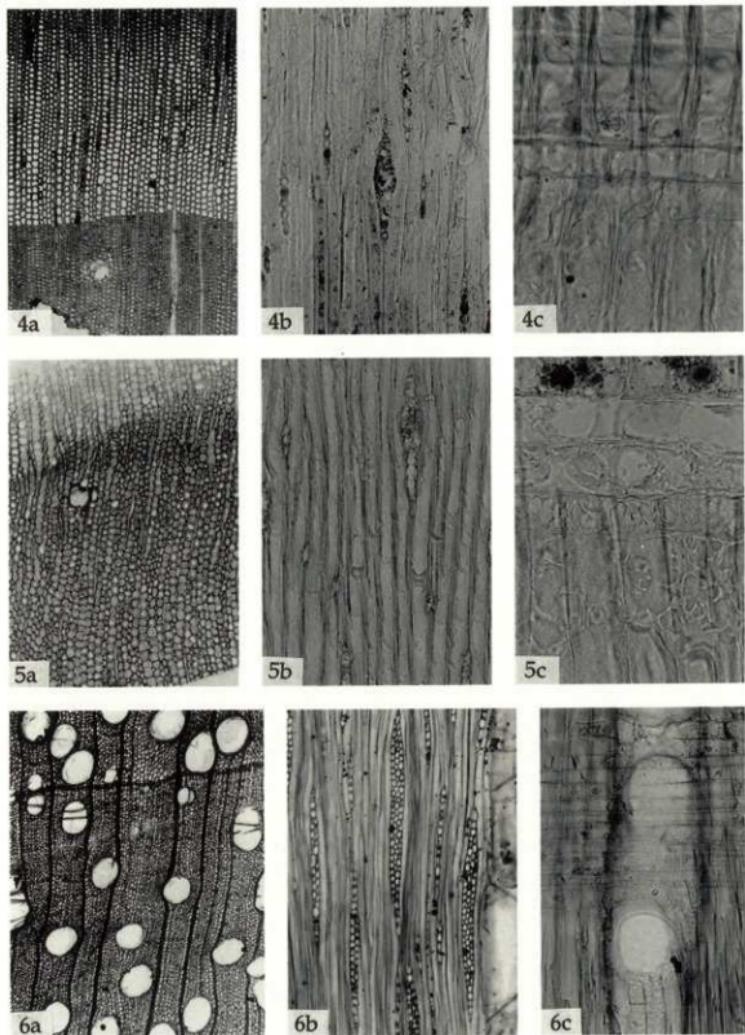


図2. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(2)

4 a - 4 c : マツ属複維管束亞属 枝・幹材 (SHIM-537), 5 a - 5 c : マツ属複維管束亞属
根材 (SHIM-343), 6 a - 6 c : オニグルミ 枝・幹材 (SHIM-453). a : 横断面×40,
b : 接線断面×100, c : 放射断面×400 (4 c, 5 c), ×200 (6 c).

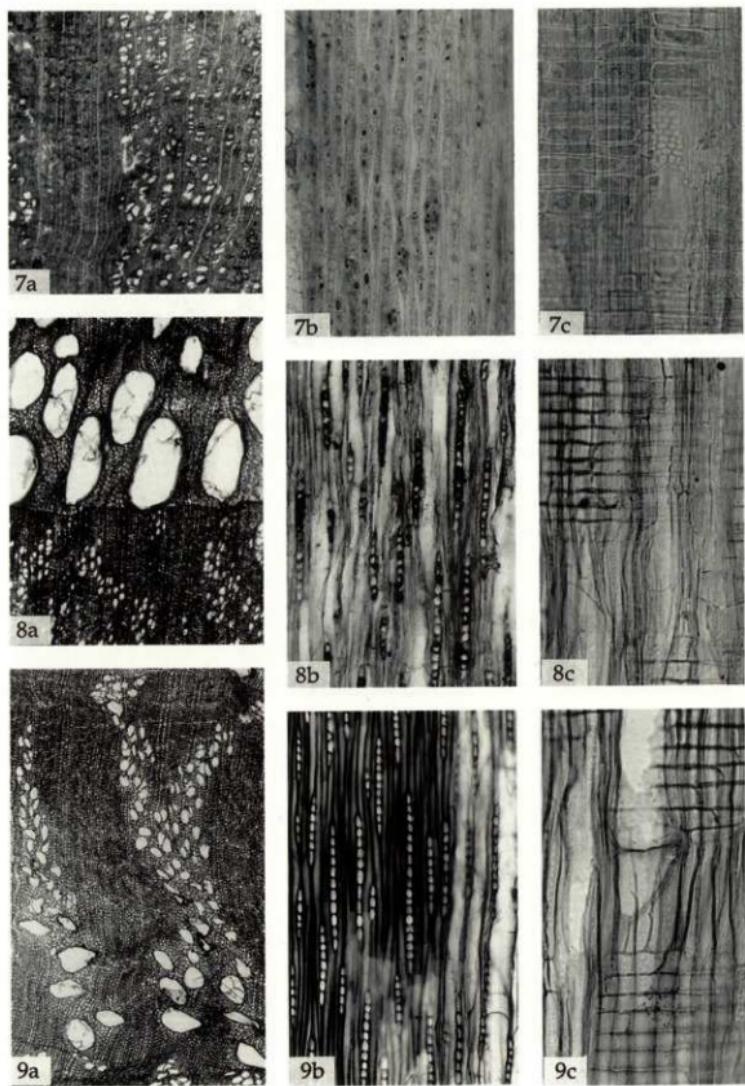


図3. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(3)

7 a - 7 c : クマシテ属イヌシテ節 枝・幹材 (SHIM-408), 8 a - 8 c : クリ 枝・幹材 (SHIM-459),
9 a - 9 c : スダジイ 枝・幹材 (SHIM-332). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

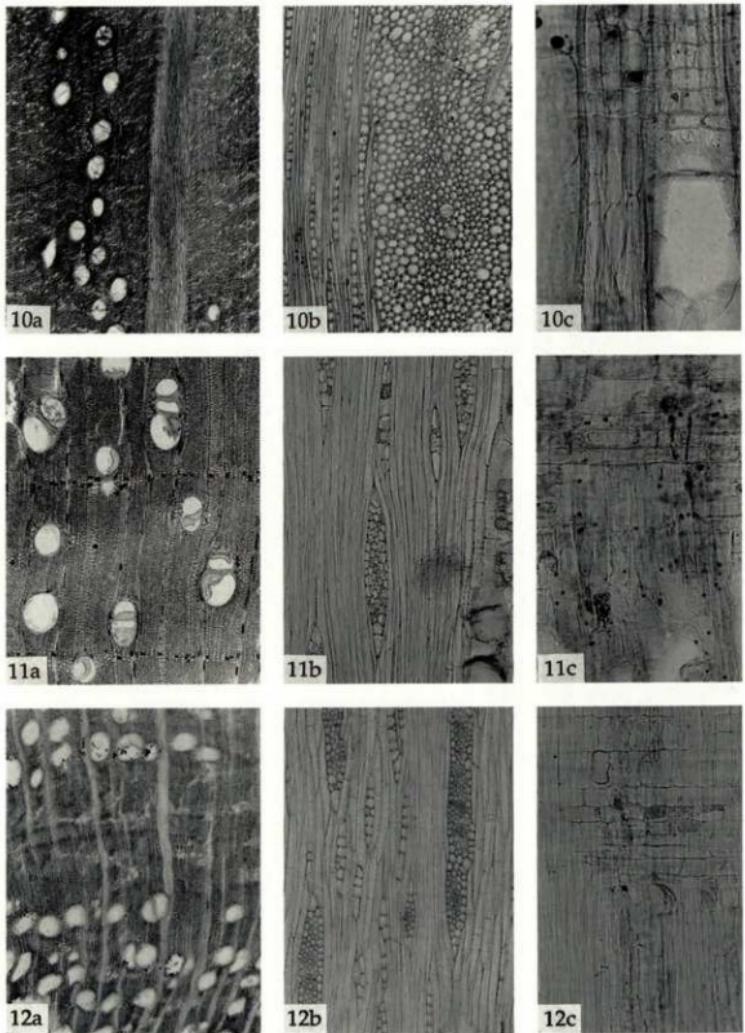


図4. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(4)

10a-10c:コナラ属アカガシ亜属 枝・幹材 (SHIM-456), 11a-11c:ムクノキ 枝・幹材 (SHIM-349),
12a-12c:エノキ属 枝・幹材 (SHIM-446). a:横断面×40, b:接線断面×100, c:放射断面×200.

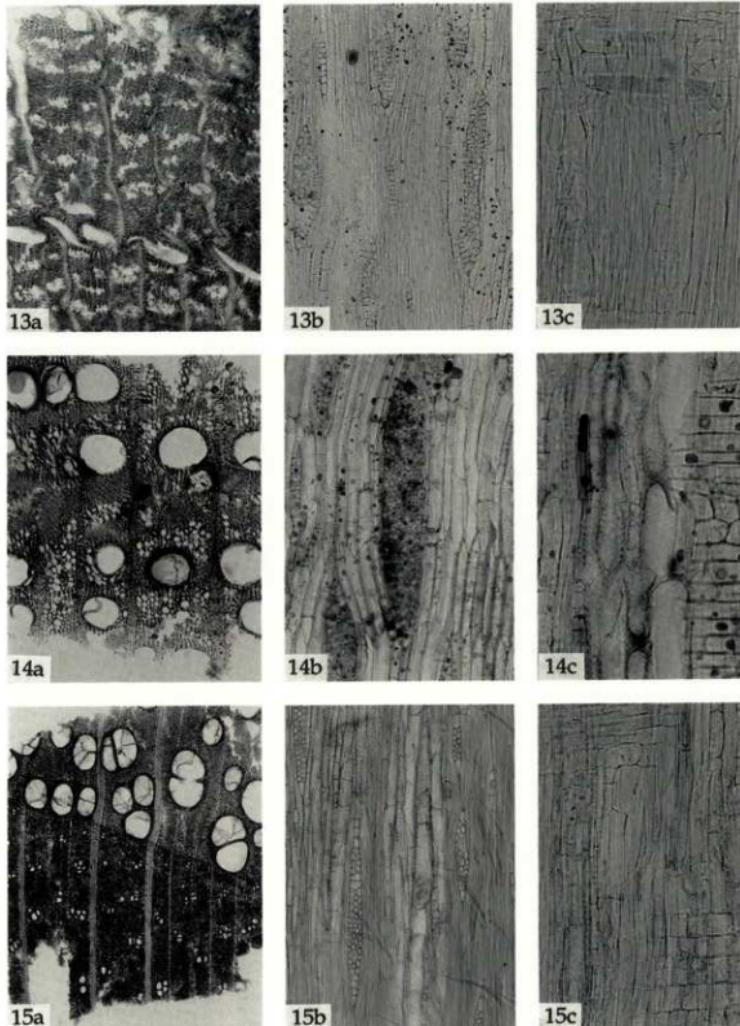


図5. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(5)

13a-13c:ニレ属 枝・幹材 (SHIM-539), 14a-14c:ケヤキ 枝・幹材 (SHIM-355),
15a-15c:ヤマグワ 枝・幹材 (SHIM-368). a:横断面×40, b:接線断面×100, c:放射断面×200.

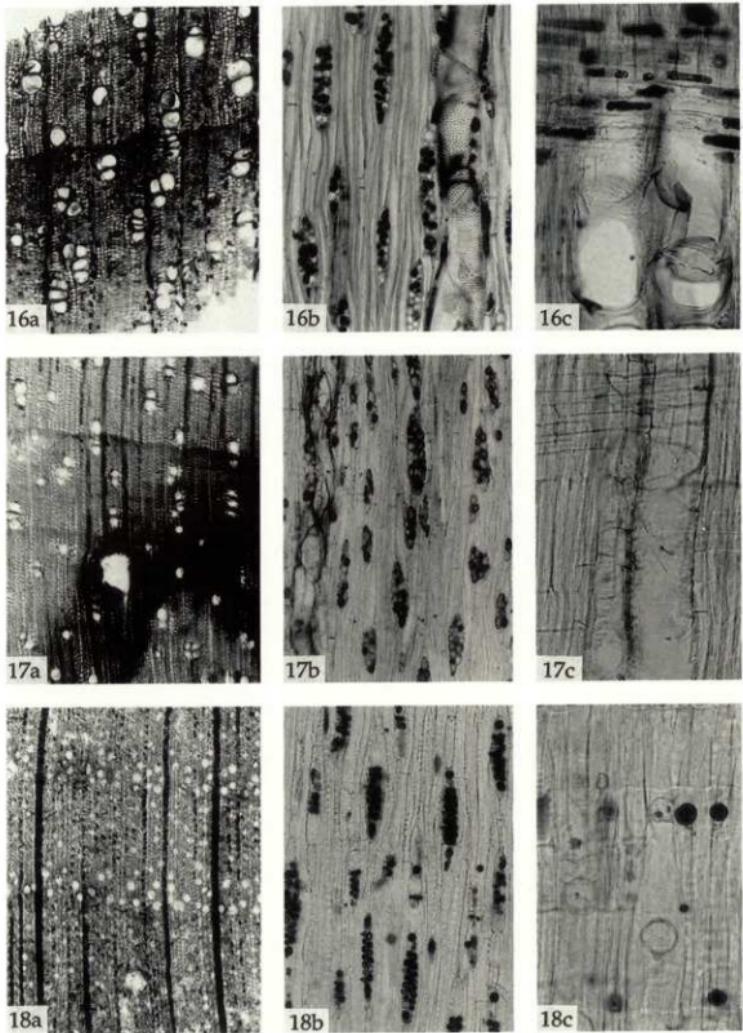


図6. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(6)

16a-16c : タブノキ 枝・幹材 (SHIM-450), 17a-17c : クロモジ属 枝・幹材 (SHIM-443),
18a-18c : ツバキ属 枝・幹材 (SHIM-425). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

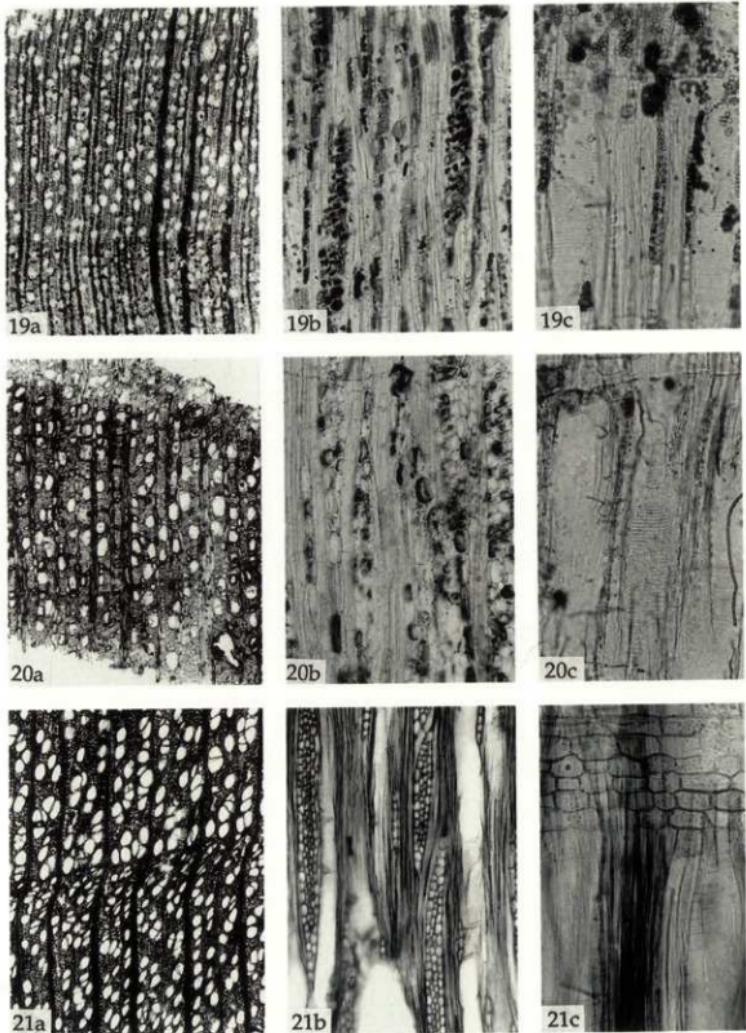
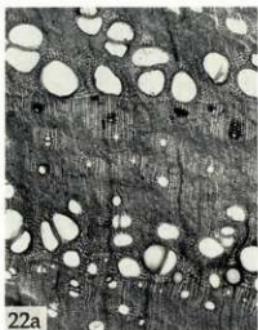


図7. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(7)

19a-19c : ヒサカキ 枝・幹材 (SHIM-356), 20a-20c : モッコク 根株材 (SHIM-517),
21a-21c : サクラ属 枝・幹材 (SHIM-426). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.



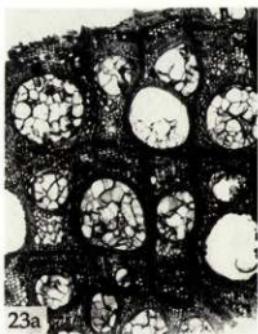
22a



22b



22c



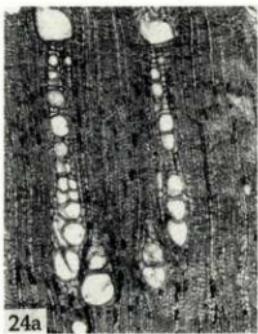
23a



23b



23c



24a



24b



24c

図8. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真(8)

22a-22c : ネムノキ 枝・幹材 (SHIM-491), 23a-23c : フジ属 枝・幹材 (SHIM-364),

24a-24c : アカメガシワ 枝・幹材 (SHIM-494). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

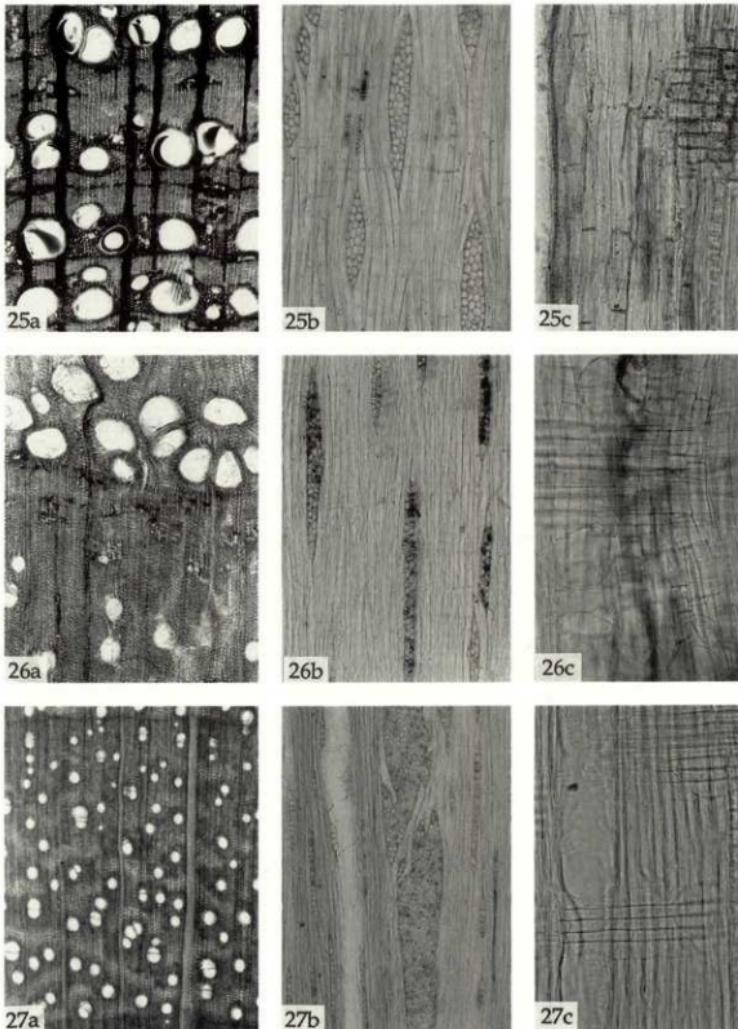


図9. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真 (9)

25a-25c : センダン 枝・幹材 (SHIM-442), 26a-26c : ヌルデ 枝・幹材 (SHIM-538),
27a-27c : チドリノキ 枝・幹材 (SHIM-460). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×400
(4c, 5c), ×200 (6c).

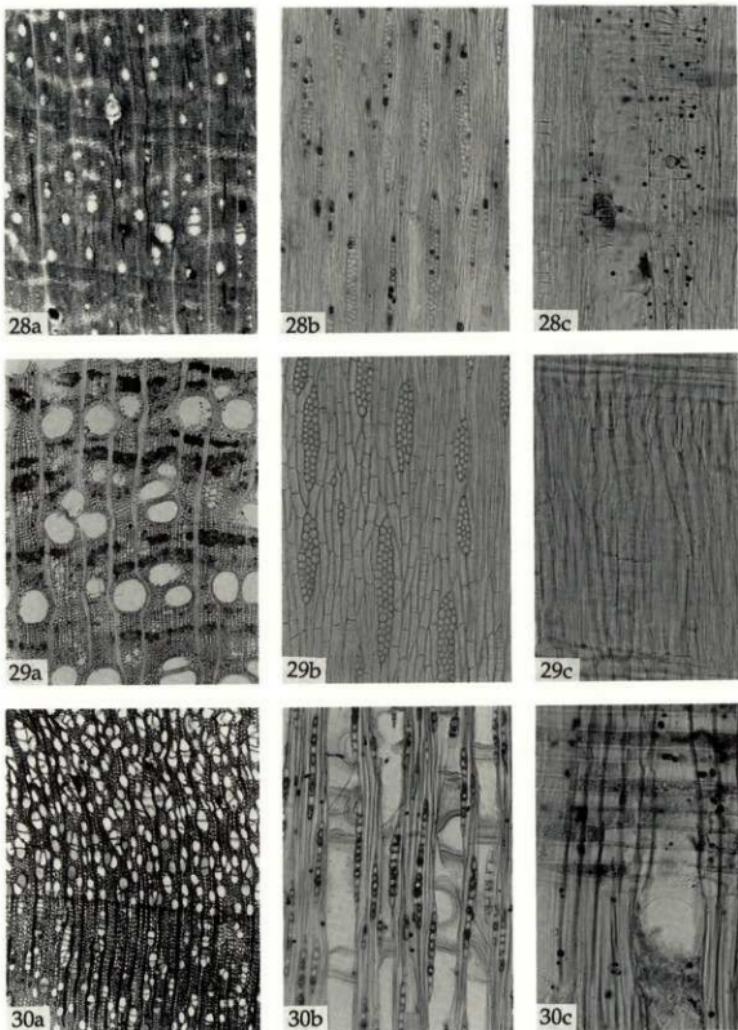


図10. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真 (1)

28 a - 28 c : カエデ属 枝・幹材 (SHIM-381), 29 a - 29 c : ムクロジ 枝・幹材 (SHIM-383),
30 a - 30 c : トチノキ 枝・幹材 (SHIM-478). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

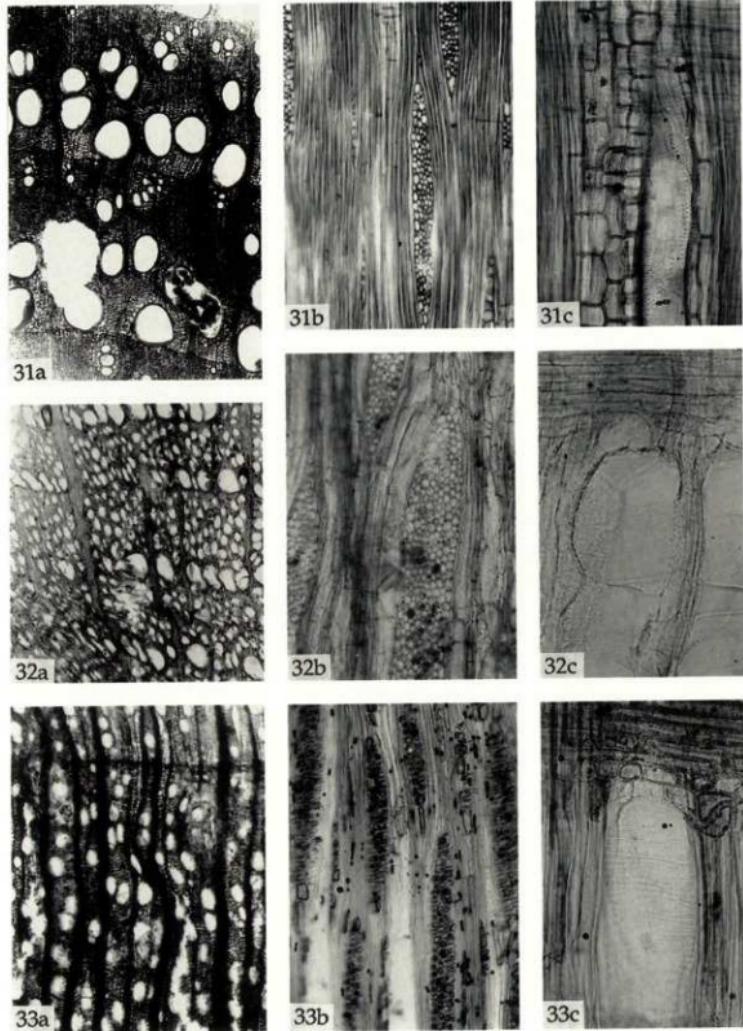


図11. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真 (1)

31a-31c : ヨコグラノキ 枝・幹材 (SHIM-454), 32a-32c : グミ属 枝・幹材 (SHIM-350),
33a-33c : クマノミズキ類 枝・幹材 (SHIM-498). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面
×200.

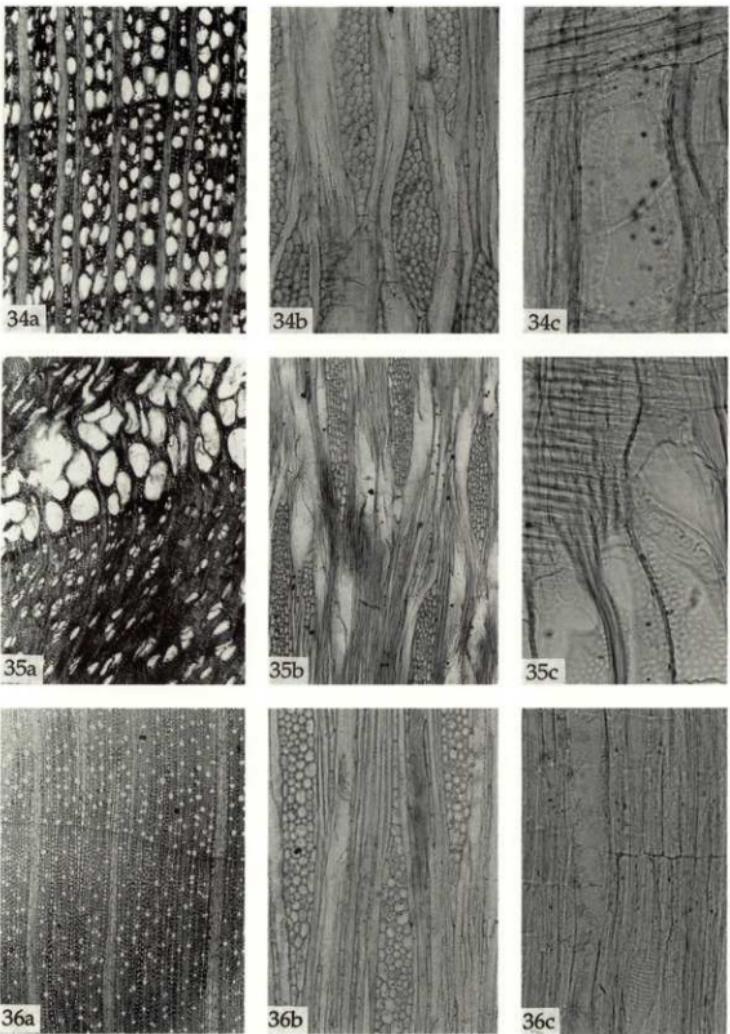


図12. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真 (12)

34 a-34 c : キヅタ 枝・幹材 (SHIM-384), 35 a-35 c : タラノキ 枝・幹材 (SHIM-385),

36 a-36 c : シャシャンボ 枝・幹材 (SHIM-440). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.



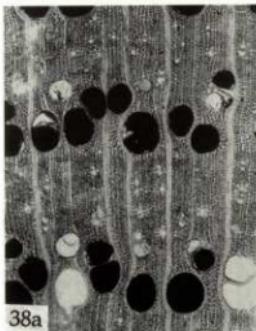
37a



37b



37c



38a



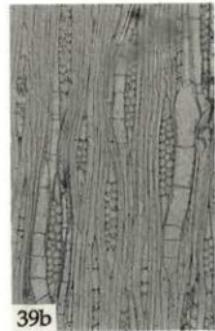
38b



38c



39a



39b



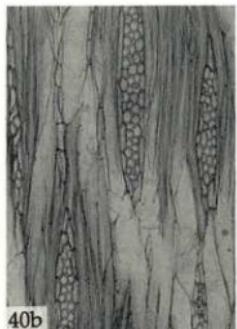
39c

図13. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真 (3)

37 a -37 c : エゴノキ属 枝・幹材 (SHIM-427), 38 a -38 c : トネリコ属 枝・幹材 (SHIM-486),
39 a -39 c : イボタノキ属 枝・幹材 (SHIM-360). a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×



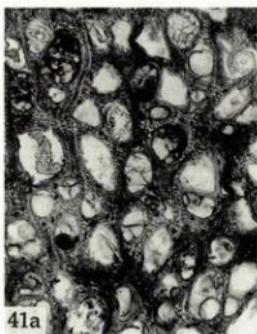
40a



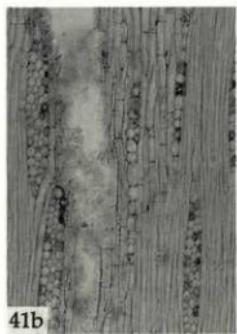
40b



40c



41a



41b



41c

図14. 島根大学構内遺跡第5・9次調査出土木材の顕微鏡写真 (14)

40a-40c : ニワトコ 枝・幹材 (SHIM-361), 41a-41c : 根材 1種 (SHIM-342), a : 横断面×40, b : 接線断面×100, c : 放射断面×200.

第6章 まとめ

第5次調査、第9次調査では、従来、未解明であった京田地区や諸田地区北部における遺跡の様相を知る上で期待が持たれた。後述する様に、調査区内は、地形的に居住域を成立させる環境でないため、出土遺物、遺構は希薄であったが、海成層（第4層）の徹底した掘り下げと大量の出土材樹種鑑定、花粉、有機元素分析等も手伝って、生態環境復元を機軸とした一定の成果を得ることが出来た。ここでは、主要な調査成果とその意義を総括しておきたい。

第1点は、第5次調査における、中期後半「里木II式」土器片や¹⁴C年代測定で 2870 ± 270 y.B.P.の結果を得た材を含む海成層（第4層）の検出によって、縄文晚期頃までは、調査区内が水域であったことが判明した点である。有機元素分析を機軸とした様田論文「第5章1」によれば、縄文前期に古穴道湾の水域内であった第5次調査区は、概ね縄文中期頃には浅い潮間帯水域になり始め（第5次調査区第4b層）、縄文中期後半ないしそれ以降は、第2^回・6・7^回・9次調査で検出した砂洲の伸長等が関与して、半ば閉塞的な水域（第5次調査区第4a層）に推移したとする。

第4層中からは、この他、土器片、石錘、石皿、自然礫等が出土しており、舟上から遺棄したものと考えられる。海成層中からの遺物出土は、本次調査区の南約150mに位置する諸田地区（第2・8次調査区等）からも、土器、磨石、メノウ片、礫等が認められており、付近の水域一帯における活発な漁撈活動や物資運搬の具体的な証拠を示す資料となった。

また、「第5章2」で報告された第5次調査区花粉分析によれば、縄文早期末～前期頃（SKP-IV带、第4e層～第4b層下部）は、マツ属、クマシデ属－アサダ属、アカガシ亞属、コナラ亞属、ムクノキ属－エノキ属、ニレ属－ケヤキ属が、縄文前期～晚期頃～？（SKP-III帶、第4b層～第3層、第2c層）は、アカガシ亞属が比較的高い出現率を示しており、概括的には二次林から極相林への変遷を示す結果となった。この現象と遺跡にみえる人類活動との相関を推察することは、今後の課題としておきたい。また、縄文前期～晚期頃（SKP-III帶、第4b層～第3層）では、トチノキ属がみられることも注意される。なお、周辺丘陵から比較的離れた沖積地にある第5次調査区の位置を斟酌すると、上記結果は、比較的広範囲の植生を示唆しており、このことは、材樹種鑑定で特に優先種が認められないこととも整合する。

第2点は、第5次調査区では、縄文晚期後半頃までは、完全に陸地化していたことである。すなわち、縄文晚期前半頃まで水域であった第5次調査区内は、堆積層によって縄文晚期のある時期には完全に湿地化していたと想定される。中海南東側の目久美遺跡⁽⁸⁾（鳥取県米子市）では、縄文晚期突堤文土器併行期まで水域であったのが、弥生前期に至って湿地化し、水田として利用されていた状況が判明している。島大構内では、今のところ、水田跡は未検出であるが⁽⁹⁾、近隣の西川津遺跡や島根大学構内遺跡（深町地区）⁽¹⁰⁾で予察される水稻農耕の基盤となつた古環境の推移が把握

された意義は、一定の成果を持とう。

第3点は、第5次調査区で北東から南西方向へ堆積した古墳時代後期と推定される河川性砂礫層（第2a層下位砂層）を検出したことである。この砂礫層中には、炭化した板材片等が含まれており、上流の北東側から供給されたものと想定している。今後の近隣調査によって、砂礫層の起源や、当該期の遺構の様相が明らかにされよう。主として、この砂礫層上面（第1層下面）からは、古墳後期以降の遺物が散在的に検出されており、長く生活面であったことが伺える。ただし、本遺跡内では、今のところ古墳時代の居住域、生産域は未検出であるため、著名な金崎古墳、薬師山古墳を始めとする諸古墳を造営到らしめた集団の所在を追求することが派生課題となる。

上記の成果を踏まえて、いずれ、遺跡内とその周辺における古環境変遷を視覚的に復元明示したいと考えている。

注

- (1) 中村唯史「第5章 地質学的調査による成果」『島根大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ（諸田地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- (2) 梶田植久「第5章1 地質学的検討からみた橋本地区の古環境」『島根大学構内遺跡第6・7次調査（橋本地区1・2）』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第3番 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1999年
- (3) 渡田竜彦編『日久美遺跡V・VI』財団法人米子市教育文化事業団文化財調査報告書25 財団法人米子市教育文化事業団 1998年
- (4) これまでに畦畔等は検出していない。花粉分析の結果も、海成層上位に堆積した湿地性堆積層（第1次調査区第3層・第5次調査区第3層）や河川性？粘土層（第5次調査区第2層）中における積極的な稲作の証拠を示唆していない。
川崎地質株式会社「第6章1 橋繩手地区における花粉・珪藻分析（概報）」『島根大学構内遺跡第1次調査（橋繩手地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第1番 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997年 本書第5章2
- (5) 第3次調査区（深町地区1）で、弥生中期初頭に比定される流路状遺構、小溝等が検出されている。
会下和宏編『島根大学構内遺跡第3次調査（深町地区1）』島根大学埋蔵文化財調査研究報告第2番 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1998年



1. 第1層下面全景（南から）



2. 調査区西壁断面（調査区北西部、南西から）



1. 遺物出土状態（第4a層、図13-1）



2. 遺物出土状態（第4b層、図13-2）



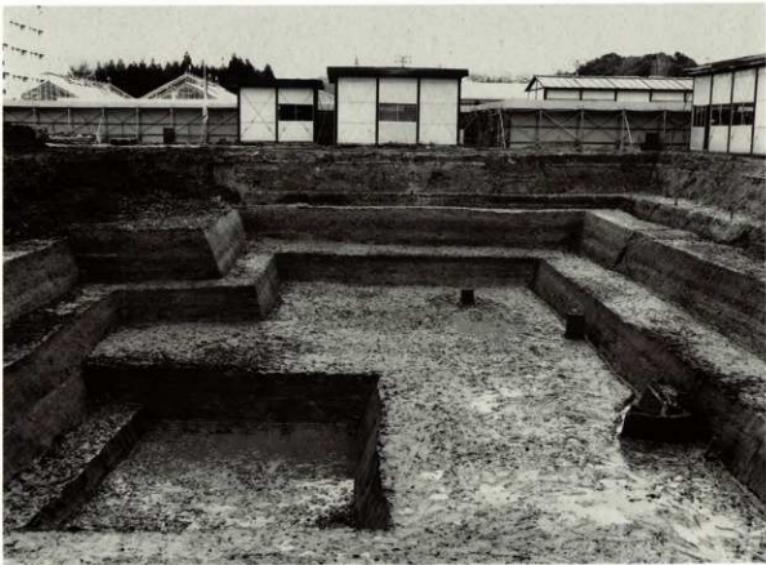
1. 遺物出土状態（第4 b層、図13-6）



2. 第4 b層掘り下げ状況（調査区南東部、東から）



1. 自然木出土状態（第4 b層、SHIM-465、北から）



2. 挖り下げ後状況（調査区東半部、南から）



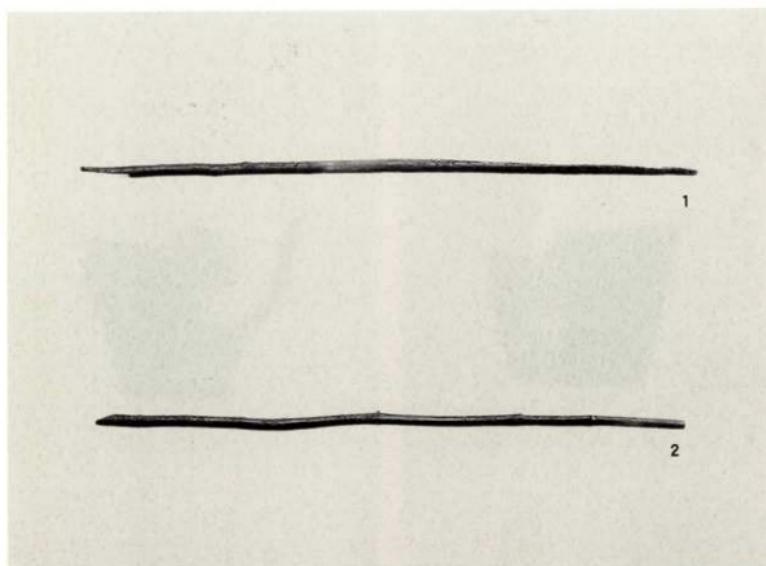
1. 第4層出土土器 (1/3)



2. 第3層上面出土土器 (1/3)



3. 第4層・第3層出土遺物 (1/3)

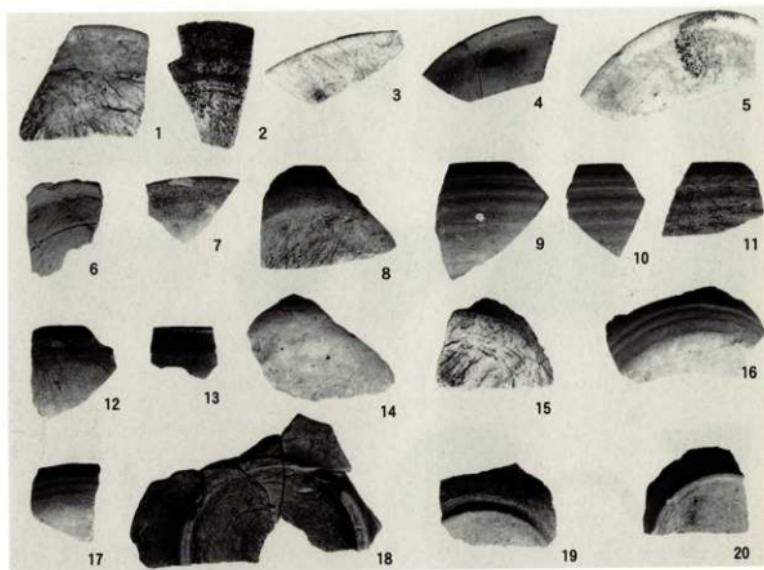


1. 第4層出土木製品 (1/10)

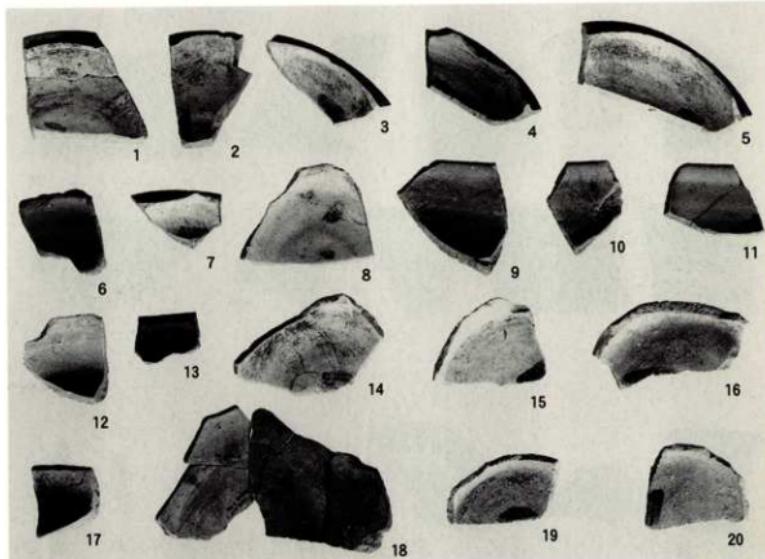


2. 第4層出土木製品 (1/3)

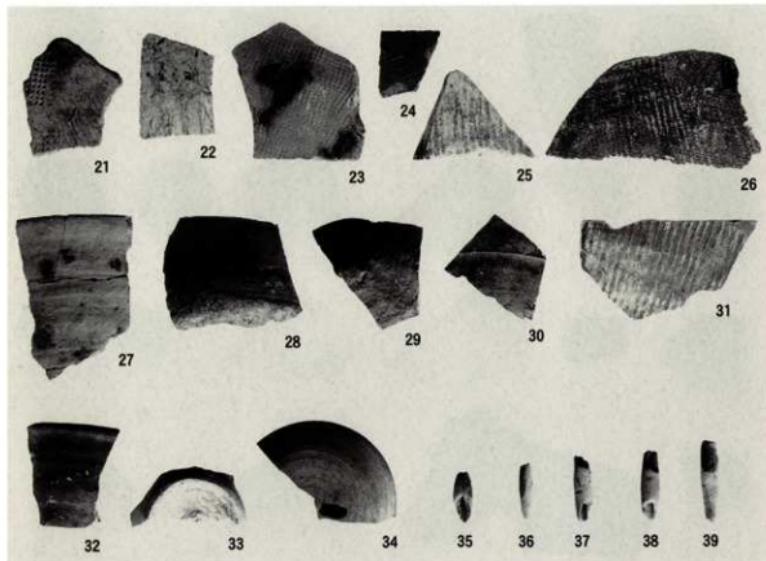
図版七 遺物（第五次調査）



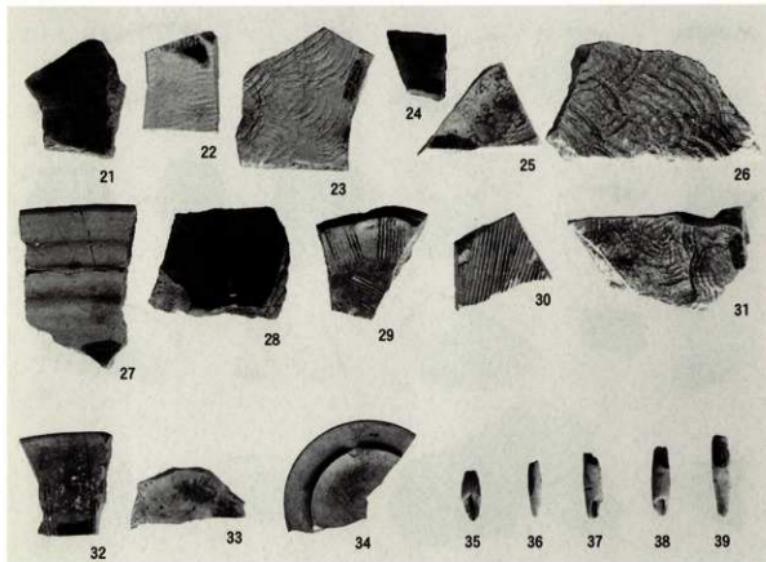
1. 第2a層・第1層下面出土土器（外面、1／3）



2. 第2a層・第1層下面出土土器（内面、1／3）



1. 第1層・第1層下面出土遺物（外面、 $1/3$ ）



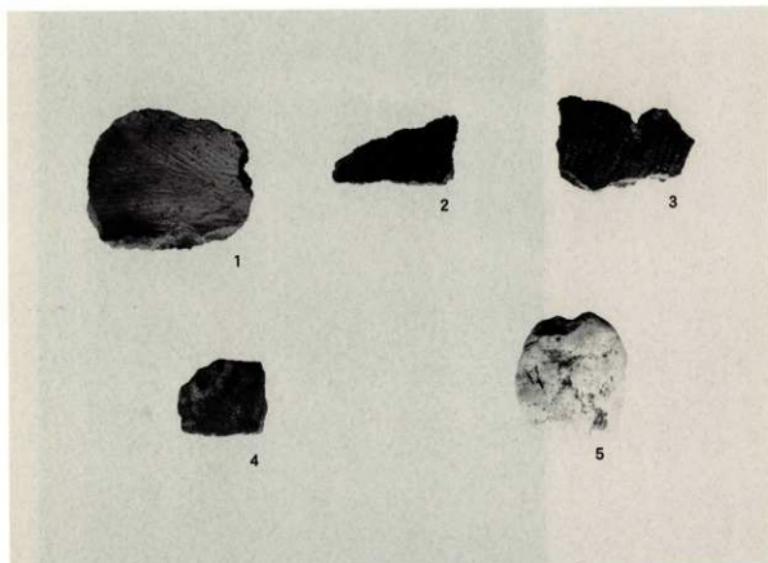
2. 第1層・第1層下面出土遺物（里面、 $1/3$ ）



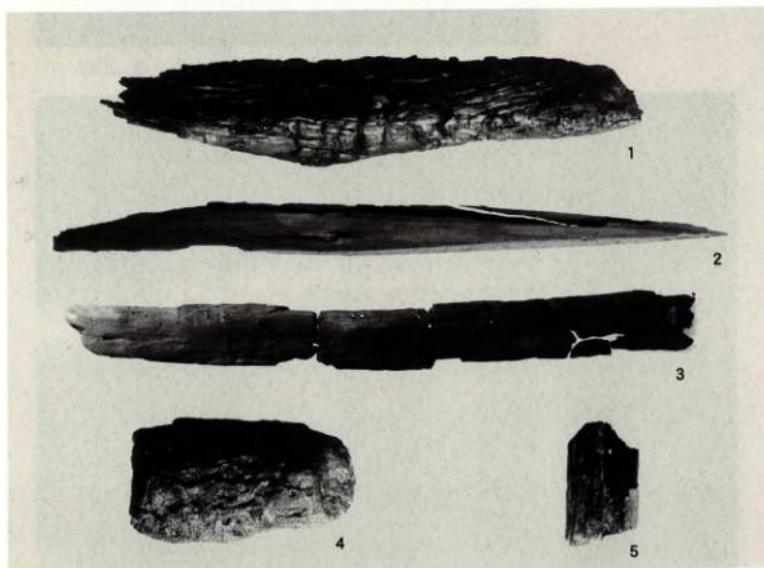
1. 自然流路(U・1～2グリッド、第3層上面、北西から)



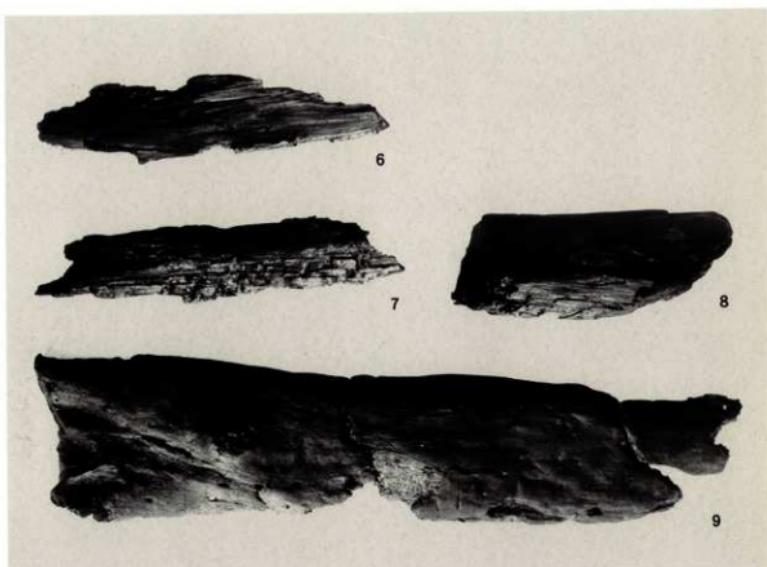
2. 調査区東壁断面(C～Dグリッド、西から)



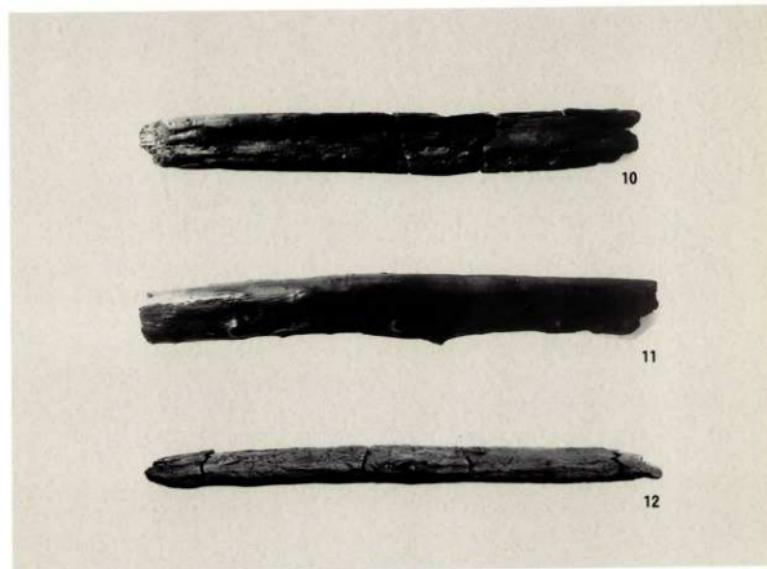
1. 第4層出土遺物 (1／3)



2. 第4層出土木製品 (1／3、3は1／4)



1. 第4層出土木製品 (1/3)



2. 第4層出土木製品 (1/6)

島根大学埋蔵文化財調査研究報告 第4冊
島根大学構内遺跡第5・9次調査
(京田地区1・諸田地区4)

発行日 1999年3月31日

編集発行 島根大学埋蔵文化財調査研究センター

住 所 島根県松江市西川津町1060
〒690-8504 TEL (0852) 32-6496

印 刷 ㈲ 黒 潮 社
島根県松江市向島町182-3
